

天野山金剛寺遺跡

府営長野公園キャンプ場の機能復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、市域を高野街道を初めとする街道が通り、南河内における交通の要衝として発展してきた街です。このため、市内には金剛寺、観心寺などの寺社に代表される重要文化財や多くの埋蔵文化財が残されています。

このような河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、近年になって住宅都市として急速に開発が進んでいます。

開発がもたらす影響は自然や文化財には大きなものです。とくに埋蔵文化財にとっては直接的に関わってくるものとして大きな問題でもあります。

開発を必要とすると同時に、失われていく遺跡に託された先人達のメッセージを現在の市民、さらには未来の市民へと伝えていかなければなりません。

本書は河内長野市に存在する遺跡の発掘調査の成果を収録しています。先人達が残したメッセージの一部でも感じていただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深い御理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成9年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾謙二

例　　言

1. 本報告書は平成7・8年度に河内長野市遺跡調査会が大阪府から委託を受けた天野山金剛寺遺跡（KG T95-1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は河内長野市教育委員会社会教育課文化財保護係主査尾谷雅彦が主担し、外業調査は主に中尾智行（現同係嘱託）、内業整理は同嘱託中西和子を担当者として実施した。
3. 調査にかかる事務は調査会事務局長（社会教育課課長補佐兼務）濱田宗良が主担した。
4. 本書の執筆および編集は中尾智行が担当した。本書の文責は中尾が負うものである。
5. 発掘調査および内業整理については下記の方々の参加を得た。

喜多順子・小森光・阪木しづこ・重野真紀・杉本祐子・田川富子・辻野秀之・中村嘉彦・林和宏・東田幸子・藤井美佐子・古池陽子・枡本裕子・間瀬未明・松尾和代・牟田口京子・株式会社島田組（敬称略）

6. 遺物および遺構の一部の写真は中西が撮影した。
7. 発掘調査および内業整理については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。
天野山金剛寺・大阪府富田林土木事務所（敬称略）
8. 本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本報告書に記載されている標高は T.P. を基準としている。
2. 土色は『新版標準土色帖』による。
3. 平面測量は国家座標第VI系による 5 m メッシュを基準に実施した。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

S B … 建物 S D … 溝 S E … 井戸 S K … 土坑 S L … 埋甕
S P … ピット S W … 石列 N R … 自然流路 N V … 落ち込み

6. 文中の瓦器塊の型式分類は尾上実氏の和泉型瓦器塊の編年に基づき、その実年代は森島康男氏によって見直されたものに基づくものである。なお器種名については調査会の表記によるものとする。
7. 文中の土釜の型式分類は菅原正明氏の土釜の編年に基づくものである。
8. 文中の備前甕の型式分類は間壁忠彦氏の備前焼の編年に基づくものである。
9. 遺構実測図の縮尺は、1/30・1/40・1/60とした。
10. 遺物実測図の縮尺は、1/4・1/6・1/10とした。
11. 瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器の断面は黒塗り、土師質土器の断面は白抜きである。
12. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。

目 次

序文	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 位置と環境	1
1 位置	1
2 歴史的環境	4
第3節 調査地の概要	5
第2章 調査の結果	7
第1節 第1調査区	7
第2節 第2調査区	10
第3節 第3調査区	18
第4節 第4調査区	20
第5節 第5調査区	23
第6節 第6調査区	33
第7節 第7調査区	35
第8節 第8調査区	40
第9節 第9調査区	42
第3章 出土遺物	45
第4章 まとめ	51
第1節 調査の成果	51
第2節 考察	52
1 第2調査区で検出された焼土層について	52
2 天野山金剛寺遺跡出土の埋甕遺構について	52

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)	2
第3図 調査区位置図 (1/4000)	6
第4図 第1調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	7
第5図 S W 1 遺構実測図 (1/30)	8
第6図 S W 1 出土遺物実測図	8
第7図 N V 1 出土遺物実測図	9
第8図 包含層出土遺物実測図	9
第9図 第2調査区 遺構配置図(1/60)	10
第10図 第2調査区 土層断面実測図 (1/60)	11
第11図 S B 1 遺構実測図 (1/60)	11
第12図 S B 2 遺構実測図 (1/60)	11
第13図 S P 1～4 出土遺物実測図	12
第14図 N V 2 遺物出土状況図 (1/40)	13
第15図 N V 2 出土遺物実測図 1	13
第16図 N V 2 出土遺物実測図 2	14
第17図 N V 2 出土遺物実測図 3	15
第18図 N V 2 出土遺物実測図 4	16
第19図 包含層① (=焼土層1) 出土遺物実測図	17
第20図 包含層② (=焼土層2) 出土遺物実測図	17
第21図 第3調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	18
第22図 S E 1 および包含層出土遺物実測図	19
第23図 第4調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	20
第24図 S D 3・5・7 出土遺物実測図	21
第25図 S K 1 遺構実測図 (1/30)	21
第26図 S K 1・2 出土遺物実測図	22
第27図 包含層出土遺物実測図	22
第28図 第5調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	23
第29図 S E 2 遺構実測図 (1/30)	24
第30図 S E 2 出土遺物実測図	24
第31図 N R 1 遺物出土状況図 (1/30)	24
第32図 N R 1 出土遺物実測図 1	25

第33図	N R 1 出土遺物実測図 2	26
第34図	N R 1 出土遺物実測図 3	27
第35図	N R 1 出土遺物実測図 4	28
第36図	包含層出土遺物実測図 1	29
第37図	包含層出土遺物実測図 2	30
第38図	包含層出土遺物実測図 3	31
第39図	包含層出土遺物実測図 4	32
第40図	第 6 調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	33
第41図	S K 4 遺構実測図 (1/30)	33
第42図	S K 5 遺構実測図 (1/30)	34
第43図	S K 5 出土遺物実測図	34
第44図	S P 5・6 出土遺物実測図	34
第45図	包含層出土遺物実測図	34
第46図	第 7 調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	35
第47図	S D 8 遺構実測図 (1/40)	36
第48図	S D 8 出土遺物実測図	36
第49図	S L 1 遺構実測図 (1/30)	37
第50図	S L 1 埋甕実測図	37
第51図	S L 2 遺構実測図 (1/30)	37
第52図	S L 2 埋甕実測図	37
第53図	S L 3・4 遺構断面実測図 (1/40)	38
第54図	S L 1～4 出土遺物実測図	38
第55図	包含層出土遺物実測図	39
第56図	第 8 調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	40
第57図	S K 6・7 出土遺物実測図	41
第58図	S P 7 出土遺物実測図	41
第59図	包含層出土遺物実測図	41
第60図	第 9 調査区 遺構配置図および土層断面実測図 (1/60)	42
第61図	S K 8～10 遺構断面実測図 (1/40)	43
第62図	包含層出土遺物実測図	43

表 目 次

第 1 表	河内長野市遺跡地名表	3
-------	------------	---

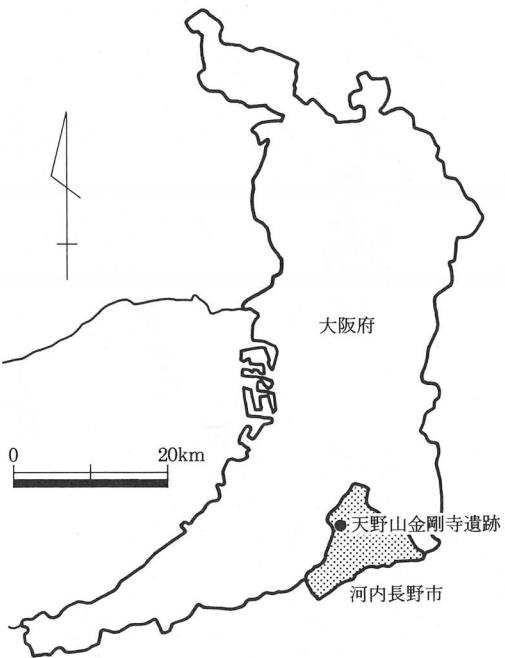
図 版 目 次

- 図版1 遺構 第1調査区全景（北西から） 第1調査区全景（南から）
図版2 遺構 第2調査区全景（北西から） 第2調査区全景（南西から）
図版3 遺構 第3調査区全景（北西から） 第3調査区全景（南東から）
図版4 遺構 第4調査区全景（北から） 第4調査区全景（南から）
図版5 遺構 第5調査区全景（南東から） S E 2（南から）
図版6 遺構 S E 2 遺物出土状況 N R 1 遺物出土状況（南西から）
図版7 遺構 第6調査区全景（北西から） 第6調査区全景（南西から）
図版8 遺構 第7調査区全景（北西から） 第7調査区全景（北東から）
図版9 遺構 S D 8（北東から） S L 1・2（西から）
図版10 遺構 S L 2（南東から） 第8調査区全景（西から）
図版11 遺構 第9調査区全景（西から） 第9調査区全景（南から）
図版12 遺物 S W 1（1・2）、N V 1（3）、第1調査区包含層（6～8）、S P 2
(11)、S P 3（9・10・13・15）、N V 2（17・20・22・24・27・31～33・
37・40～43）
図版13 遺物 N V 2（44～47・49・56・59・61・64・66・69・74・79・87・88・90・
103）
図版14 遺物 N V 2（104～106・108～110・131～134・147～153）
図版15 遺物 第2調査区包含層①（＝焼土層1）（154・162・163）、S E 1（168）、第
3調査区包含層（169・170）、S D 3（175）、S D 5（172）、S D 7（173）、
S K 1（184）、S K 2（178・180）、第4調査区包含層（185～191）、S E
2（192～196）
図版16 遺物 S E 2（197・198）、N R 1（199～203・205・215～220・222～224）
図版17 遺物 N R 1（225～228・242～246・266・269・271・276・279・282～284）
図版18 遺物 N R 1（285・286）、第5調査区包含層（293・295・298・319・320・363
～366・371・377）
図版19 遺物 第5調査区包含層（386・388～390・393・396・398～401・403・404）、S
K 5（405～407・409）、S P 5（411）、第6調査区包含層（412・413・
415・418～420）、S D 8（421～424）、S L 2（436）、S L 4（433・435）、
第7調査区包含層（440～442）
図版20 遺物 S L 1（428・437）、S L 2（429・438）、第7調査区包含層（439）、S K
6（443・446～449）、第8調査区包含層（453・457・460～462）
図版21 絵図 金剛寺境内図

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

当調査は、原因者である大阪府富田林土木事務所による一般国道170号府営長野公園キャンプ場の機能復旧工事に伴って実施した。工事予定地は埋蔵文化財包蔵地である天野山金剛寺遺跡内に位置するため、大阪府富田林土木事務所・大阪府南部公園事務所・河内長野市教育委員会の事前協議の結果、工事施工箇所で現況地形の切土造成を計画している部分について、工事着手前に発掘調査を実施し記録保存との結論に至った。これを受け平成7年6月2日に原因者から文化財保護法第57条の3の通知が提出された。調査については市教育委員会の指導の下、河内長野市遺跡調査会が実施することになり、大阪府と同調査会が平成8年2月1日に委託契約を締結した。外業調査(発掘調査)を平成8年2月1日から平成8年3月29日、内業整理を平成8年4月1日から平成9年3月31日にかけて行い、委託業務にかかる全ての調査を完了した。



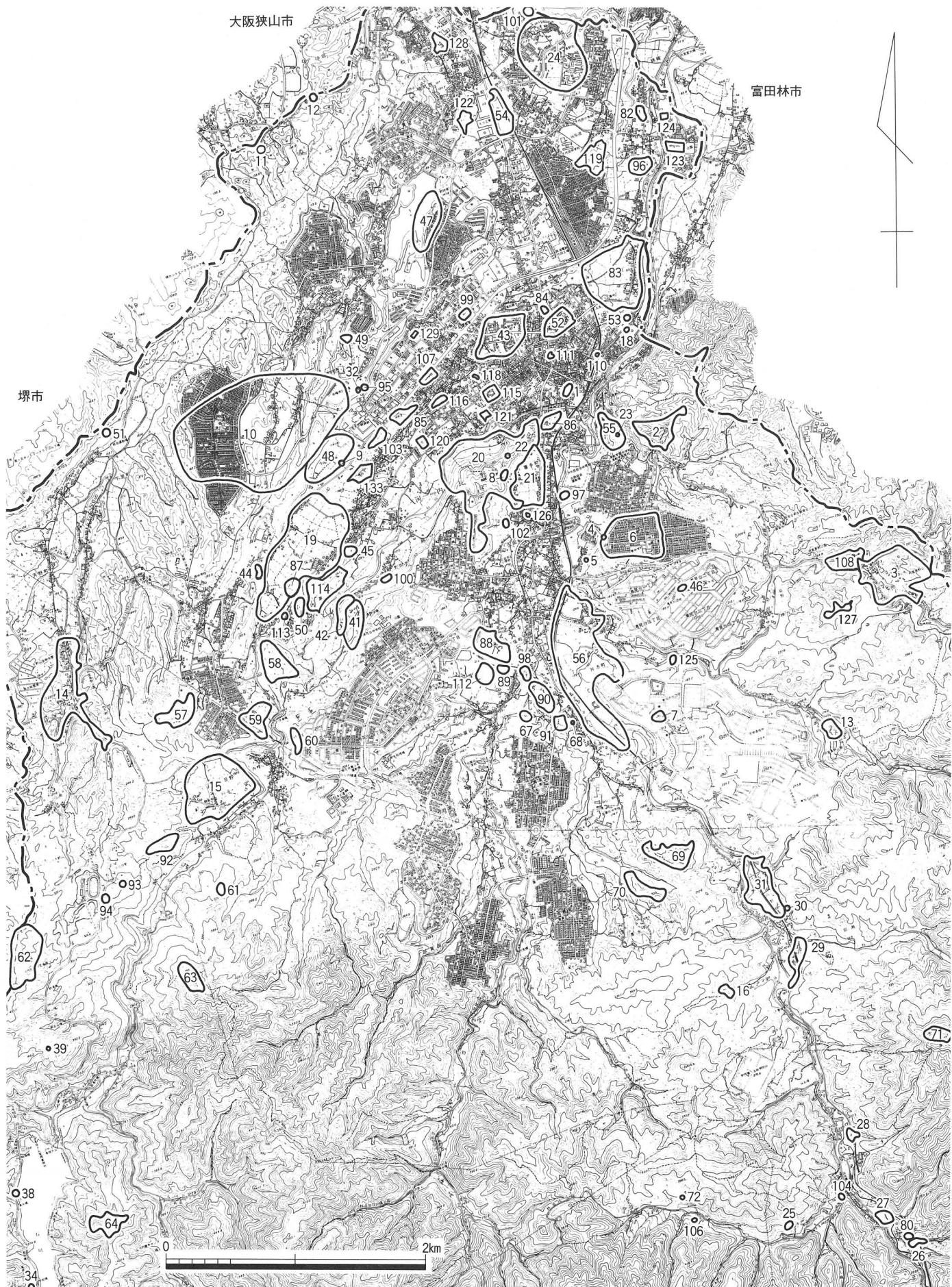
第1図 遺跡位置図

第2節 位置と環境

1 位置

当該遺跡は大阪府河内長野市天野町に位置し、標高は約180mを測る。遺跡は和泉葛城山系より北方に派生する丘陵部を源とする西除川によって形成された開析谷に、国史跡天野山金剛寺境内を中心として南北800mにわたって広がる。

和泉山脈、金剛山地に源を発する石川の各支流や西除川は狭小な河谷を形成しながら北流する。河内長野市はこれら河川によって作られた開析谷や河岸段丘上に集落が発達している。特に中心となる長野や三日市は谷口の集落として、また、各谷筋を通る街道の要衝として発達してきたものである。



第2図 河内長野市遺跡分布図(1/40000)

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町
2	河合寺	社寺	
3	觀心寺	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落	弥生（後期）
7	興禪寺	社寺	
8	鳥帽子形八幡神社	社寺	室町
9	塚穴古墳	古墳	古墳（後期）
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺	社寺	
14	金剛寺	社寺	平安以降
15	日野觀音寺遺跡	社寺	中世
16	地藏寺	社寺	
(17)	岩湧寺	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	鳥帽子形城跡	城館	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	繩文・中世
22	鳥帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	
24	塙谷遺跡	散布地	繩文～中世
25	流谷八幡神社	社寺	
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	散布地	中世
30	岩瀬乘師寺	墳墓	近世
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
34	滝畠埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村觀音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村觀音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳？	古墳
42	宮山遺跡	散布地	繩文・中世
43	西代藩陣屋跡	城館	江戸
		散布地	飛鳥～奈良
44	上原町墓地	墳墓	
45	惣持寺跡	社寺	鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	繩文
48	上原遺跡	散布地	繩文～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	
50	高向神社遺跡	社寺	中世
51	青が原神社遺跡	社寺	
52	膳所藩河州出張所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地	繩文～中世
55	河合寺城跡	城館	
56	三日市遺跡	集落	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	室町
58	高木遺跡	散布地	繩文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稻荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗藏城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	
(66)	葛城第15経塚	経塚	

番号	文化財名称	種類	時代
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世
68	庚申堂	社寺	
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	
(73)	葛城第18経塚	経塚	
(74)	葛城第19経塚	経塚	
(75)	笛尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	
(78)	光滝寺	社寺	
(79)	狼子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	
(81)	川上神社遺跡	社寺	
82	千代田神社遺跡	社寺	
83	向野遺跡	集落	繩文・生産
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺	弥生・中世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塙遺跡	集落	繩文～奈良
89	加塙遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	散布地	古墳
99	西之山町遺跡	集落	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚	墳墓	
(105)	葛城第17経塚	経塚	
106	乘師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	集落	中世
108	寺元遺跡	集落	奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	
111	山上講山古墳跡	古墳	
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	中世
118	錦町北遺跡	社寺	弥生・中世
119	市町西遺跡	散布地	繩文・中世
120	栄町南遺跡	散布地	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世
127	三昧城遺跡	城館	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第1表 河内長野市遺跡地名表

2 歴史的環境

遺跡もまた、谷筋ごとに分布している。縄文時代の遺跡は最近増加しているが、石川本流から天見川沿いに北から向野遺跡、喜多町遺跡、三日市遺跡、小塩遺跡の4遺跡があり、後期を中心とする土器が出土している。また、石川本流には高向遺跡や宮山遺跡があり、宮山遺跡からは中期後半の土器とともに竪穴住居も確認されている。さらに、三日市遺跡や小塩遺跡からは早期の押型文土器が出土している。これらの遺跡以外に高木遺跡、寺ヶ池遺跡、菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が出土している。

弥生時代は石川左岸の塩谷遺跡や天見川右岸の三日市遺跡から中期の遺物が、大師山遺跡からは後期の遺物が出土している。

古墳時代は天見川を見下ろす位置に前期の前方後円墳である大師山古墳、中期の三日市遺跡の古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。石川本流の向野町から寿町にかけては五ノ木古墳、法師塚古墳、双子塚古墳などの古墳が分布している。また、石川左岸の上原町には塚穴古墳が現存している。集落遺跡では、前期から中期にかけては天見川沿いに三日市遺跡があり、後期前半では同じく天見川沿いに喜多町遺跡、小塩遺跡、加塩遺跡がある。

奈良時代になると、高向遺跡や喜多町遺跡、小塩遺跡から掘立柱建物や土坑が検出されている。また、本市と大阪狭山市との市境の小山田町からは2基の火葬墓が発見されている。

平安時代では向野遺跡、10世紀の掘立柱建物が発見された天見川沿いの尾崎遺跡、11～12世紀の掘立柱建物が検出された三日市遺跡、そして石川本流の野間里遺跡が確認されている。また市内にある觀心寺や金剛寺などの寺院は平安時代末ごろから伽藍が整い、多くの荘園を有していた。

中世になると、交通路が整備され各谷筋を通る高野街道や天野街道沿いに集落が分布している。特に西高野街道では北から菱子尻遺跡や吉野町遺跡があり、東高野街道では向野遺跡がある。西、東が一つとなって天見川沿いを南に伸びる高野街道では合流付近の長野神社遺跡や喜多町遺跡、さらに南に三日市遺跡、尾崎遺跡、ジョウノマエ遺跡、清水遺跡、千早口駅南遺跡(寺院跡も含む)、天見川北方遺跡、蟹井淵北遺跡、蟹井淵南遺跡と続く。これらは明らかに街道と共に発達した遺跡である。集落跡以外では、同じように街道を見下ろす尾根上に南北朝から戦国時代にかけての城塞が20数ヶ所分布している。生産遺跡としては平安時代から中世にかけての炭焼窯と思われる窯跡が市内の山間部に分布している。

近世になると近江膳所藩や河内西代藩の陣屋跡があり、さらに確認数は少ないが近世瓦窯跡も地元の伝承どおり確認されている。

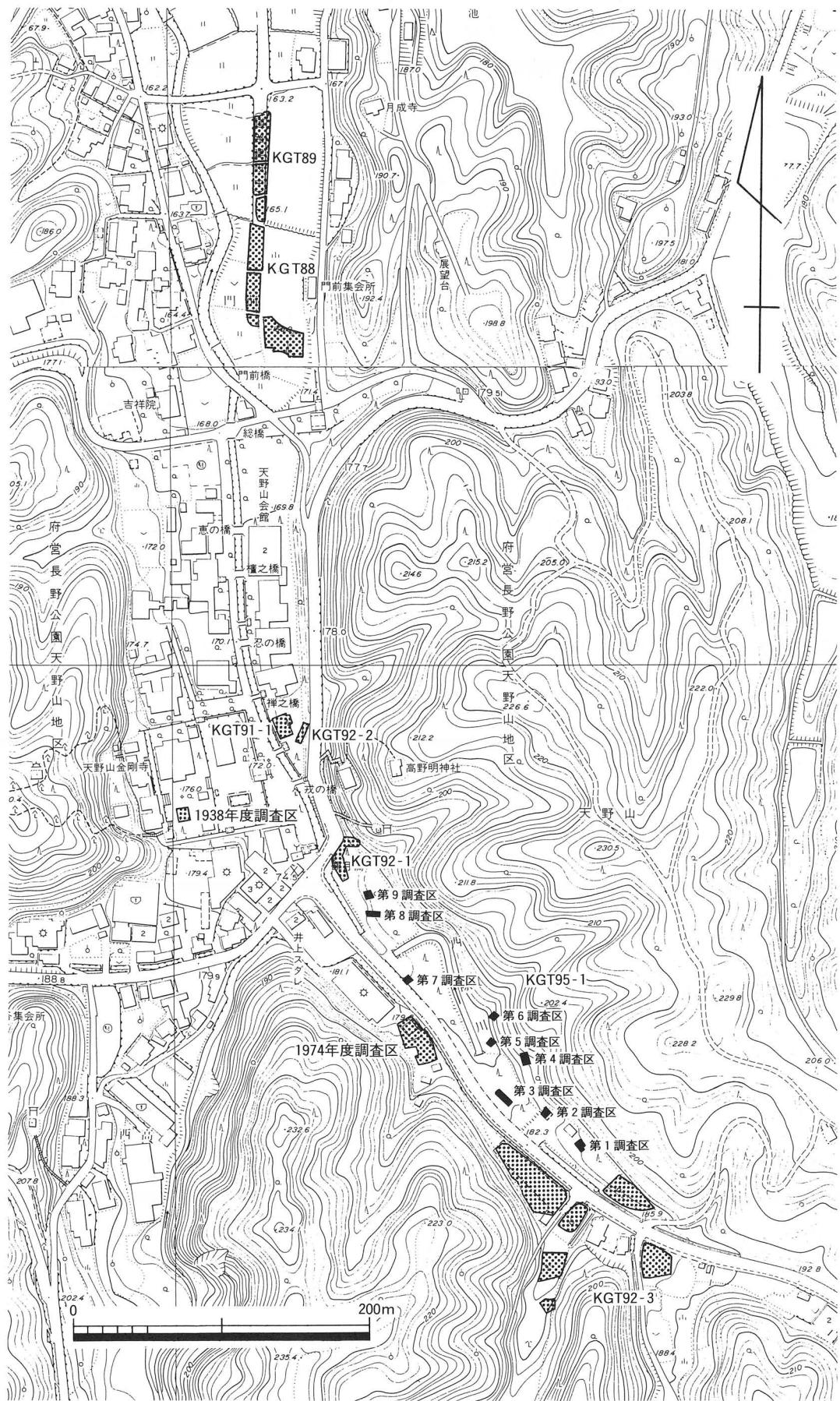
このような歴史的環境の中で天野山金剛寺遺跡の周囲には、寺院遺跡として南東0.8kmには日野観音寺遺跡があり、北東2.4kmには鎮壇具が出土した惣持寺跡が位置する。集落遺跡では北東1.6kmに旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である高向遺跡がある。ま

た中世城郭では東方1.0kmに日の谷城跡、1.5kmに汐の山城跡、1.8kmに峰山城跡、南方1.4kmに仁王山城跡、1.9kmに稻荷山城跡、2.2kmに国見城跡、2.4kmに旗蔵城跡がある。

第3節 調査地の概要

調査地は国史跡金剛寺境内の南東に広がる開析谷に位置する。この開析谷においては3次にわたる発掘調査が行われており、14世紀から15世紀にかけての遺構・遺物が検出されている。今次の調査地は西除川右岸の中心地にあたり、現在までの調査の空閑地にあたる場所であった。地形状況も削平を受けた様子がなかったため、遺構の存在はほぼ確実と思われた。

調査は第1から第9調査区までの9地点を設定し実施した。第7調査区を除く8地点は現況の西除川の東岸に位置する。西除川は狭隘な小谷を直線的に北西方向に流れるが、ある地点で東寄りに屈曲し、弧を描いて元の直線的な河道に戻るところがある。その河道の屈曲は金剛寺所蔵の『金剛寺境内図（製作年代不明）』（図版21）にも描かれており、水位や治水事業などで多少の移動はあるにしても、過去においての河道も現況と大差ないものと思われる。



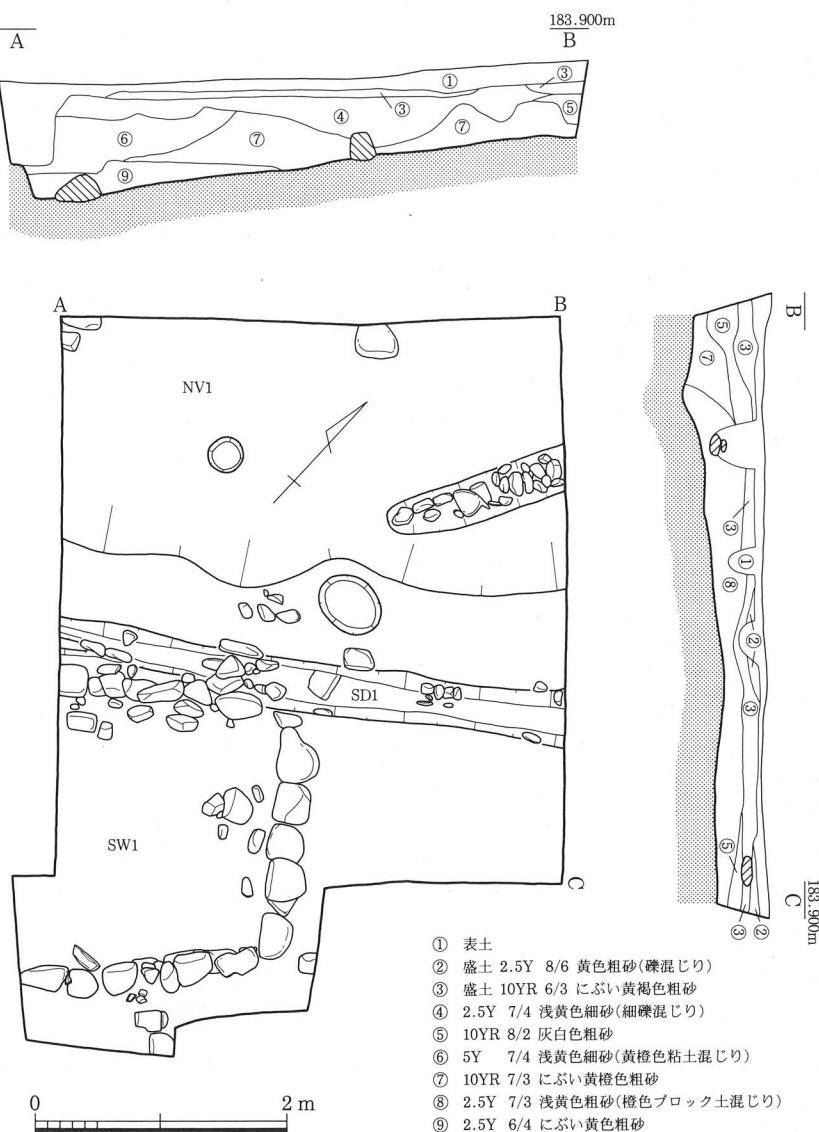
第3図 調査区位置図(1/4000)

第2章 調査の結果

第1節 第1調査区

第1調査区（第4図、図版1）は9つの調査区の中で最も南側に位置する。西除川に面して狭いテラス状に張り出した山裾である。『金剛寺境内図』（以下、絵図と略す）を見ると南西側（右下）の西除川に沿って建物が描かれている地点にあたる。

当調査区では溝1条、石列1ヵ所の他、落ち込みの一部が検出された。



第4図 第1調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

(1) 溝

S D 1

[S D 1]

S D 1 は調査区を北東側から南西側に向けて横切っており、両端は調査区外に及んでいる。流方向から西側の西除川に連結していたものと思われる。規模は検出長4.1m、幅0.45m、深さ0.04~0.09mを測る。

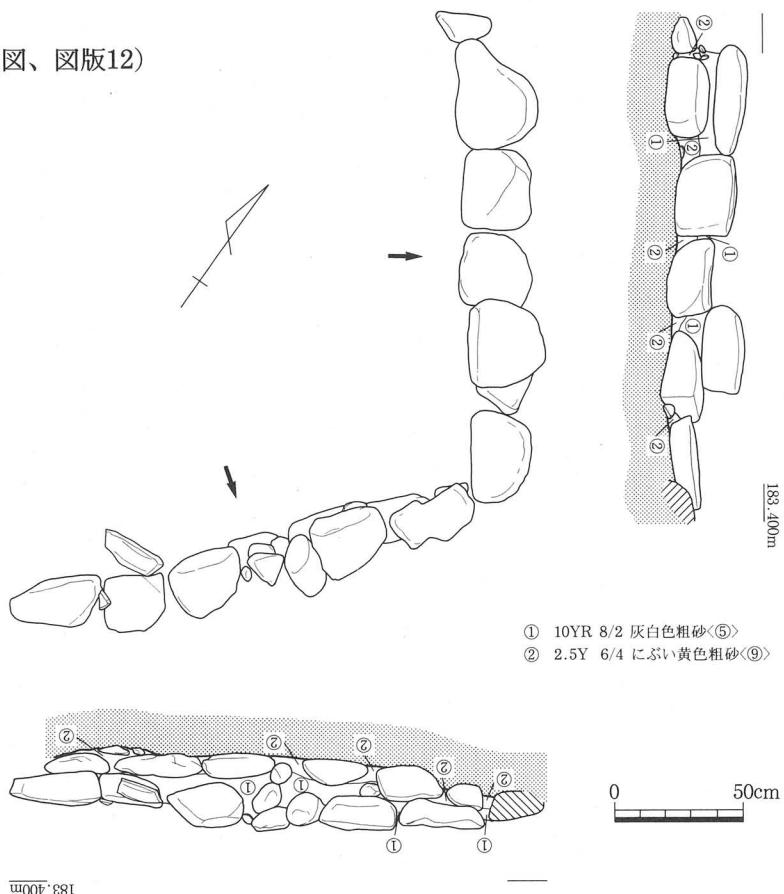
遺物は出土しなかったが、埋土には炭化物が多く含まれていた。

(2) 石列

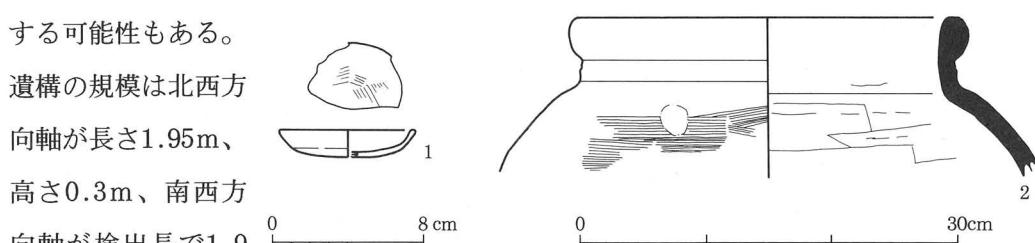
S W 1

[S W 1] (第5・6図、図版12)

S W 1 は調査区の南側に位置する。北西方向軸と南西方向軸が連結し、平面形はL字形を成すが連結点は直角ではない。北西方向軸の北側は S D 1 に切り込まれているかのように見えるが、その地点から南西に向かって、 S D 1 の肩付近に大小の川原石が列を成すように出土している。これを S W 1 に伴うものとすると平面形はコの字形を呈する可能性もある。遺構の規模は北西方向軸が長さ1.95m、高さ0.3m、南西方向軸が検出長で1.9m、高さ0.3mである。



第5図 SW 1 遺構実測図(1/30)



第6図 SW 1 出土遺物実測図

使用された石はすべて川原石で、最大44×33×12cmを測り、面を内側に揃えて最高二段積んでいる。また、面を揃えた内側には火を受けた痕跡が認められる。

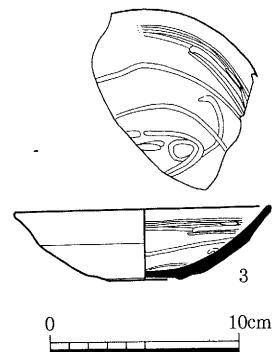
石列の内側の面に沿って土師質皿(1)、備前甕(2)が出土した。

(3) 落ち込み

[NV1] (第7図、図版12)

NV1は調査区北東側から南西側に向かって落ちる。おそらく西側の西除川に連結するものと考えられる。急角度で落ちていることや埋土の状況から、恒常的に水位のある流路ではなく、降雨時などに山側からの流路として自然形成されたものと考えられる。

出土した遺物には瓦器塊(3)があった。

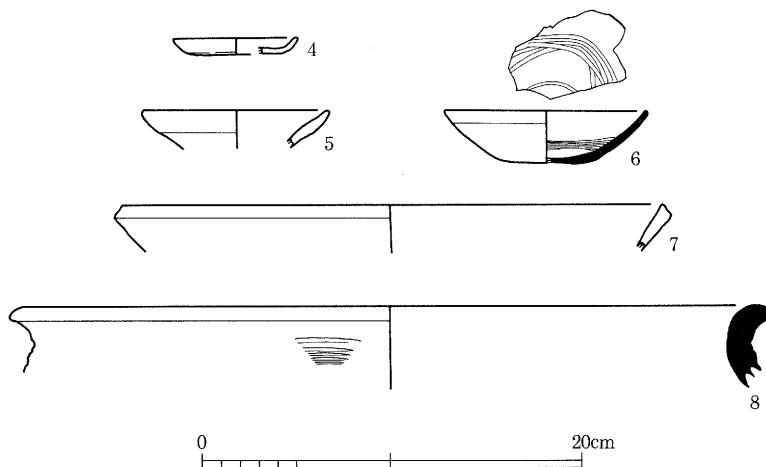


第7図 NV1出土遺物実測図

(4) 包含層(第8図、図版12)

包含層

包含層から出土した遺物には土師質皿(4・5)、土師質鉢(7)、瓦器塊(6)、瓦質甕(8)があった。



第8図 包含層出土遺物実測図

第2節 第2調査区

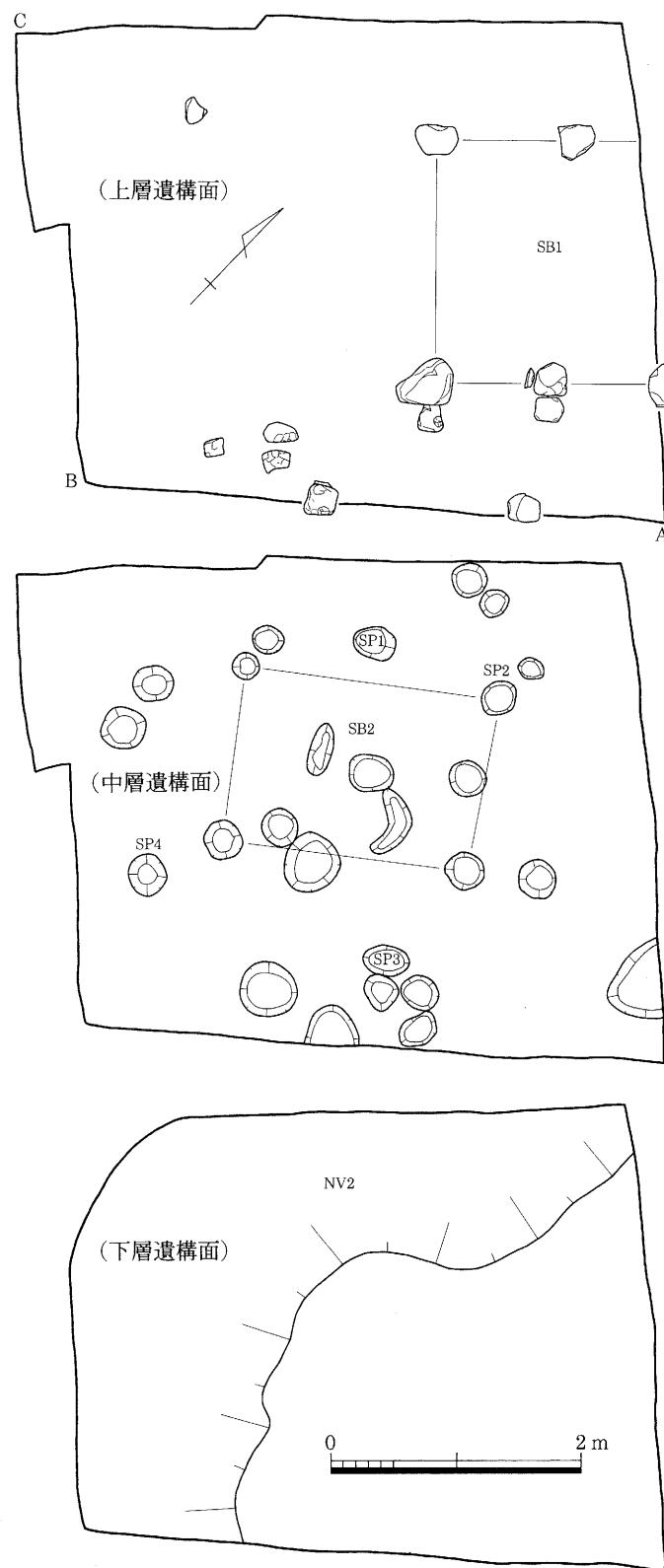
第2調査区(第9図、図版2)は西除川に平行して、第1調査区の北西側25mに位置する。絵図では第1調査区と同じく西除川右岸に建物が描かれている地点にあたる。

当調査区では3面の遺構面が検出された。上から順に上層遺構面、中層遺構面、下層遺構面とする。

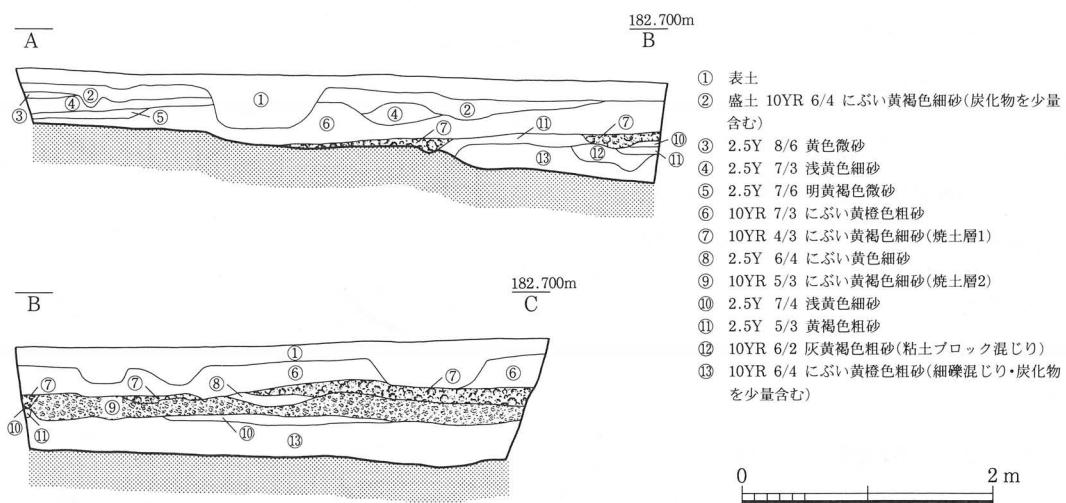
基本層序は表土を剥ぐと、⑥にぶい黄橙色の粗砂層があり、その下に⑦にぶい黄褐色細砂の焼土層1がある。その下には⑨にぶい黄褐色の焼土層2があり、その下に炭化物を少量含む⑬にぶい黄橙色の細礫混じり粗砂層がある。

上層遺構面は⑨の上面、中層遺構面は⑬の上面および地山上面、下層遺構面は地山上面でそれぞれ検出された。中層遺構面は下層遺構面で検出された落ち込みを人為的に埋め、整地した後に営まれているものと考えられる。

出土した遺物から、上層遺構面は15世紀中頃、中層・下層遺構面には大きな時期差はなく、14世紀初め頃から14世紀中頃にかけて営まれたものと思われる。



第9図 第2調査区 遺構配置図(1/60)



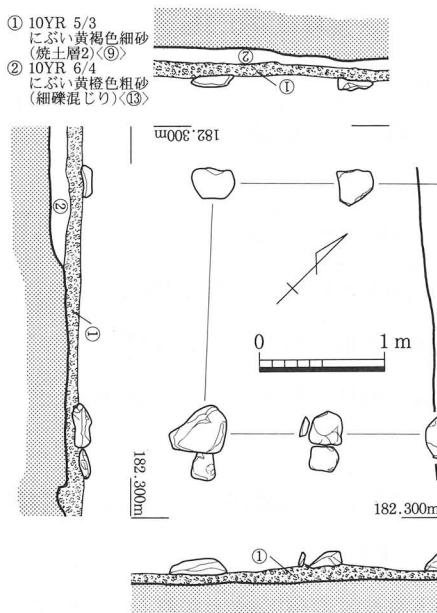
第10図 第2調査区 土層断面実測図(1/60)

【上層遺構面】

(1) 磐石建物

[S B 1] (第11図)

S B 1は調査区北東側で検出された。桁行2間(1.85m)以上×梁行1間(2m)の磐石建物で、桁行方向はN-45°-Eを示す。北東側は調査区外に及んでいて全体の規模は明確でない。磐石は平たい川原石で、火を受けた痕跡が認められた。この磐石は⑨の上面で検出された。最大のもので、44×38×12cmを測る。



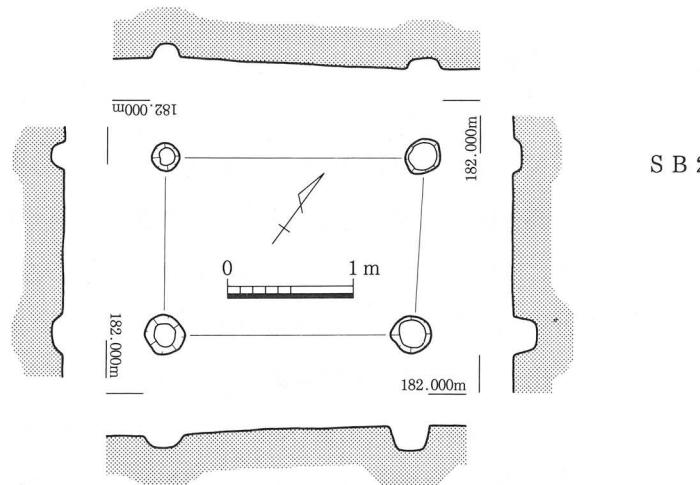
第11図 S B 1 遺構実測図(1/60)

【中層遺構面】

(1) 掘立柱建物

[S B 2] (第12図)

S B 2は調査区中央で検出された。桁行1間(2m)×梁行1間(1.4m)の掘立柱建物である。桁行方向はN-54°-Eを示す。柱穴の規模は、径0.22~0.32m、深さは0.07~0.18mを測る。



第12図 S B 2 遺構実測図(1/60)

(2) 遺物出土ピット

S P 1

[S P 1] (第13図)

S P 1は調査区中央北西側で検出された。平面形はわずかに橢円形を呈し、規模は長径0.34m、短径0.26m、深さ0.15mを測る。

出土した遺物には瓦質土釜(16)があった。

S P 2

[S P 2] (第13図、図版12)

S P 2は調査区北側で検出された。S B 2の北隅の柱穴にあたる。平面形は円形を呈し、規模は径0.3m、深さ0.04mを測る。

出土した遺物には瓦器塊(11)があった。

S P 3

[S P 3] (第13図、図版12)

S P 3は調査区中央南東側で検出された。平面形は橢円形を呈し、規模は長径0.37m、短径0.24m、深さ0.06mを測る。

S P 4

出土した遺物には土師質皿(9・10)、瓦器塊(13~15)があった。

[S P 4] (第13図)

S P 4は調査区南側で検出された。平面形は円形を呈し、径0.34m、深さ0.14mを測る。

出土した遺物には瓦器塊(12)があった。

【下層遺構面】

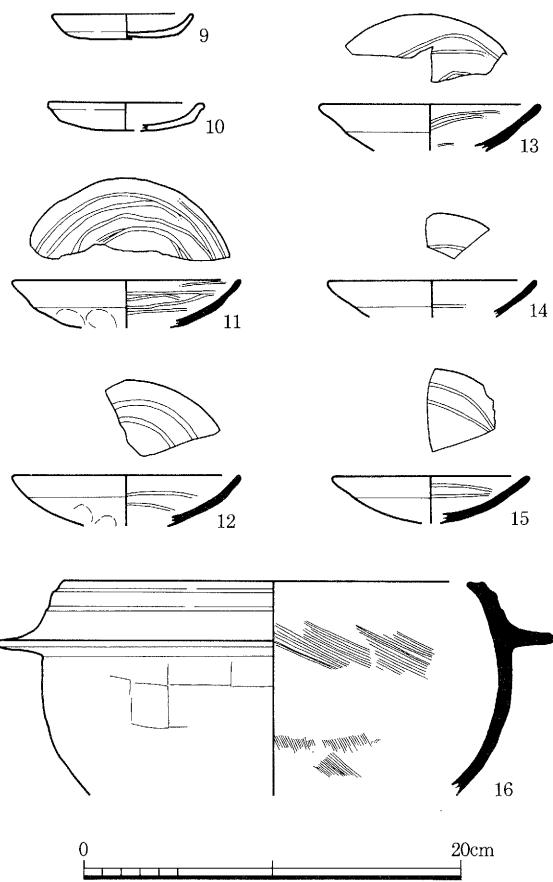
N V 2

(1) 落ち込み

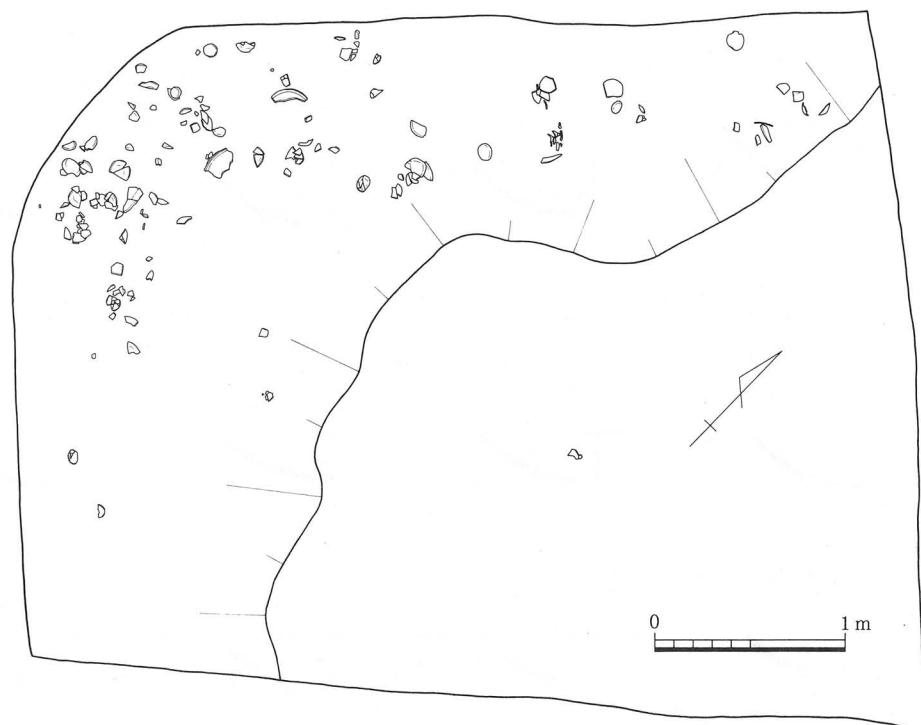
[N V 2] (第14~18図、図版12~14)

調査区外に広がっているため、規模は不明である。検出部分で深さは0.13~0.34mを測る。西除川に向かってなだらかに傾斜していることから、遺構自体は自然形成されたものと思われる。埋土には少量の炭化物やブロック土が含まれ、人為的な整地土と考えられる。

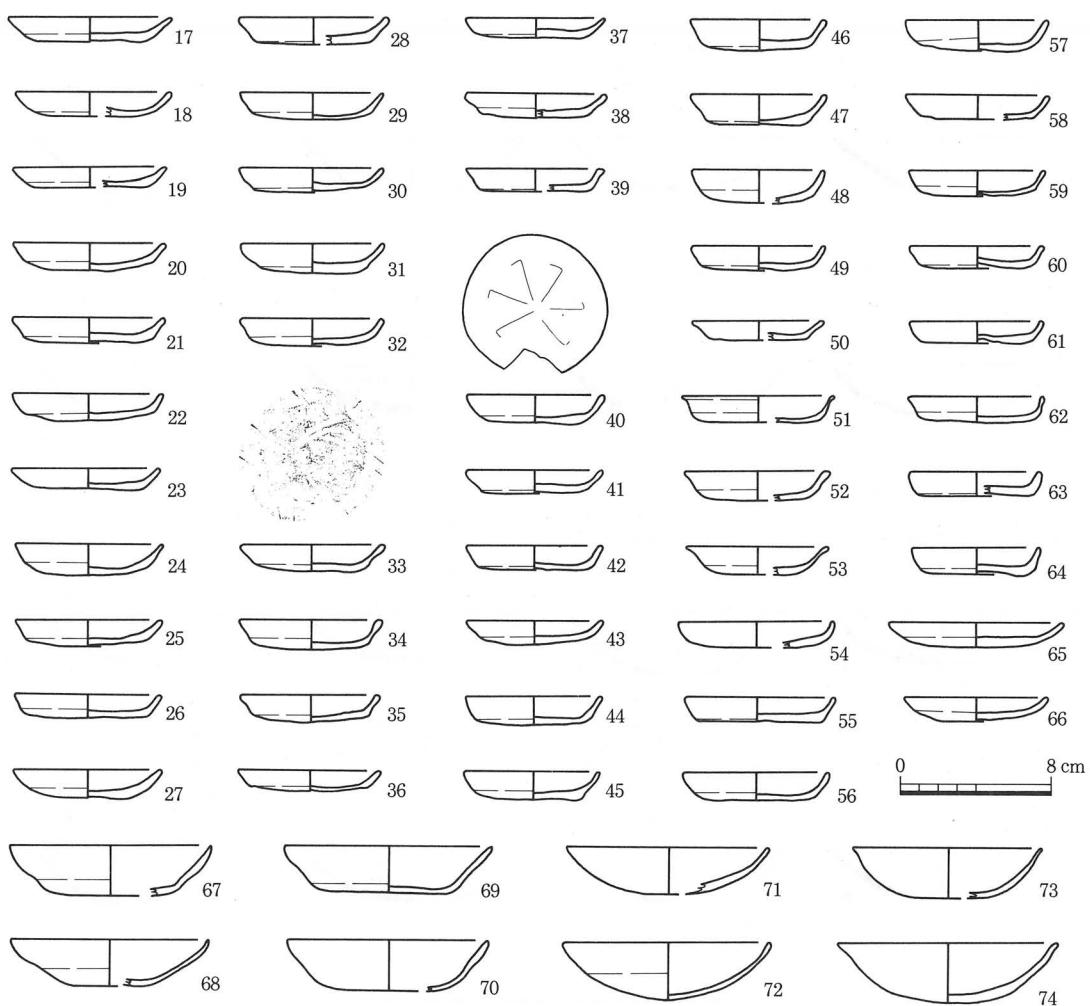
出土した遺物には土師質皿(17~74)、瓦器塊(75~146)、小型瓦器塊(147)、土師質土釜(149・152)、瓦質土釜(150・151)、須恵質練鉢(153)、青磁碗(148)があった。これらの遺物は整地時に埋棄されたものと思われる。土師質皿や瓦器塊などは完形に近い状態で出土しているため、整地に伴って地鎮などの祭祀が行われた可能性も考えられる。



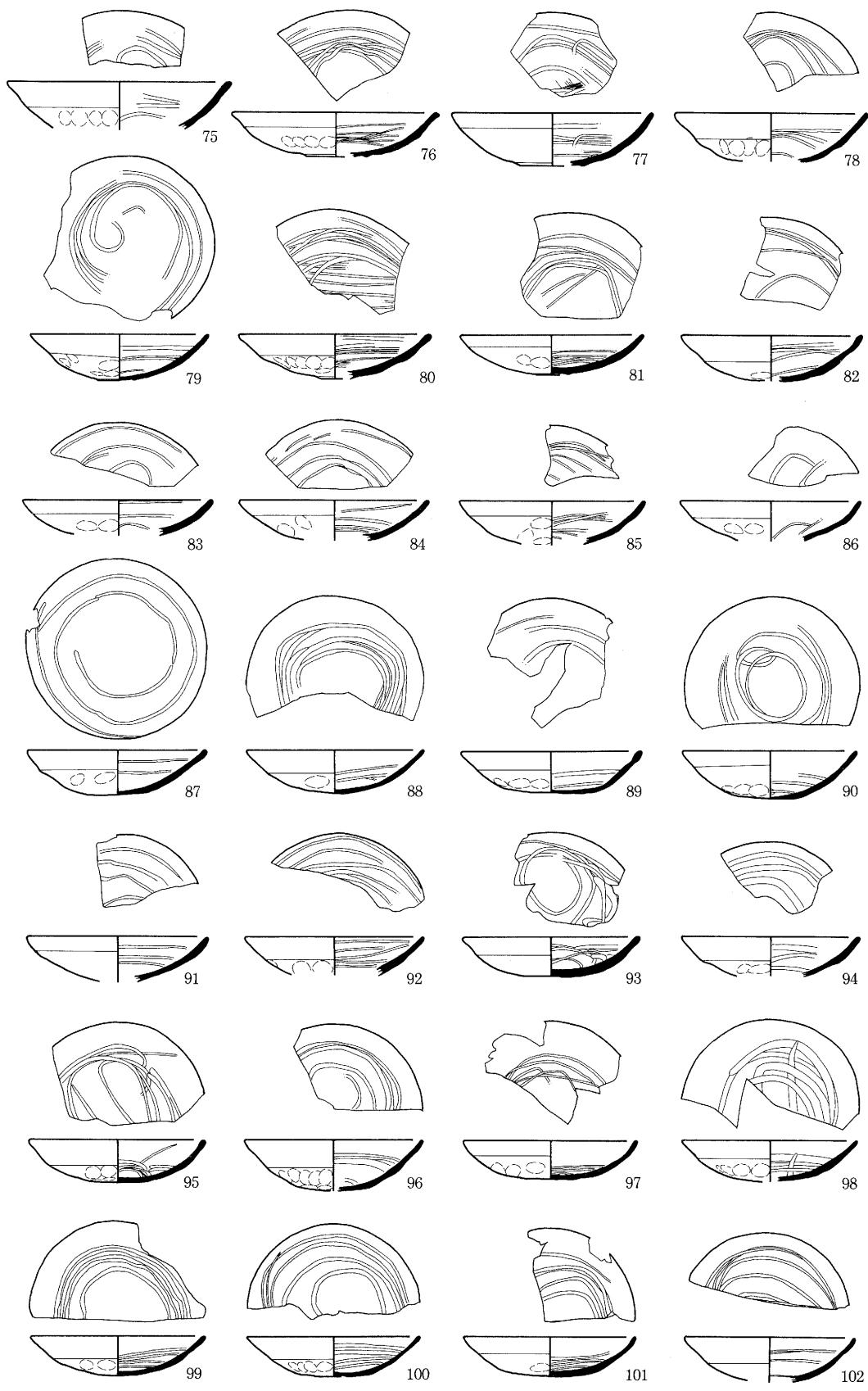
第13図 S P 1 ~ 4 出土遺物実測図



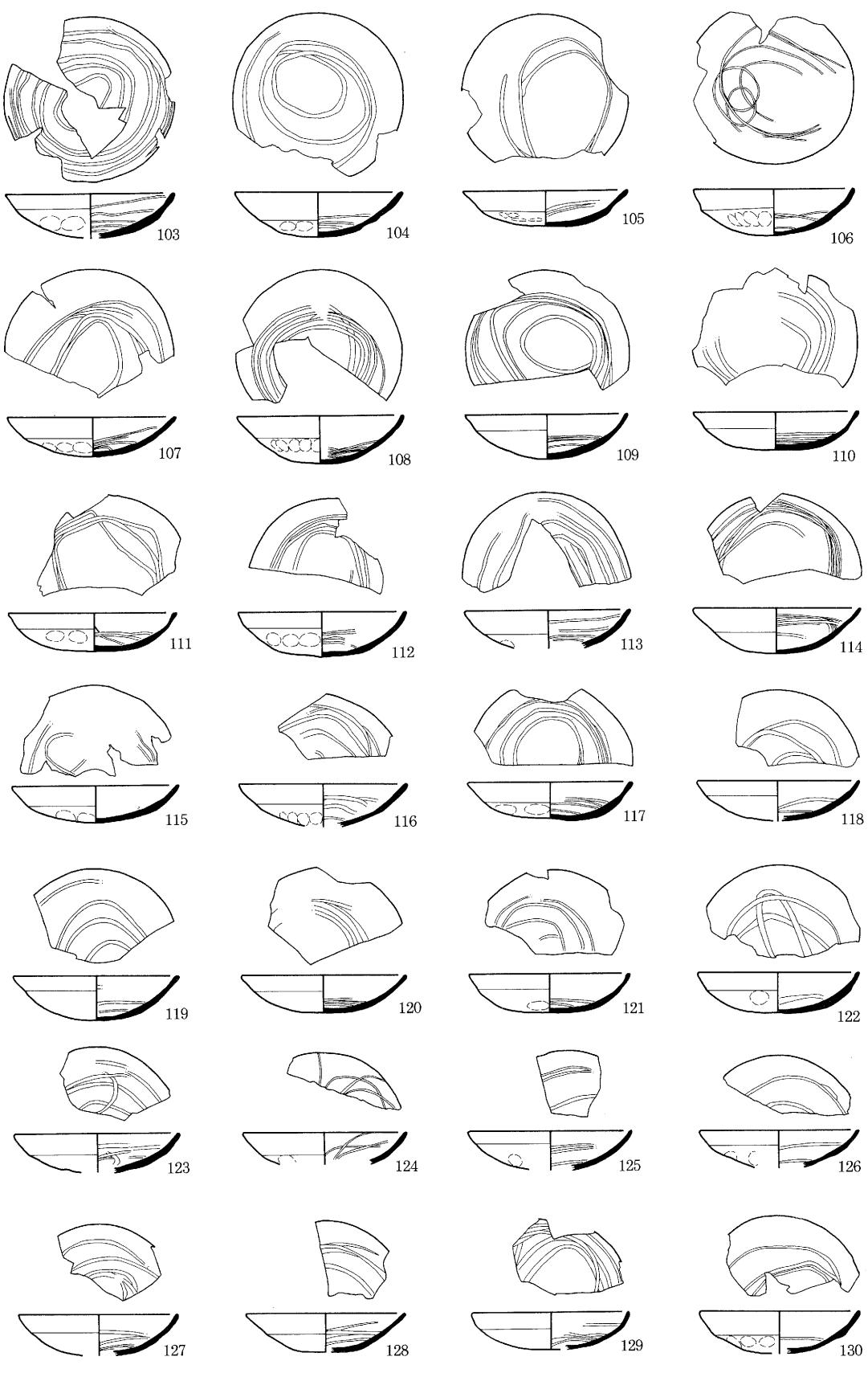
第14図 NV 2 遺物出土状況図(1/40)



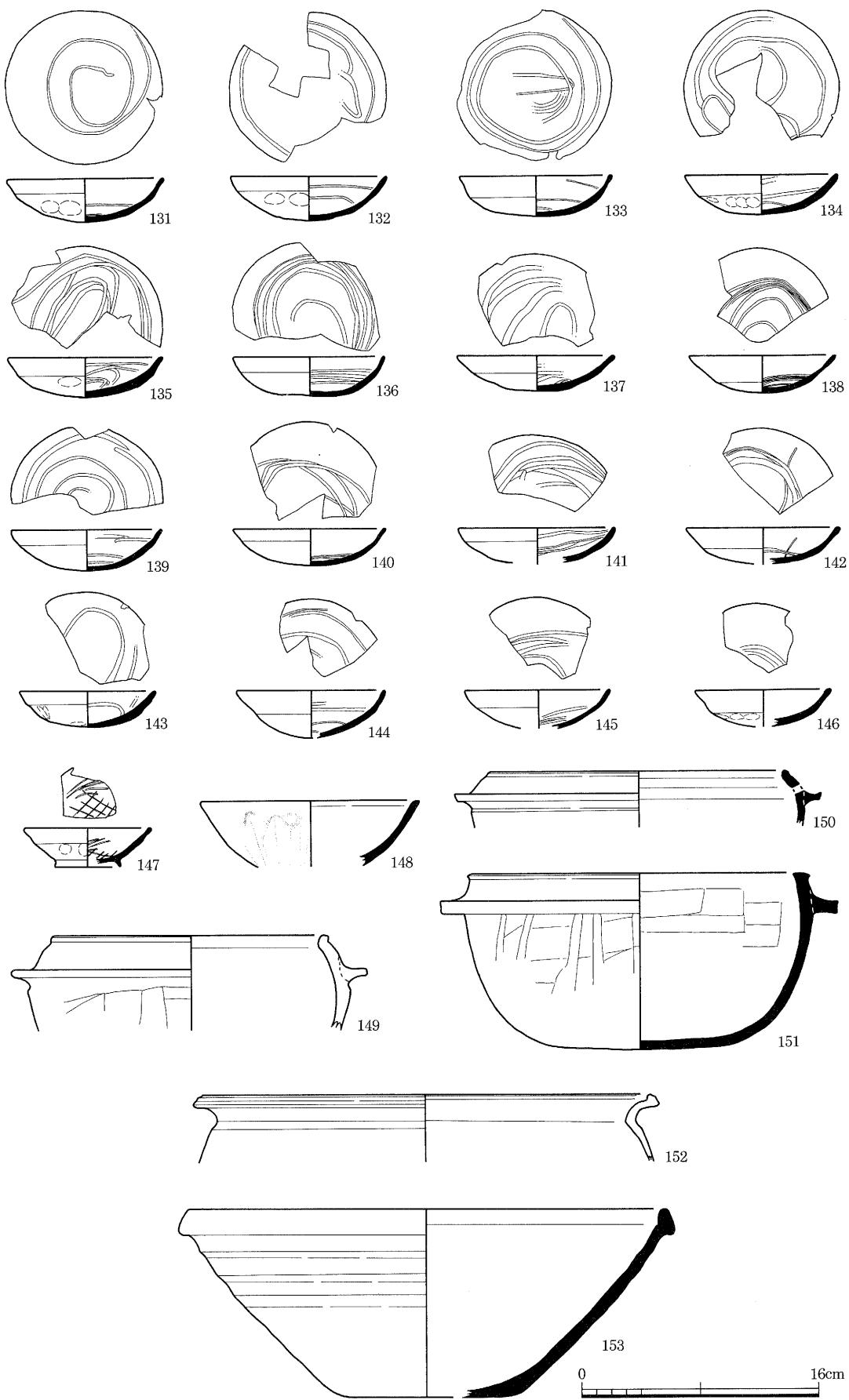
第15図 NV 2 出土遺物実測図 1



第16図 NV 2 出土遺物実測図 2



第17図 NV2 出土遺物実測図3



第18図 NV 2 出土遺物実測図 4

【包含層】

包含層

当調査区では3面の遺構面が検出されたため、包含層も3つに分け、遺物の取り上げを行った。それぞれ上層から順に包含層①、②、③とする。

(1) 包含層①{焼土層1=⑦層} (第19図、図版15)

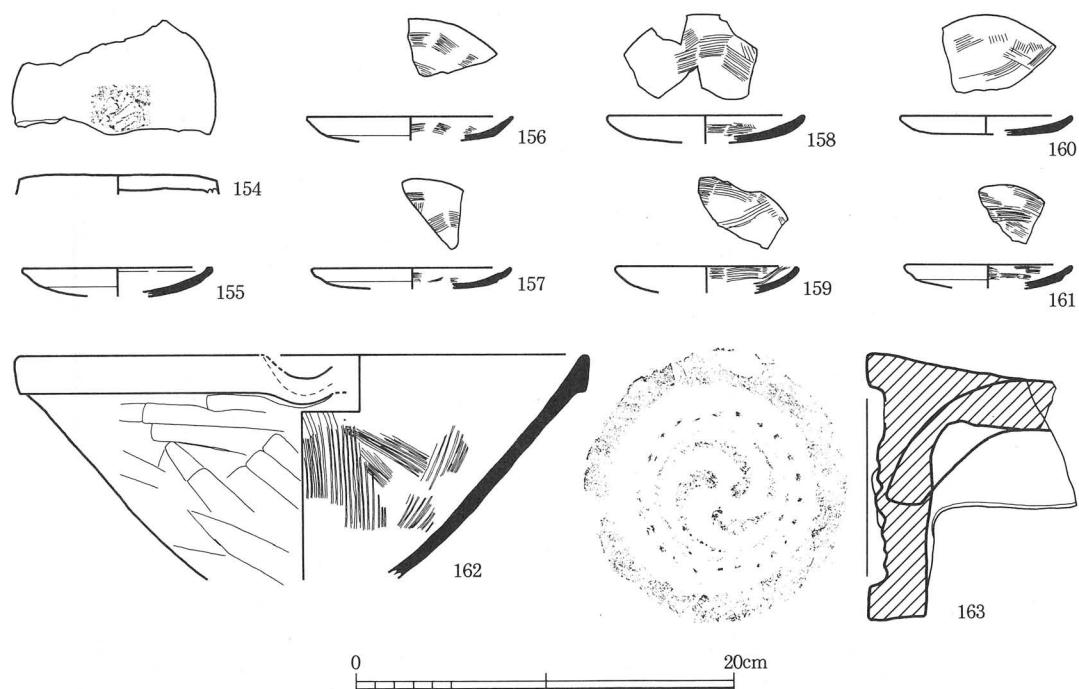
出土した遺物には土師質蓋(154)、瓦質皿(155~161)、瓦質擂鉢(162)、軒丸瓦(163)があった。

(2) 包含層②{焼土層2=⑨層} (第20図)

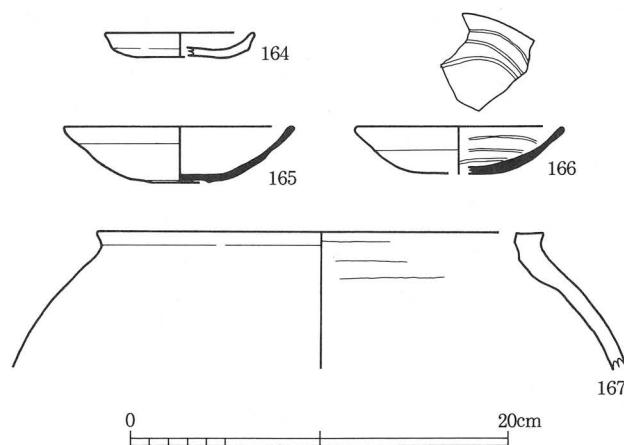
出土した遺物には土師質皿(164)、瓦器塊(165・166)、土師質甕(167)があった。

(3) 包含層③{N V 2埋土=⑬層}

出土した遺物については前述した。



第19図 包含層① (=焼土層1) 出土遺物実測図



第20図 包含層② (=焼土層2) 出土遺物実測図

第3節 第3調査区



第21図 第3調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

第3調査区(第21図、図版3)は第2調査区の北西側20mに位置し、絵図では西除川の河道か、その付近にあたる地点と思われる。

当調査区では、溝が1条、井戸が1基検出された。

(1) 溝

[S D 2]

S D 2

S D 2は調査区南東側で検出され、東から西へ横切っている。その両端は調査区外へ及んでいるが、流方向から西側の西除川に連結していたものと考えられる。検出長は3.65m、最大幅は2m、深さは0.2~0.35mを測る。

遺物は土師質皿の細片が出土したが、実測できなかった。

(2) 井戸

[S E 1] (第22図、図版15)

S E 1

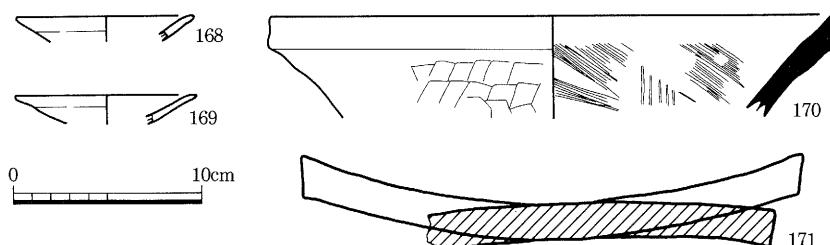
S E 1は調査区の北西側で検出され、調査区外に伸びている。掘方の平面形は円形を呈し、周囲には川原石をめぐらせていている。規模は径1m、深さ0.4mを測る。同じ調査区内で、自然流路と思われる溝S D 2が検出され、深さも違わないため、地下水位は高かったものと思われる。

出土した遺物には土師質皿(168)があった。

(3) 包含層(第22図、図版15)

包含層

包含層から出土した遺物には土師質皿(169)、瓦質擂鉢(170)、平瓦(171)があった。

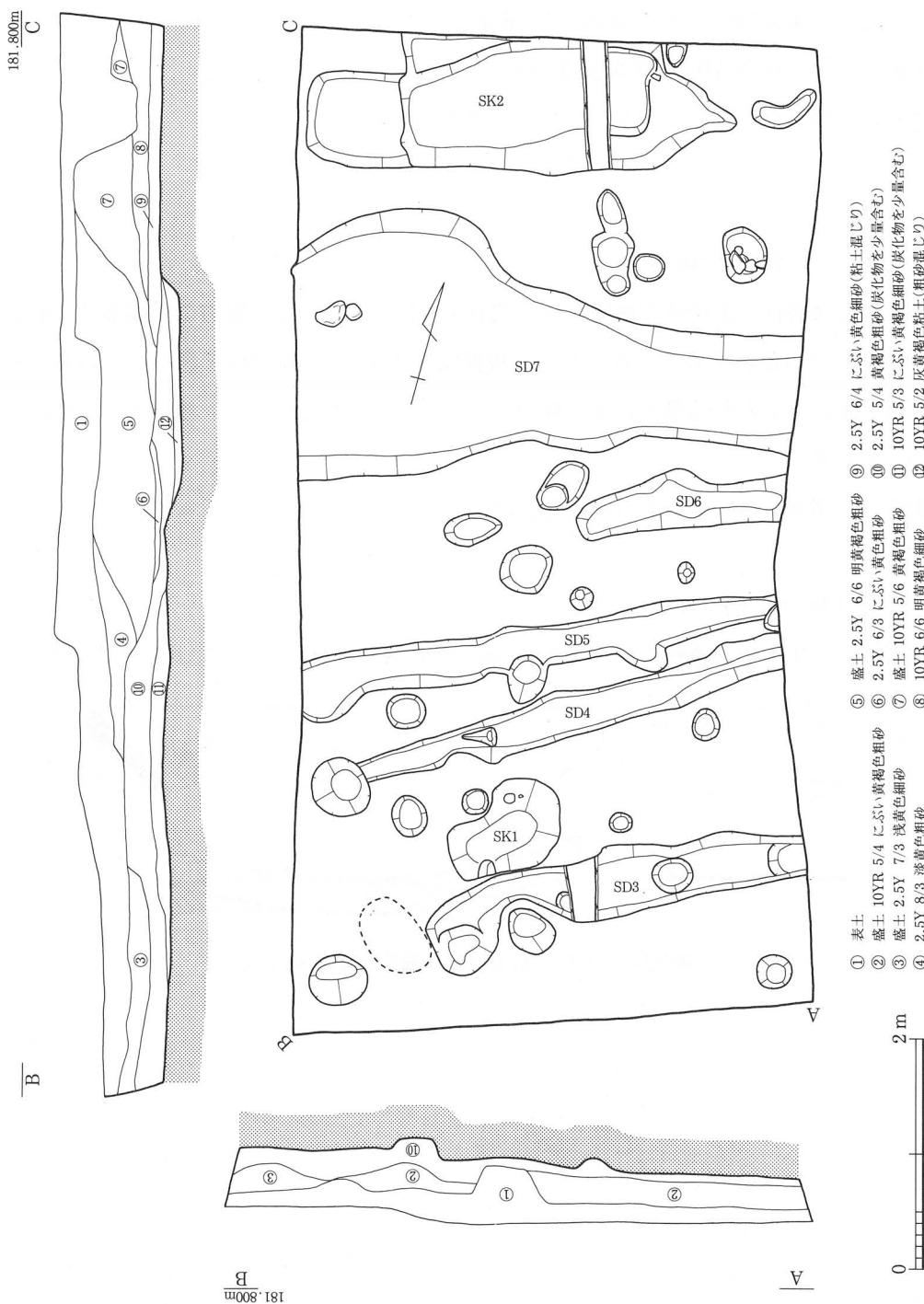


第22図 S E 1および包含層出土遺物実測図

第4節 第4調査区

第4調査区(第23図、図版4)は第2調査区の北側30mに位置し、西除川から少し離れた山裾にあたる。絵図を見ると塔頭は西除川に沿って位置するため、当調査区は建物らしきものの無い場所にあたると思われる。

当調査区では、溝が5条、土坑が2ヵ所検出された。



第23図 第4調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

(1) 溝

S D 3～S D 6の4条の溝の軸方向はN-58.5°～78°-Eで、それぞれほぼ平行して検出された。埋土には少量の炭化物が含まれていた。

[S D 3] (第24図、図版15)

S D 3

S D 3は調査区南東で検出された。遺構の東端は調査区外に及ぶ。規模は検出長3.37m、検出幅0.14～0.62m、深さ0.32～0.47mを測る。

出土した遺物には土師質皿(174)、瓦器碗(175)があった。

[S D 4]

S D 4

S D 4は調査区南東、S D 3の北側で検出された。遺構の東端は調査区外に及ぶ。規模は検出長3.79m、検出幅0.18～0.42m、深さ0.13～0.38mを測る。

遺物は土師質鉢、瓦器碗の細片が出土したが、実測できなかった。

[S D 5] (第24図、図版15)

S D 5

S D 5はS D 4の北側で検出された。遺構の両端は調査区外に及ぶ。規模は検出長4.19m、検出幅0.2～0.58m、深さ0.07～0.23mを測る。

出土した遺物には土師質皿(172)があった。

[S D 6]

S D 6

S D 6は調査区中央東側に位置する。遺構の東端は調査区外に及ぶ。規模は検出長1.82m、検出幅0.34～0.51m、深さ0.09～0.14mを測る。

遺物は瓦質土器の細片が出土した。

[S D 7] (第24図、図版15)

S D 7

S D 7は調査区北側に位置する。遺構の両端は調査区外に及ぶ。規模は検出長4.36m、検出幅0.94～2.3m、深さ0.15～0.23mを測る。

出土した遺物には瓦質皿(173)があった。

(2) 土坑

[S K 1] (第25・26図、図版15)

S K 1

S K 1は調査区南側で検出され、平面形は不整形な円形を呈する。規模は長径1m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。

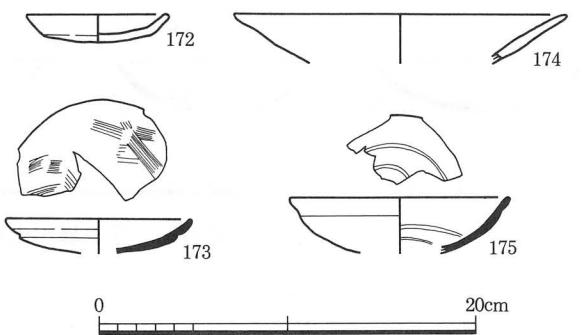
出土した遺物には瓦器碗(183・184)があった。

[S K 2] (第26図、図版15)

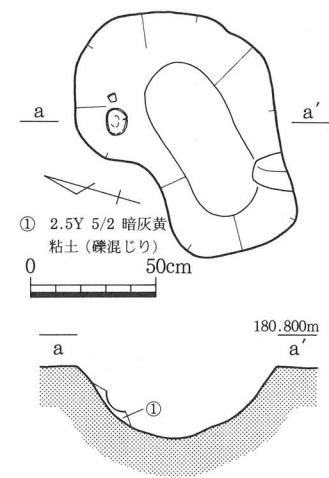
S K 2

S K 2は調査区北端で検出された。平面形は不整形な長方形を呈する。規模は長軸2.92m、短軸1.2m、深さ0.08～

第25図 S K 1 遺構実測図(1/30)

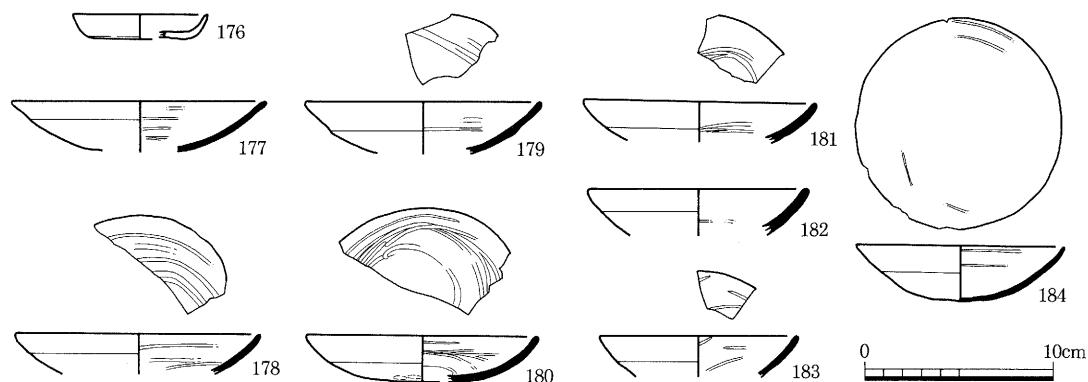


第24図 S D 3・5・7 出土遺物実測図



0.36mを測る。

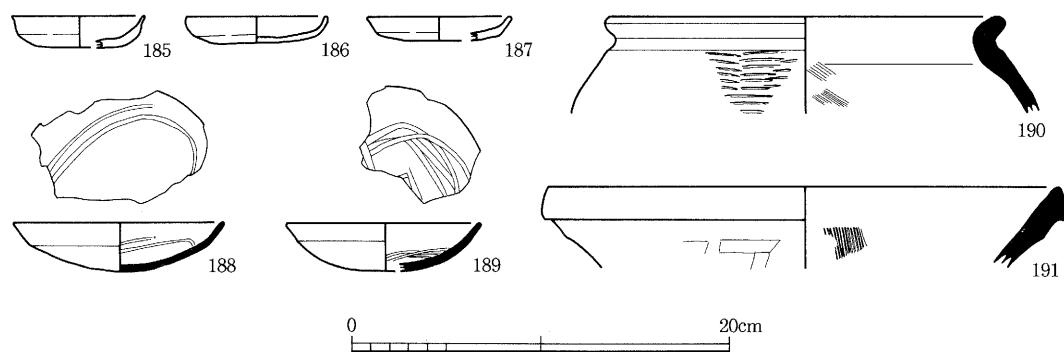
出土した遺物には土師質皿(176)、瓦器塊(177~182)があった。



第26図 SK 1・2 出土遺物実測図

(3) 包含層(第27図)

包含層から出土した遺物には土師質皿(185~187)、瓦器塊(188)、瓦質擂鉢(191)、瓦質甕(190)があった。

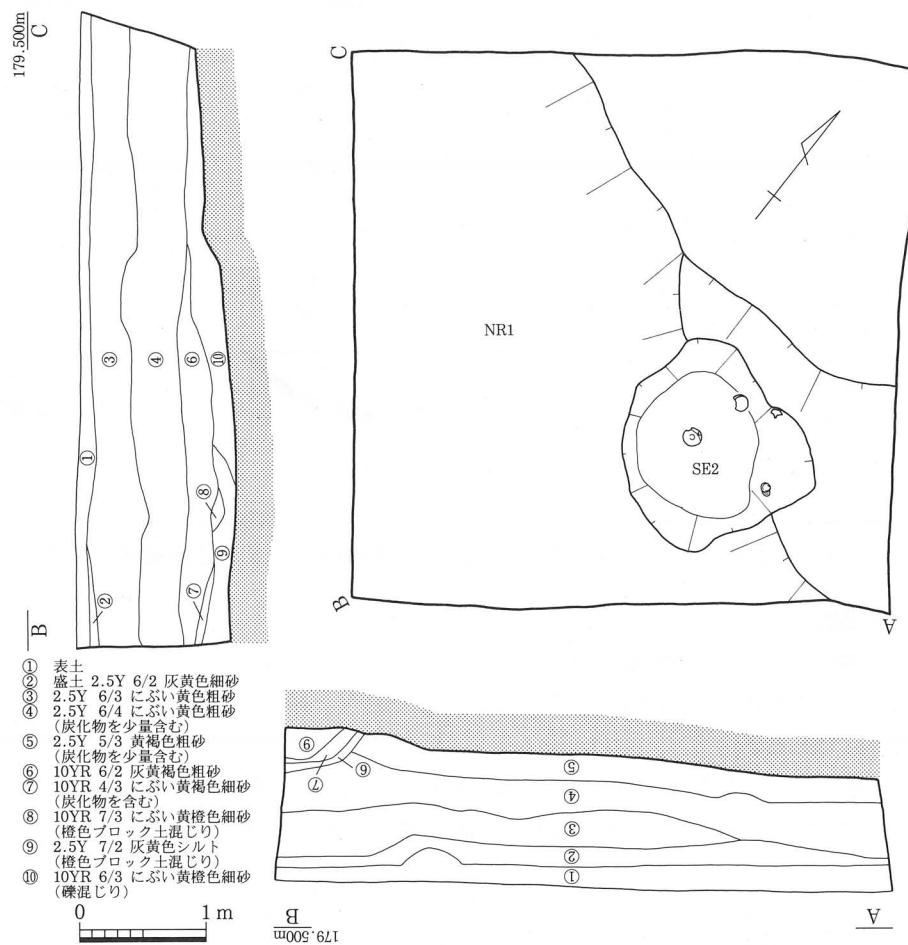


第27図 包含層出土遺物実測図

第5節 第5調査区

第5調査区(第28図、図版5)は前述した、西除川が東寄りに屈曲し始める地点にあたり、現況の西除川の河道から5mほどの距離に位置する。絵図で見ると西除川の河道か、西除川が東寄りに屈曲する点に塔頭が1棟建っている場所にあたるようと思われる。

当調査区では、井戸が1基と調査区の3分の2以上を占める自然流路が検出された。



第28図 第5調査区 遺構配置図および土層断面図(1/60)

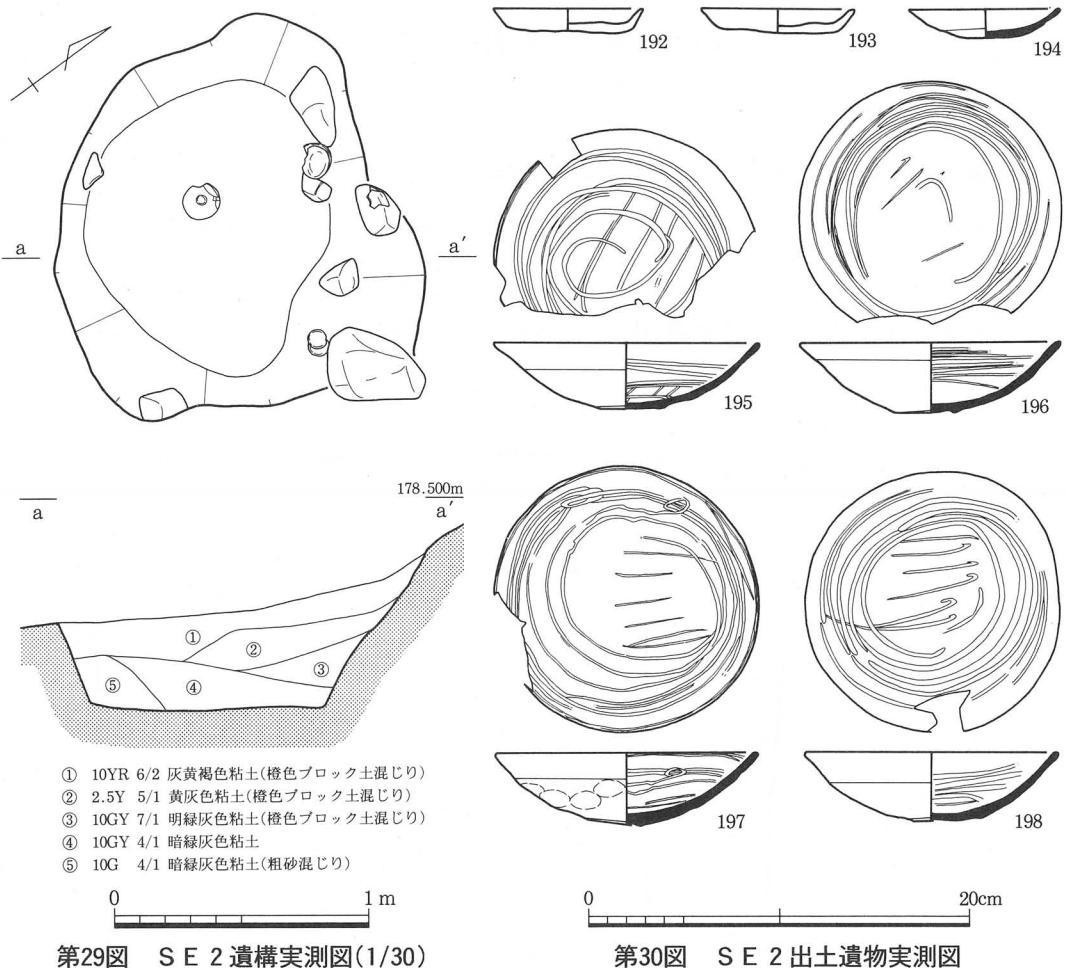
(1) 井戸

[S E 2] (第29・30図、図版5・6・15・16)

S E 2

S E 2 は自然流路内の肩付近で検出された素掘の井戸である。規模は径1.5m、深さ0.62mを測る。井戸は人為的に埋められており、埋土上方からほぼ完形の土師質皿が2点(192・193)、瓦器塊が3点(196~198)、それぞれ重なって出土した。井戸を廃棄する際の祭祀に使用されたものとも考えられる。

出土した遺物には土師質皿(192・193)、瓦器皿(194)、瓦器塊(195~198)があった。



第29図 SE 2 遺構実測図(1/30)

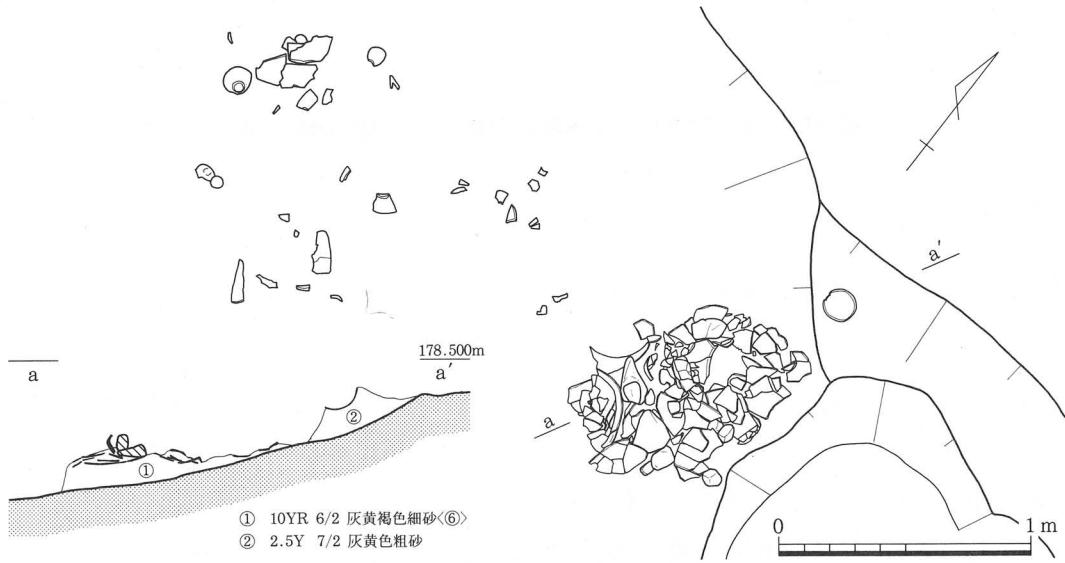
第30図 SE 2 出土遺物実測図

(2) 自然流路

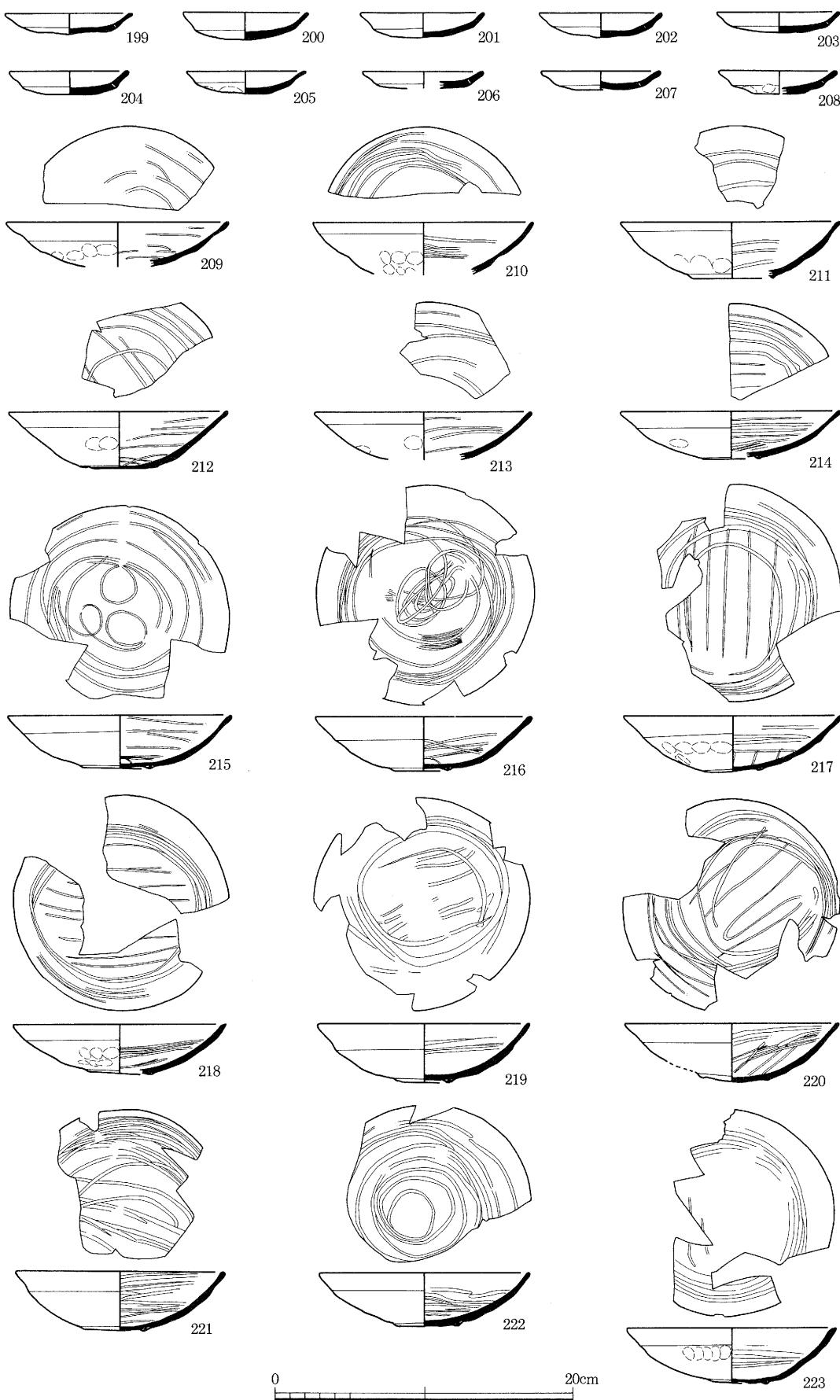
[NR 1] (第31~35図、図版6・16~18)

NR 1は調査区北側から南側に向けて落ち込んでおり、岸との比高差は南側の最も深い部分で0.59mである。

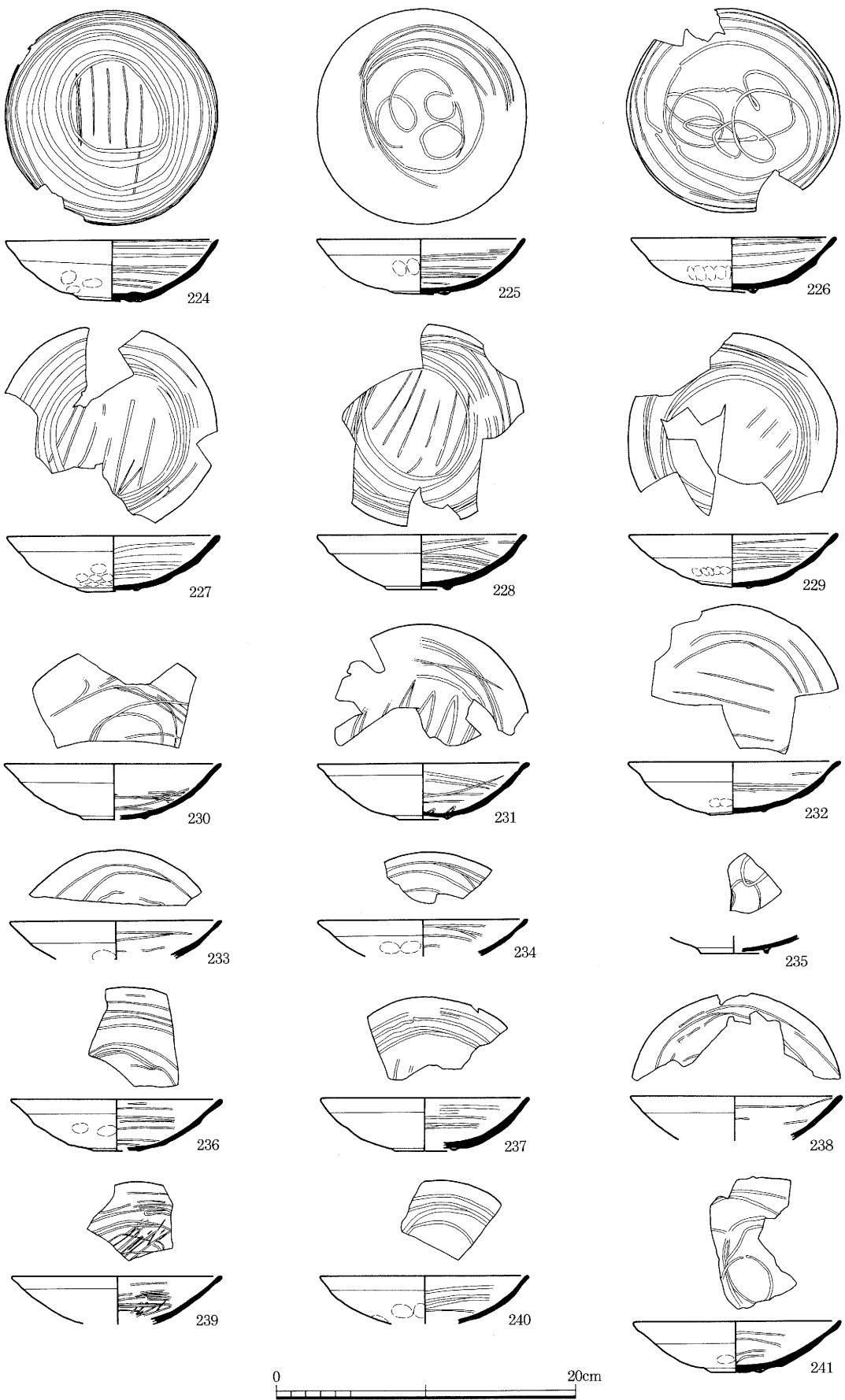
出土した遺物には土師質皿(266~281)、土師質塊(282)、瓦器皿(199~208)、瓦器塊(209~265)、瓦質甕(285・286)、須恵質練鉢(283)、砥石(284)があった。



第31図 NR 1 遺物出土状況図(1/30)



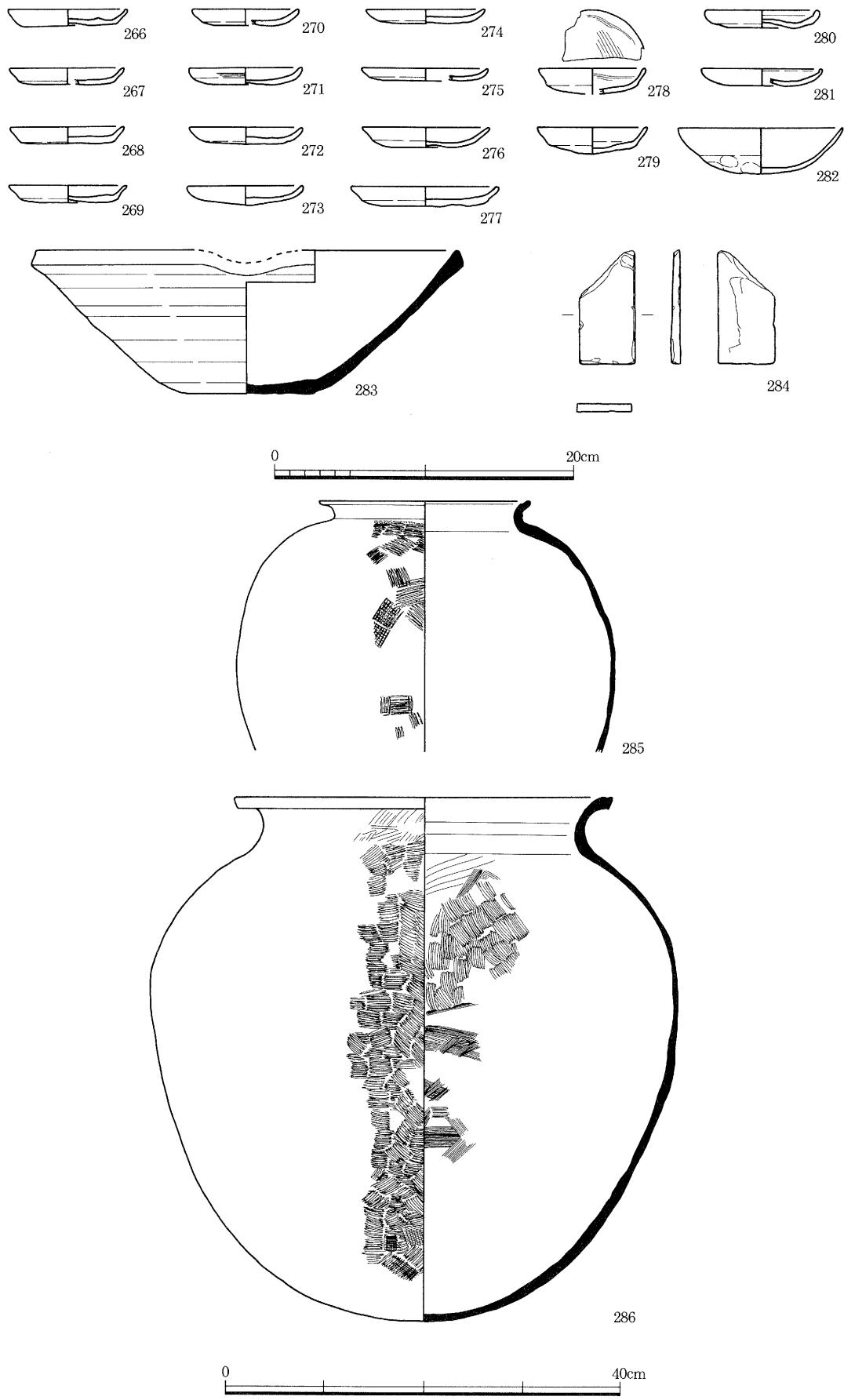
第32図 N R 1 出土遺物実測図 1



第33図 NR 1 出土遺物実測図 2



第34図 NR 1 出土遺物実測図 3

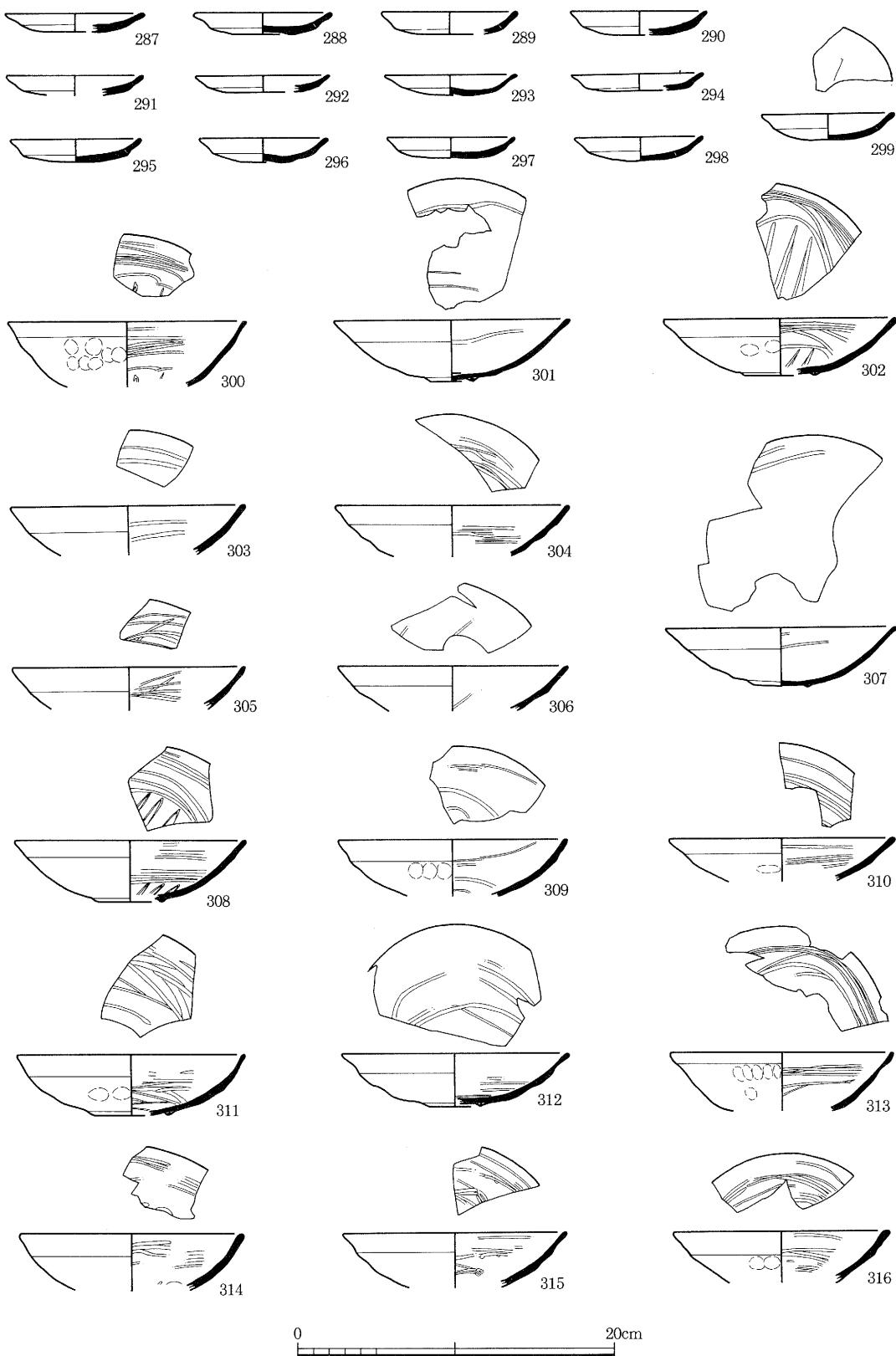


第35図 NR 1 出土遺物実測図 4

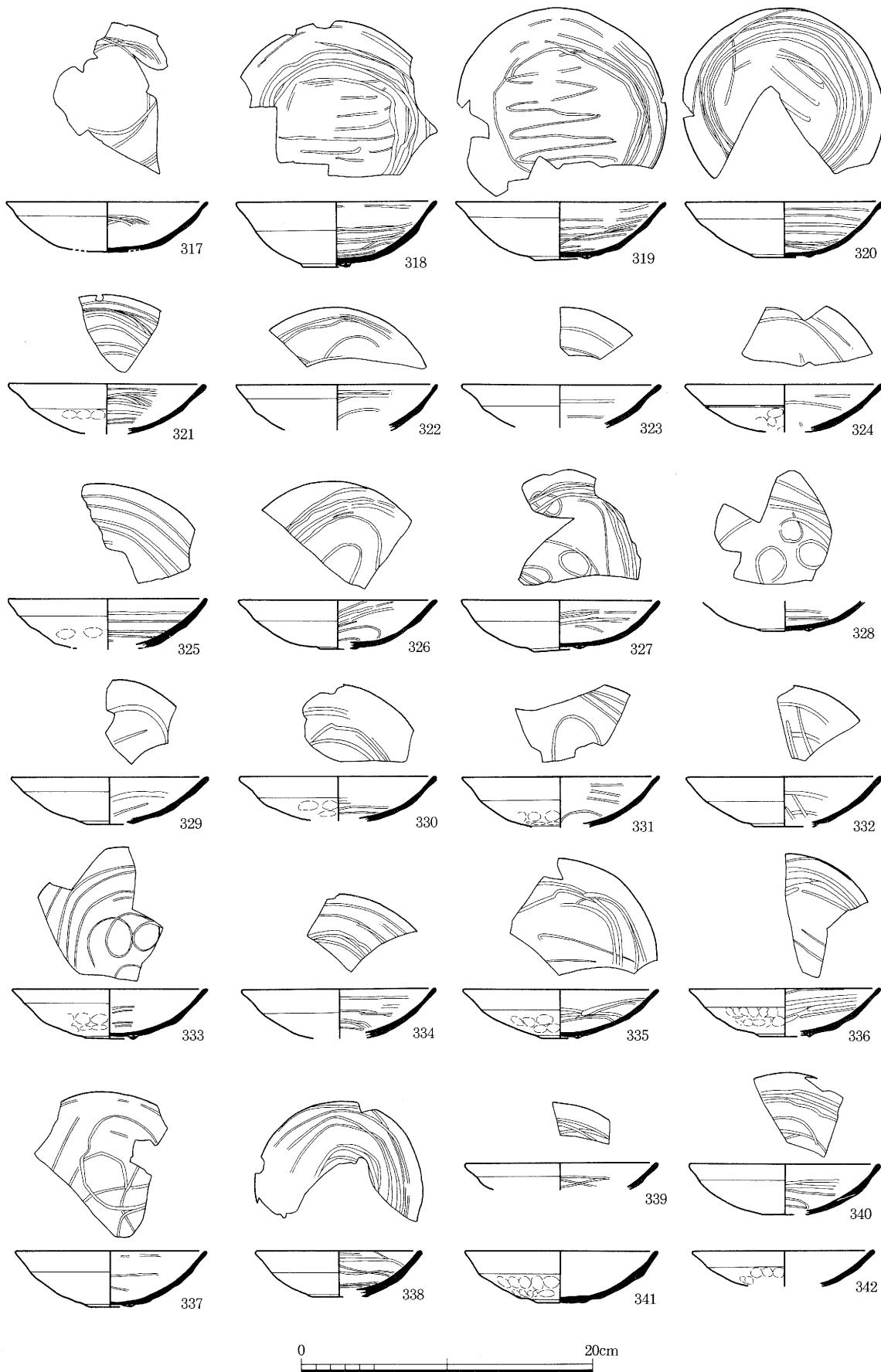
(3) 包含層(第36~39図)

包含層

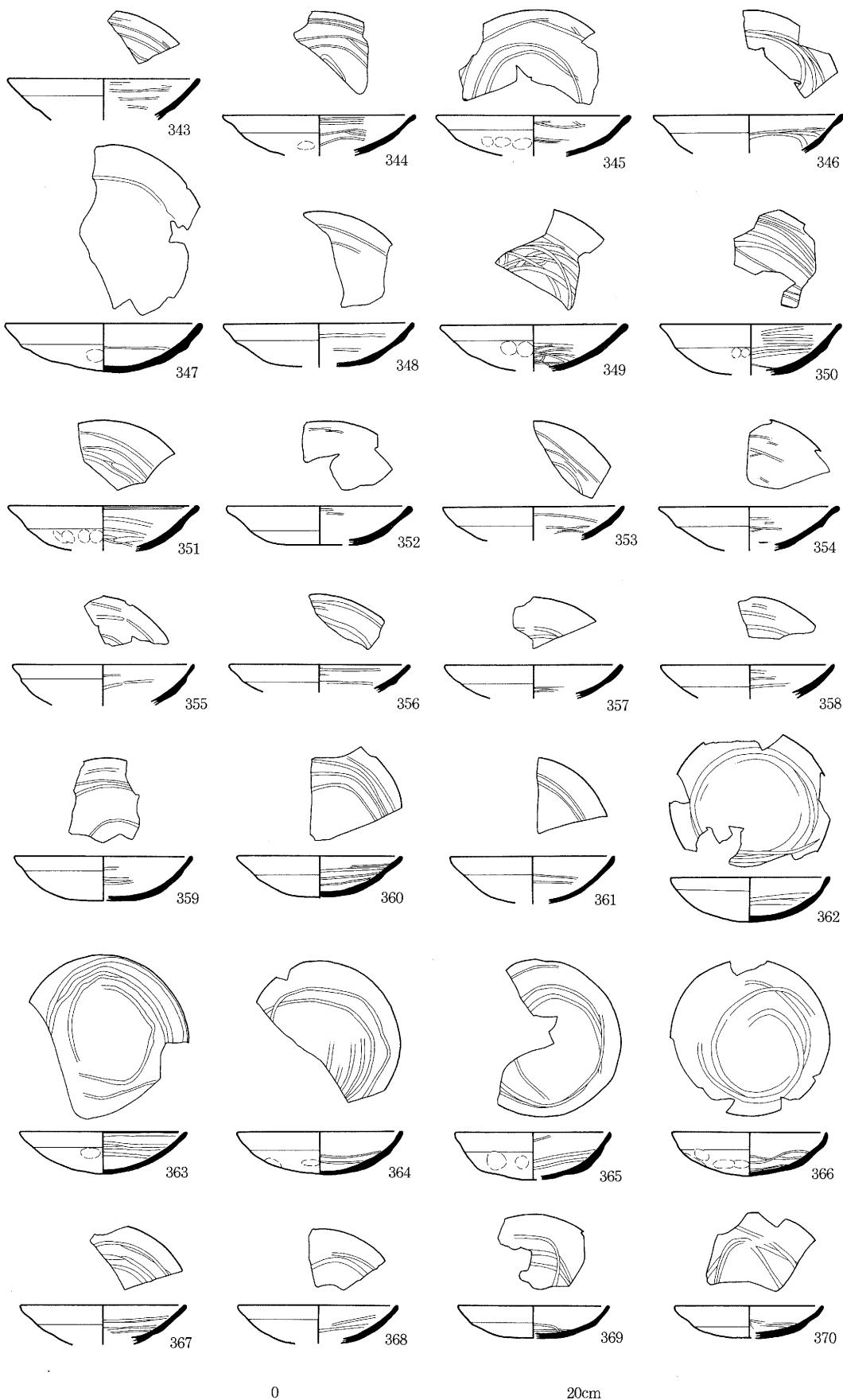
包含層からの遺物には土師質皿(371~396)、瓦器皿(287~299)、瓦器塊(300~370)、瓦



第36図 包含層出土遺物実測図1

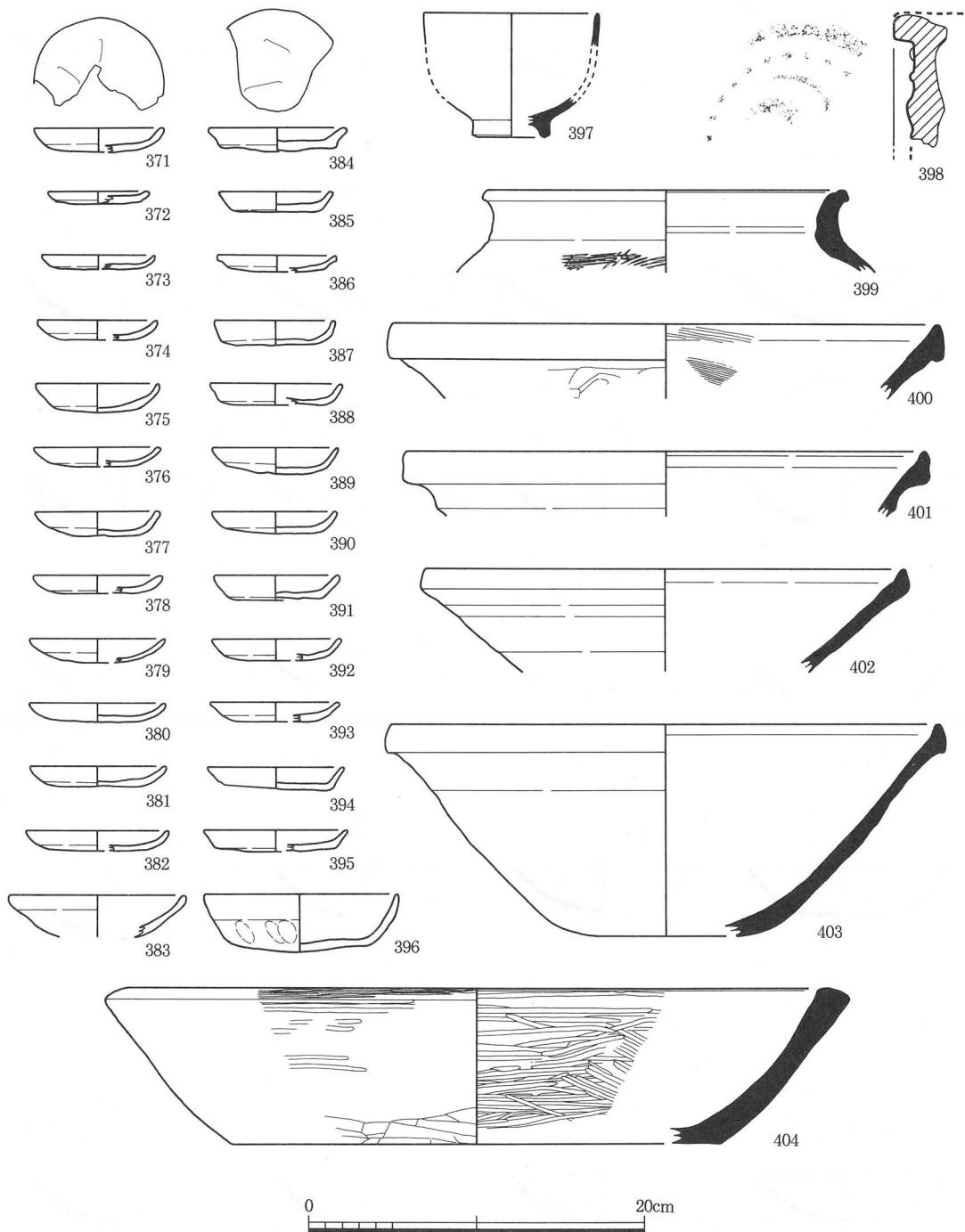


第37図 包含層出土遺物実測図 2



第38図 包含層出土遺物実測図 3

質擂鉢(400)、瓦質火鉢(404)、瓦質甕(399)、須恵質練鉢(401~403)、軒丸瓦(398)、唐津系陶器塊(397)があった。

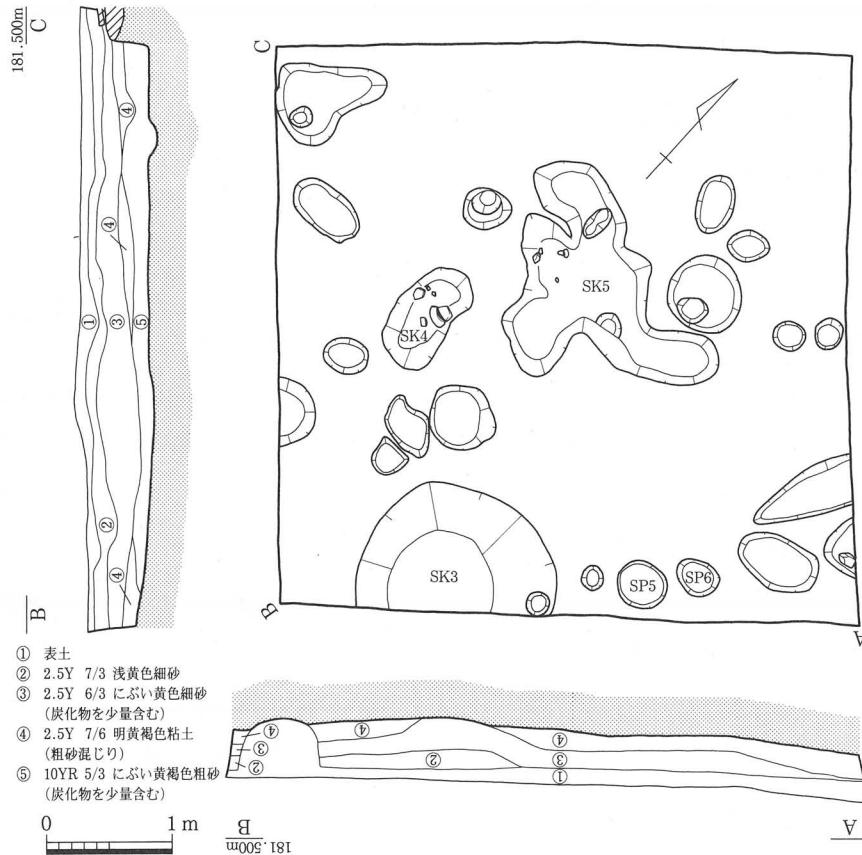


第39図 包含層出土遺物実測図 4

第6節 第6調査区

第6調査区(第40図、図版7)は屈曲し、東寄りに流れる西除川の東側10mの地点で、絵図では山中の塔頭に伸びる道か、何も描かれていない場所にあたると思われる。

当調査区では土坑が3ヵ所、遺物の出土したピットが2ヵ所検出された。



第40図 第6調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

(1) 土坑

[SK3]

SK 3

SK3は調査区南東で検出された。遺構の南東側は調査区外に及んでいるが、平面形は円形を呈するものと思われる。規模は径1.58m、深さ0.24mを測る。

遺物は丸瓦の細片が出土したが、実測できなかった。

[SK4] (第41図)

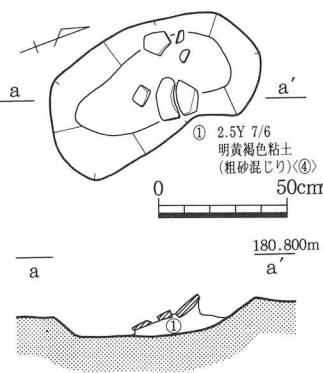
SK 4

SK4は調査区中央から南西寄りで検出され、平面形は橢円形を呈する。遺構の規模は長径0.88m、短径0.47m、深さ0.14mを測る。

瓦器塊、平瓦の細片が出土したが、実測できなかった。

[SK5] (第42・43図、図版19)

SK5は調査区中央で検出された。平面形は不定形を呈



第41図 SK4 遺構実測図(1/30)

する。

遺構の規模は長軸2.15m、短軸1.32m、深さ0.09mを測る。

出土した遺物には土師質皿(405)、瓦器塊(407~409)、白磁の小壺(406)があった。

(2) 遺物出土ピット

S P 5

[S P 5] (第44図、図版19)

S P 5 は調査区東側で検出された。径0.39m、深さ0.1mの円形ピットである。

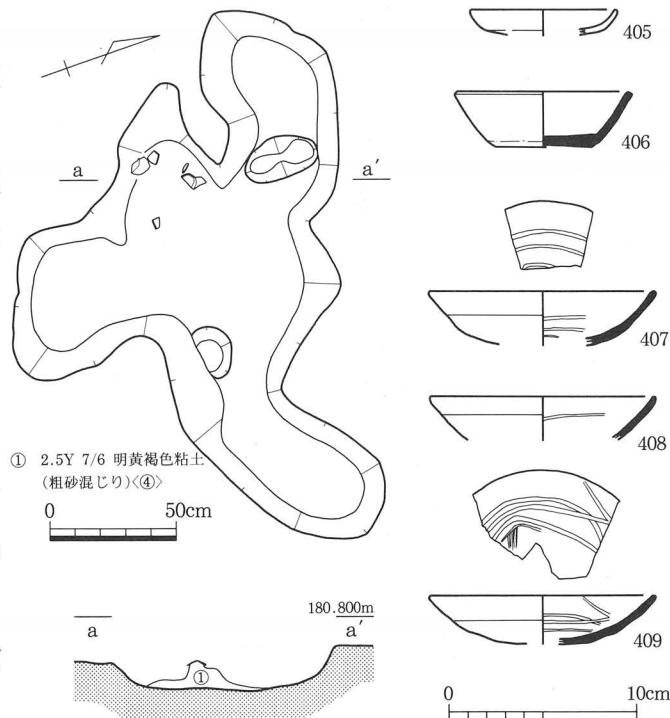
出土した遺物には肥前系の京焼風陶器塊(411)があった。

S P 6

[S P 6] (第44図)

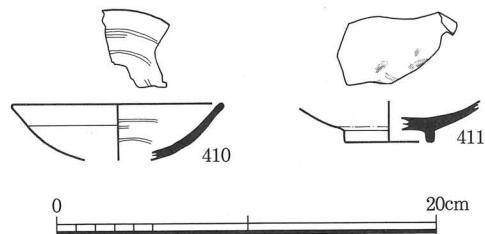
S P 6 は S P 5 の北東側で検出された。径0.3m、深さ0.07mの円形ピットである。

出土した遺物には瓦器塊(410)があった。



第42図 SK 5 遺構実測図(1/30)

第43図 SK 5 出土遺物実測図

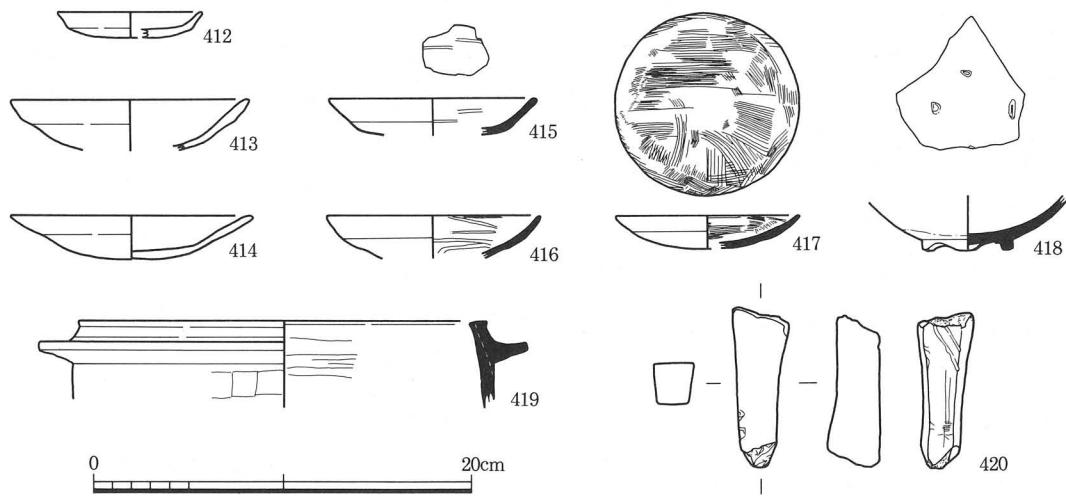


第44図 S P 5・6 出土遺物実測図

包含層

(3) 包含層(第45図)

包含層から出土した遺物には土師質皿(412~414)、瓦器皿(415)、瓦器塊(416)、瓦質皿(417)、瓦質土釜(419)、白磁皿(418)、砥石(420)があった。

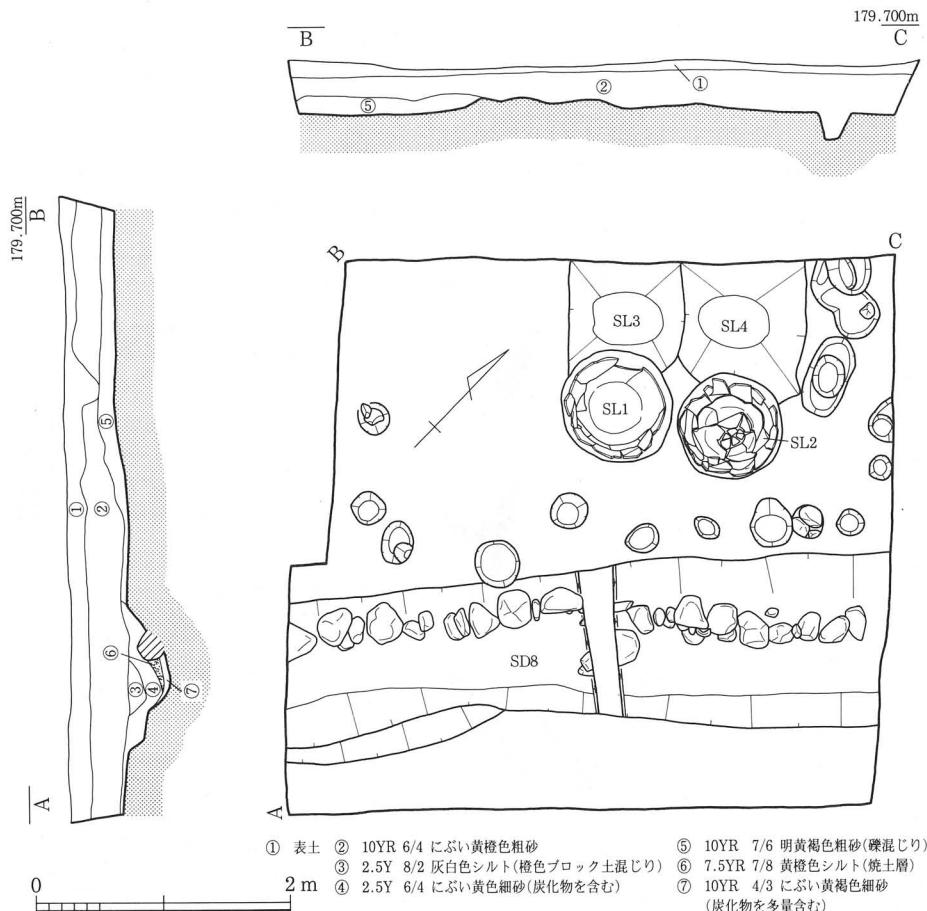


第45図 包含層出土遺物実測図

第7節 第7調査区

第7調査区(第46図、図版8)は、東側に屈曲して弧を描いて流れる西除川の内側に位置し、9つの調査区の中で唯一西除川左岸に位置する。絵図では塔頭が2棟並んで描かれている部分にあたる。

当調査区では溝が1条、埋甕遺構が4基検出された。



第46図 第7調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

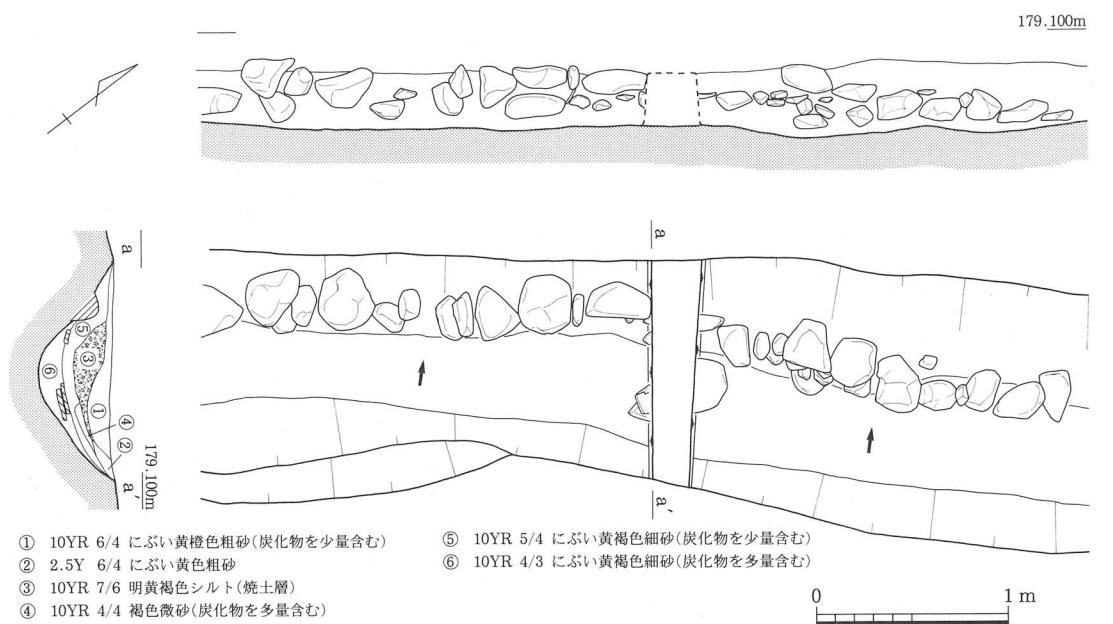
(1) 溝

[SD8] (第47・48図、図版9・19)

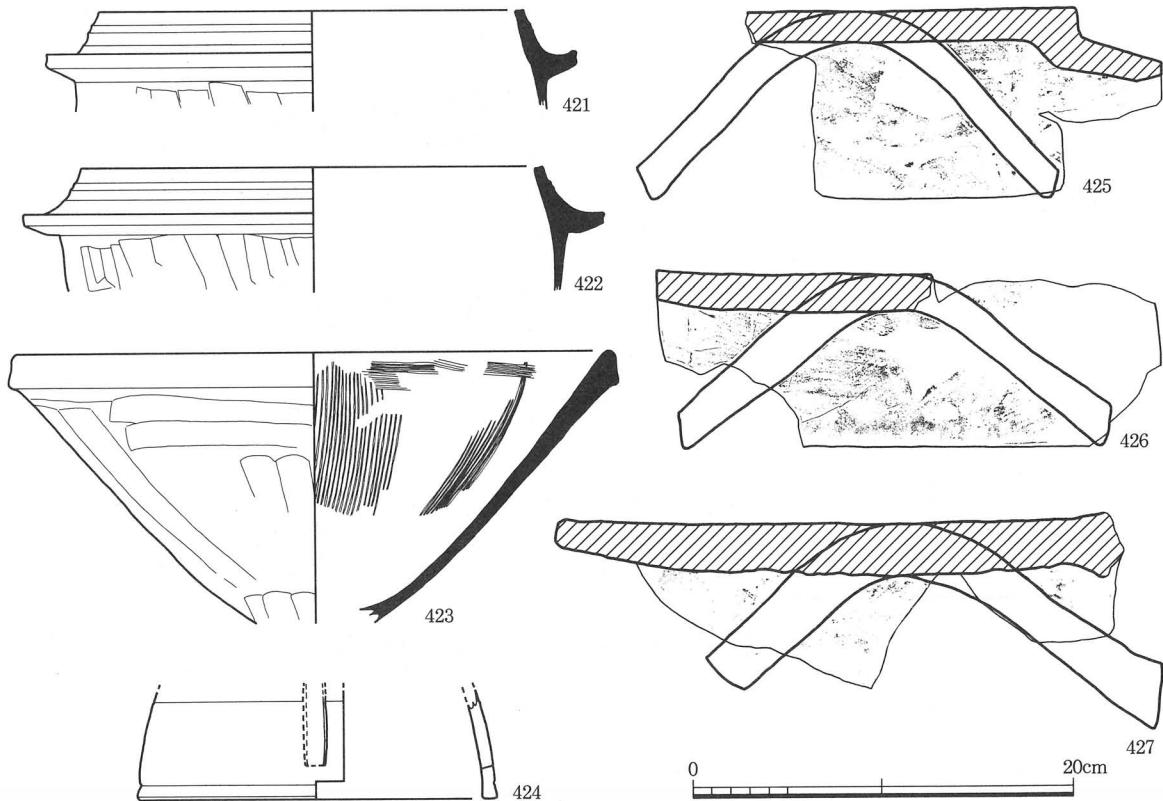
SD 8

SD 8は調査区南東側で検出された。北東側と南西側は調査区外に及ぶ。規模は検出長4.44m、幅1.39m、深さ0.36~0.4mである。流路内の北西側には30cmほどの川原石が列をなして出土しているが、用途・性格は不明である。埋土は炭化物を多く含み、その堆積状況から水路であったとは考えにくい。

出土した遺物には土師質瓦灯(424)、瓦質擂鉢(423)、瓦質土釜(421・422)、雁振瓦(425~427)があった。



第47図 SD 8 遺構実測図(1/40)



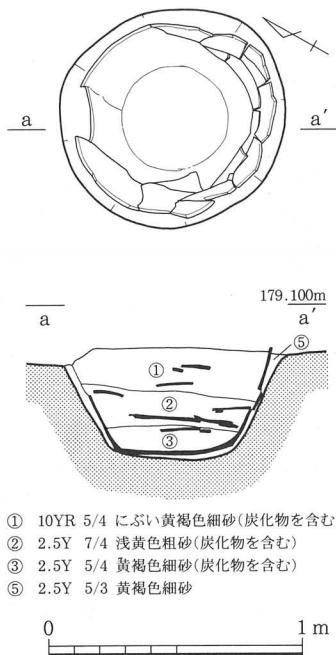
第48図 SD 8 出土遺物実測図

(2) 埋甕遺構

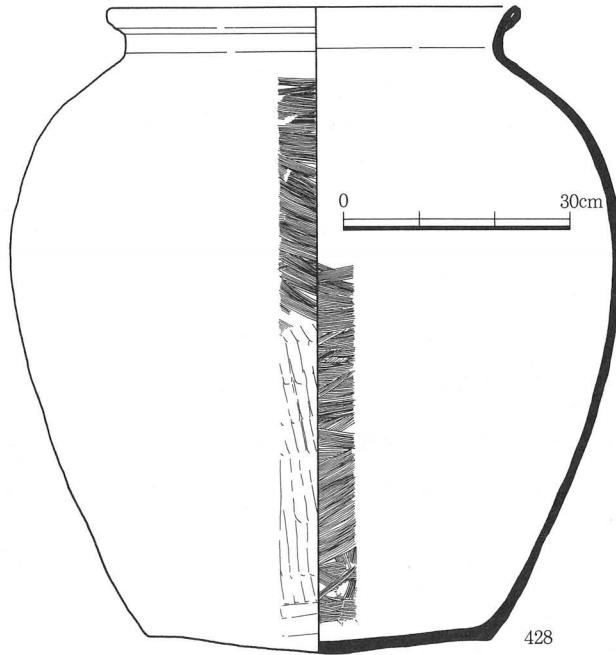
埋甕遺構は調査区北側に4基まとまって検出された。そのうち、S L 1・2では備前甕の底部が残存しており、S L 3・4では甕を抜き取った跡と見られる土坑だけを検出した。S L 3・4の北側は調査区外に及んでいる。

S L 1 [S L 1] (第49・50・52図、図版9・20)

S L 1には甕が体部中程から底部にかけて残存している。掘方は甕の径よりわずかに大



第49図 S L 1 遺構実測図(1/30)



第50図 S L 1 埋甕実測図

きい程度で、径0.89m、深さ0.42mを測る。甕内部の埋土には炭化物を多く含んでおり、建材らしき物も認められた。残存している甕の口縁部は周辺の遺構・包含層から出土した。

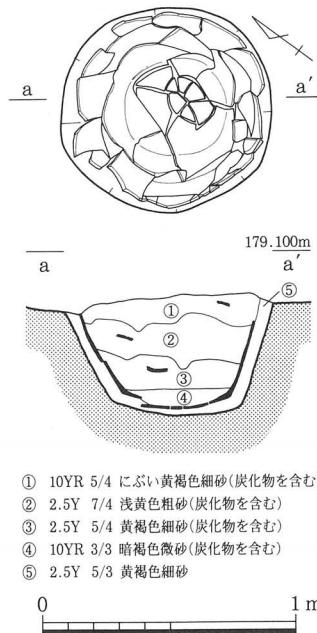
出土した遺物には残存していた甕(428)のほか、4個体分の備前甕(429~432)、雁振瓦(437)があった。

〔S L 2〕(第51・52・54図、図版9・10・19・20)

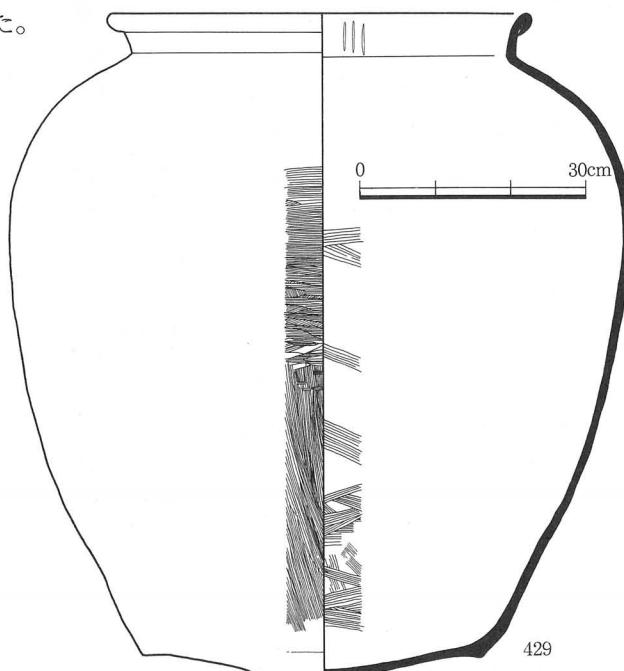
S L 2

S L 2にも甕が残存している。掘方の規模は径0.83m、深さ0.44mを測る。甕内の埋土、その他の状況はS L 1と同様である。

出土した遺物には残存していた甕(429)のほか、4個体分の備前甕(428・430~432)、瓦質火鉢(436)、雁振瓦(438)があった。



第51図 S L 2 遺構実測図(1/30)



第52図 S L 2 埋甕実測図

S L 3

[S L 3] (第53・54図)

S L 3 は、ほぼ円形の土坑で遺構の南側は S L 1 に切り込まれ、北側は調査区外に及んでいる。土坑の規模は検出径0.9m、深さ0.3mを測り、その状況から甕の抜き取り穴と考えられる。埋土は人為的なものと思われ、炭化物を少量含む。

出土した遺物には3個体分の備前甕(430~432)、土師質皿(434)があつた。

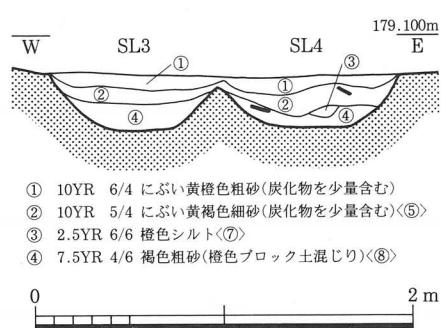
S L 4

[S L 4] (第53・54図、図版19)

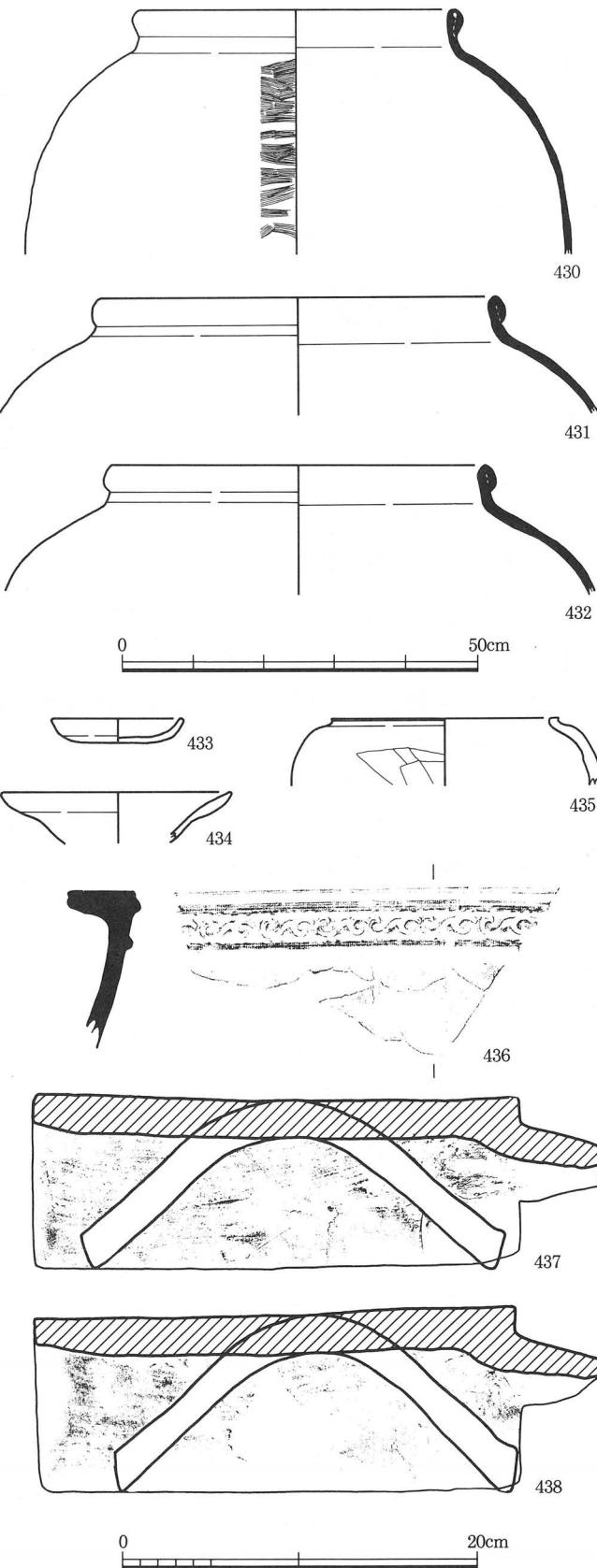
S L 4 にも甕は残存していない。ほぼ円形の土坑で、南側は S L 2 に切り込まれ、北側は調査区外に及ぶ。土坑の規模は径1.15m、深さ0.29mを測り、出土状況は S L 3 と同様である。

出土した遺物には2個体分の備前甕(431・432)、土師質皿(433)、土師質壺(435)があった。

以上のように4基の埋甕遺構から相互に同一個体の甕片が出土した。また、出土した甕のうち、(431)と(432)は同一個体である可能性もある。



第53図 S L 3・4 遺構断面実測図(1/40)

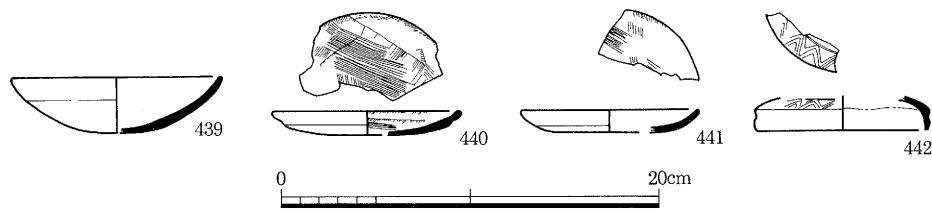


第54図 S L 1～4 出土遺物実測図

(3) 包含層(第55図、図版20)

包含層

包含層から出土した遺物には瓦質皿(439～441)、磁器の蓋(442)があった。

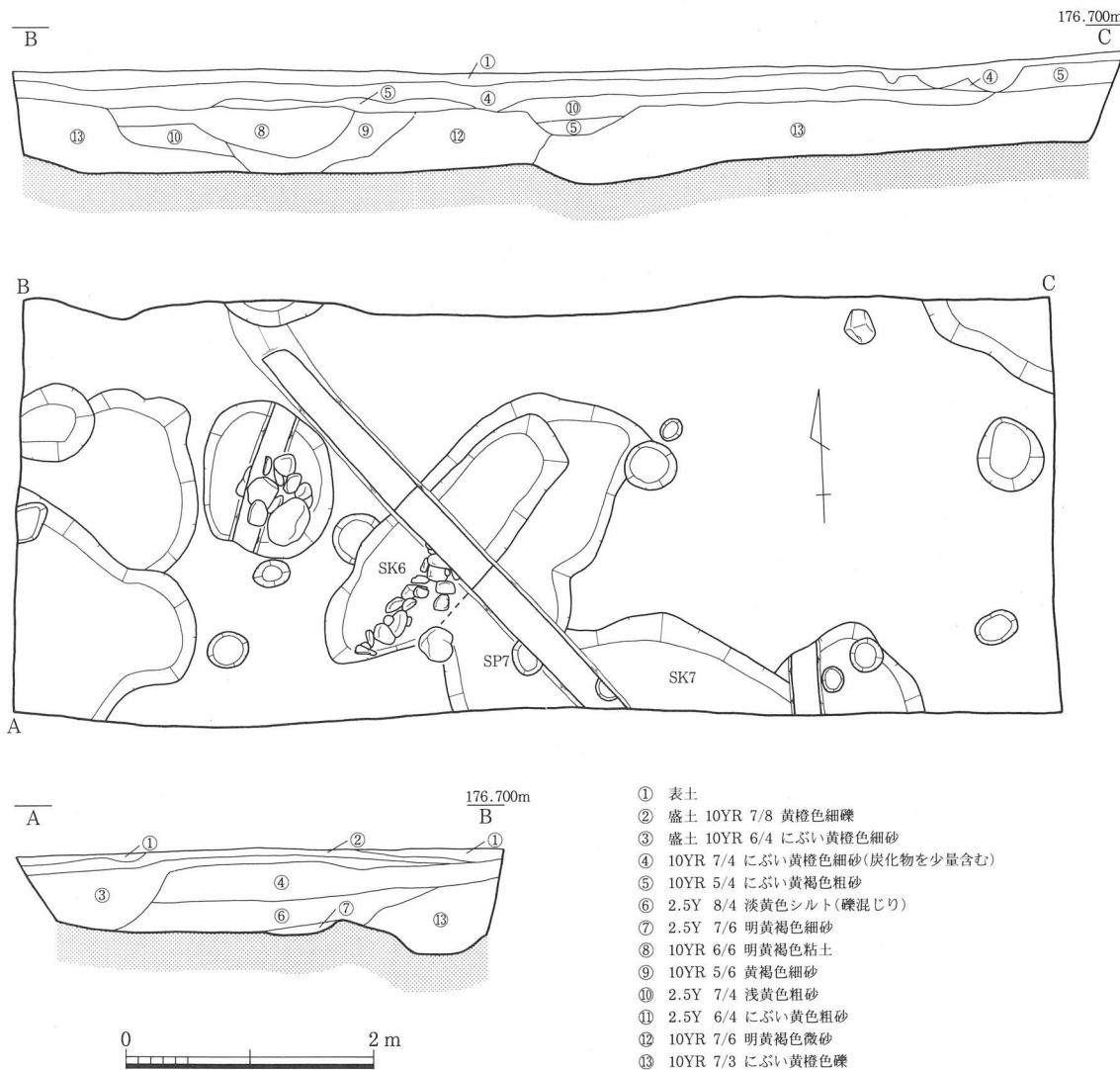


第55図 包含層出土遺物実測図

第8節 第8調査区

第8調査区(第56図、図版10)は再び北西方向に流れる西除川の右岸に位置する。絵図では塔頭が2棟並んで建っている場所にあたると思われる。

当調査区では土坑が2ヵ所、遺物の出土したピットが1ヵ所検出された。



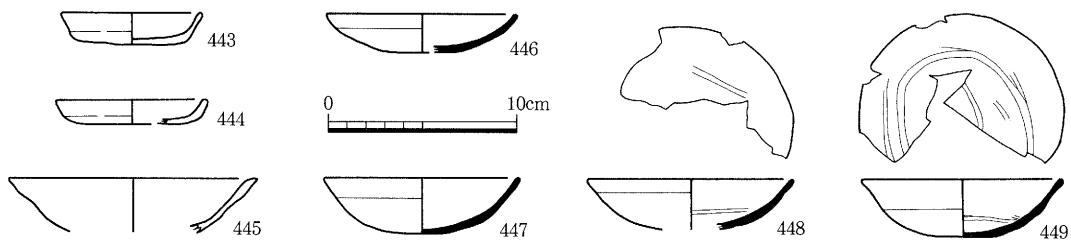
第56図 第8調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

(1) 土坑

SK6 [SK6] (第57図、図版20)

SK6は調査区中央で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径2.57m、短径0.89m、深さ0.13~0.42mを測る。

出土した遺物には土師質皿(443・444)、瓦器碗(447~449)、瓦質皿(446)があった。



第57図 SK 6・7 出土遺物実測図

〔SK 7〕(第57図)

SK 7

SK 7は調査区中央南側で検出された。遺構の南側は調査区外に及んでおり、平面形は不明である。規模は検出長で1.35m、検出幅0.79m、深さ0.18~0.32mを測る。

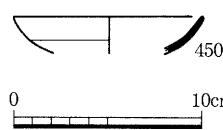
出土した遺物には土師質皿(445)があった。

(2) 遺物出土ピット

〔SP 7〕(第58図)

SP 7

SP 7は調査区中央南側で検出された。直径0.25m、深さ0.1mのピットである。



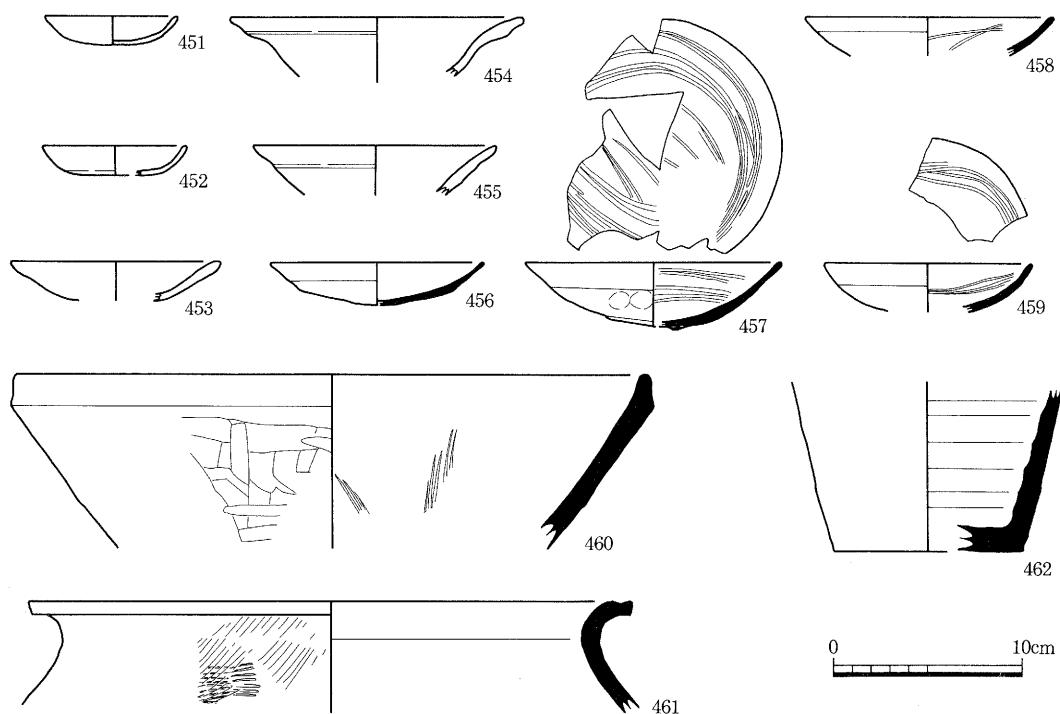
第58図 SP 7 出土遺物実測図

出土した遺物には瓦器塊(450)があった。

(3) 包含層(第59図、図版20)

包含層

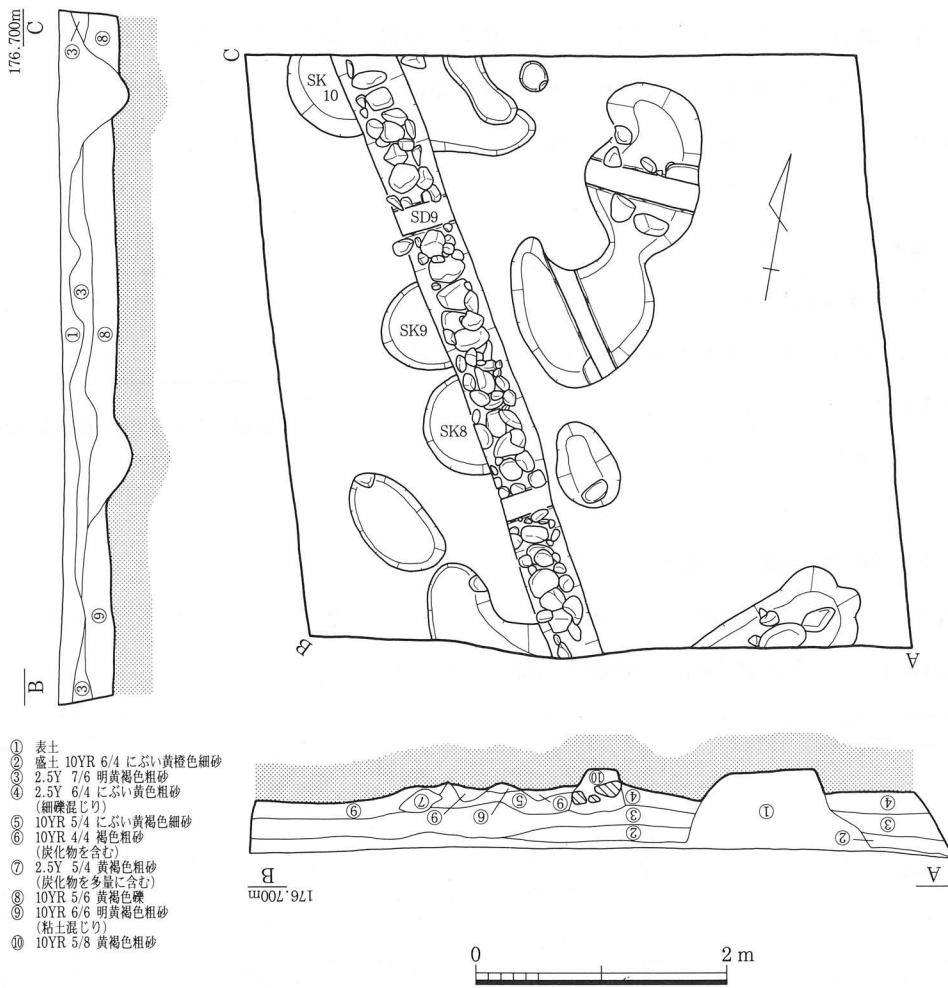
包含層から出土した遺物には土師質皿(451~455)、瓦器塊(457~459)、瓦質皿(456)、瓦質擂鉢(460)、瓦質甕(461)、褐釉壺(462)があった。



第59図 包含層出土遺物実測図

第9節 第9調査区

第9調査区(第60図、図版11)は9つの調査区のうち最も北側に位置する。第8調査区とは10m弱しか離れておらず、絵図でも同じような地点にあたると思われる。当調査区では溝が1条、土坑が3ヵ所検出された。



第60図 第9調査区 遺構配置図および土層断面実測図(1/60)

(1) 溝

SD 9 [SD 9]

SD 9は調査区を北側から南側にかけて横切り、両端は調査区外に及ぶ。内部には川原石が詰められており、暗渠として利用されたものと考えられる。遺構の規模は、検出長5.08m、検出幅0.38~0.49m、深さ0.06~0.23mを測る。内部の川原石は最大のもので24×20×12cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

[SK8] (第61図)

SK8

SK8は調査区中央西寄りで検出された。遺構の東側はSD9に切り込まれ、半円形を呈しているが、元は円形を呈する土坑であったと思われる。規模は検出径で0.83m、深さは0.2mを測る。

遺物は出土しなかった。

[SK9] (第61図)

SK9

SK9はSD9と同じ軸で、SK8の北側に検出された。SK8と同じく遺構の東側をSD9に切り込まれ、半円形を呈しているが、元は円形を呈する土坑であったと思われる。規模は検出径で0.75m、深さは0.2mを測る。

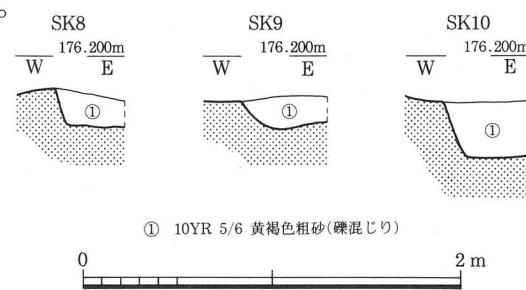
遺物は出土しなかった。

[SK10] (第61図)

SK10

SK10は調査区北西隅で検出され、SK8や9と同じ軸上に位置する。北側は調査区外に及び、東側はSD9に切り込まれているため、北側の欠けた半円形を呈するが、元は円形の土坑であったと思われる。規模は検出幅0.7m、深さ0.25mを測る。

遺物は出土しなかった。



第61図 SK8～10遺構断面実測図(1/40)

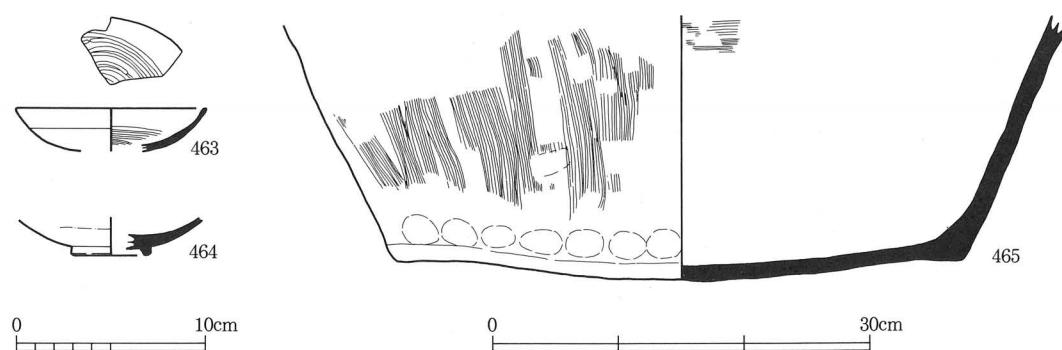
以上3ヵ所の土坑は規模、形態から第7調査区で検出されたものと同様の埋甕遺構であった可能性が考えられる。

(3) 包含層(第62図)

包含層

包含層から出土した遺物には瓦器塊(463)、備前甕(465)、唐津碗(464)があった。

(465)については底部が復元できた。その形態は第7調査区で出土した甕(428～432)に近似する。



第62図 包含層出土遺物実測図

第3章 出土遺物

(1) 土師質土器

皿 1類から4類に大別できる。

1類は第2調査区N V 2出土の(67・69)、第5調査区包含層出土の(396)で、平底の底部から外上方に内弯気味に立ち上がる。胎土は緻密で白色を呈する。

2類は第1調査区包含層出土の(5)、第6調査区包含層出土の(413・414)や第7調査区S L 3出土の(434)で、体部下半部は指オサエの後、ナデを強く施して内弯させ、反対に体部上半部はナデが弱く、器壁が厚い。胎土は緻密で、白色から薄い黄白色を呈する。

3類は、第2調査区N V 2出土の(70~74)である。形態面から2つに分類できる。3類-Iは(70)で、形態的には皿というよりも壺で前述の1類に似るが、胎土が粗く、褐色を呈し、体部下半部の内弯が弱い。3類-IIは(71~74)で、形態的には壺に近い。底部から口縁部まで内弯しながら伸びる。

4類は、最も多く出土しているもので、第2調査区N V 2出土の(17~66)や第5調査区包含層出土の(371~382・384~395)がある。平底の底部から口縁部が短く屈曲し外傾するものである。口縁端部の仕上げに若干の違いが見られ、細分化の余地がある。

土釜 第2調査区N V 2出土の(149)は、口径18.0cmを測る。口縁部は内弯しながら伸び、端部は上方に撮み上げられ、丸く収められる。体部外面にはヘラケズリ、内面はナデを施す。菅原編年では河内J型に相当するものと思われる。外面には煤が付着しており使用の痕が認められる。

同じく第2調査区N V 2出土の(152)は、口径29.6cmを測る。内傾して伸びる体部から口縁部が外反し、端部は上方へ撮み上げられる。摩耗が著しく調整手法は不明。紀伊型の土釜であると思われる。

瓦灯 灯火具である瓦灯は傘部と皿部に分かれるが、第7調査区S D 8出土の(424)は、傘部のみ出土した。径18.6cmを測る。表面には丁寧にナデが施され、裾部と胴部にそれぞれ1条ずつ沈線をめぐらす。胴部には採光のための長方形の窓が入る。

(2) 瓦器

皿 1類と2類に分けることができる。

1類は第6調査区包含層出土の(415)である。口径10.4cmを測る。法量の割に器壁は厚い。平底の底部から口縁部がほぼ直に外上方に伸びる。口縁部内面に粗い暗文が認められる。後述する瓦質皿と違い、形態としては瓦器壺よりもむしろ土師質皿に似る。

2類は第5調査区N R 1出土の(199~208)と包含層出土の(287~299)である。口径7.7cm~8.6cm、器高1.1cm~1.9cm。器壁は厚く、内外面には丁寧にナデを施す。暗文は認められない。形態は1類と同じく土師質皿に似る。IV-1・2型式の瓦器塊と共に伴する。

塊 全調査区から出土し、尾上編年でIII-3からIV-5型式に相当する資料が得られた。高台の有無によって大きく2つに分けて説明する。

高台が付くIII-3からIV-2型式までのものは、第5調査区N R 1出土の(209~259)である。これらの塊の内面にめぐらされる暗文の形態は数種あるが、特に見込み部に特徴的な形態が見られる。その形態から分類すると「連結輪状」、「平行線状」、「ジグザグ状」、「渦巻状」に分けることができる。^(註1)

連結輪状は体部内面の調整とは区分して、見込み部に連續した輪を描くもので、全体の比率から見るとその数は少ない。(215・225・235・242)に認められる。

平行線状は体部内面の調整とは区分して、見込み部に平行する線を何本も描くもので、最も多く見られる。(214・217~219・224・227~229・244・246・248・249・259)に認められる。

ジグザグ状は体部内面の調整とは区分して、見込み部に鋸歯状に線を描くものである。(220・231・245)に認められる。直線の折り返し点が鈍角をなすもの(220)と鋭角をなすもの(231・245)に細分することができる。

渦巻状は体部内面と見込み部の暗文調整を区分せず、底部から口縁部に向かって円を描くように暗文を施すものである。個体数は非常に少ない。(222)に認められる。

これらの暗文調整のうち、渦巻状のものを除いた3種については、見込み部と体部内面を区分して調整を施しているが、これらは見込み部に暗文を施した後に体部内面に渦巻状の暗文を施している。

暗文調整の差違が何を示すのかは不明であるが、同一型式の瓦器のうちに複数の調整手法が見られるため、時期差・地域差をあらわすとは考えにくい。

成形手法については、連結輪状・ジグザグ状の塊については目立った違いはなかった。しかし平行線状の塊は口縁部の横ナデが強く、高台径の広いものが多い傾向が認められ、渦巻状の塊は口縁部の横ナデが弱い傾向がある。このことから調整手法の違いについては製作工人・集団の違いによるものであるという可能性を考えることができる。

高台が付かなくなるIV-3からIV-5型式までのものは第2調査区N V 2出土の(82~146)である。内面には粗い暗文が認められるが、先述したような特徴的な暗文は見込み部には認められない。底部から口縁部に向かって円を描く様に暗文を施す、いわゆる渦巻状の暗文調整が見られる。また、型式が下るに従って施文原体幅が広がる傾向がある。

(3) 瓦質土器

皿 尾谷分類^(註2)で2類および5類に相当するものが出土した。

2類のものは第7調査区包含層出土の(439)である。法量や形態はIV-4形式の瓦器に近似する。内面には丁寧にナデを施し、暗文は認められない。

5類のものは第2調査区包含層①出土の(156~160)、第7調査区包含層出土の(440・441)である。口径の広さと比較すると器高が低く、内面には粗いハケメが施され、部分的にナデが施される。

擂鉢 第8調査区の包含層から出土した(460)は、底部から口縁までの角度があまり開かないものである。外面は不定方向にヘラケズリを施す。

土釜 第2調査区N V 2出土の(151)は、口径22.0cm、鍔部径26.5cmを測る。口縁端部は上面のナデにより外方に突出する。鍔端部も、ナデによってつぶれた断面方形を呈する。体部外面にはナデの後に調整単位の狭いヘラケズリをヨコ方向に施し、内面は板状工具によって丁寧にナデが施される。鋤柄編年^(註3)の土釜C I-3に近似する。

第2調査区S P 1出土の(16)は、口径22.0cm、鍔部径29.1cmを測る。口縁部には3条の沈線がめぐらされ、内傾しながら伸びる。口縁端部は内方に伸び、丸くおさめられる。鍔は水平に伸び、端部は丸みを帯びる。菅原編年では河内D₁型に相当する。

第7調査区S D 8出土の(422)は、口径24.0cmを測る。口縁部には3条の沈線をめぐらせ、わずかに内傾しつつ直立して伸び、端部は面を成す。鍔は上方に反り気味に伸び、断面台形を呈する。体部外面にはヘラケズリを横方向に施す。器壁は薄い。菅原編年では河内D₁型に相当する。

甕 第5調査区N R 1出土の(286)は、口縁部が強く屈曲し、外方に開く。口縁端部は方形を呈する。外面には平行タタキ、内面にはハケメおよび当て具痕が認められる。

火鉢 第7調査区S L 2出土の(436)は、方形の火鉢と思われる。口縁部には2条の凸帯の間に唐草文様をめぐらす。

(4) 須恵質土器

練鉢 第2、5調査区の包含層から出土した。口縁部外面はよく焼き締まり、重ね焼きしたものと考えられる。

第2調査区包含層出土の(153)は、内外面にナデが強く施されている。口縁端部内面には沈線が1条めぐらされる。口縁部は丸みを帯び、外面の張り出しあは最も大きい。内面には擦痕が認められる。

第5調査区包含層出土の(401)は、外面のナデが強く施されており、メリハリの利いた器表となっている。端部は上方に撮み上げられて収められる。

第5調査区包含層出土の(403)は、外面のナデが弱く、底部から緩やかに内弯しながら伸び、口縁端部は上方に撮み上げられ、断面三角形におさめられる。胎土は粗く、1cmの大の小礫までを含む。

(5) 備前

甕 第7調査区S L 1～4出土の(428～432)、第9調査区包含層出土の(465)は、いずれもほぼ同じ法量で、完形に復元できた(428・429)は口径53.4cmから55.0cm、器高86.0cmから88.0cmを測る。法量から「一石半入」の甕と考えられる。口縁端部は玉縁に仕上げられている。(429)の口縁部内面には縦に3本の直線がヘラ状工具のようなもので書かれている。また、(428)の体部内面には細かい打痕の様なものが多数認められる。

これらの甕は間壁編年でIII期のものに相当する。

(6) 肥前系陶磁器

唐津系陶器壺 第5調査区包含層出土の(397)は、高台を断面台形に削り出しており、全面施釉で、畳付け部分のみ露胎である。第9調査区包含層出土の(464)は、底部のみ残存している。高台は断面方形に削り出しており、底部から高台にかけては露胎である。外面の施釉部は焼成不良のため白色を呈する。

京焼風陶器壺 第6調査区S P 5出土の(411)は、底部のみ残存する。高台を台形に削り出しており、底部から高台にかけて露胎である。見込み部に鉄絵を施す。

(7) 褐釉陶器

壺 第8調査区包含層出土の(462)は、底部のみ残存する。体部は平底の底部からほぼ直に立つ。全面施釉だが底面外周は焼成時に剝がれたらしく、露胎である。

(8) 磁器

白磁皿 第6調査区包含層出土の(418)は、底部のみ残存する。畠付け部分には4ヵ所の抉りが入れられ、内面には抉りと同数の重ね焼き痕が残る。小野分類^(註4)で白磁皿B群に相当するものと思われる。

白磁小壺 第6調査区S K 5出土の(406)は、平底の底部に体部を貼り付けている。体部はわずかに内傾しながら外上方に伸び、口縁端部はそのまま台形におさめられる。口縁端部と底部は露胎である。

(9) 瓦

軒丸瓦 第2調査区包含層出土の(163)は、瓦当径14.2cmを測る。内区に右巻きの三ツ巴文、外区に珠文をめぐらす。巴文の尾部は長く伸び、珠文は小振りのものが密にめぐらされる。

雁振瓦 第7調査区 S D 8 出土の(425~427)、S L 1・2 出土の(437・438)は、全てほぼ同じ法量である。平均全長32.0cm、平均幅25.0cm、平均の厚み2.2cmを測る。外面は布目の上から板状工具でナデを施し、内面は中央部以外に丁寧にナデを施す。

(註1) 分類名で渦巻状を除いた3種については、下記論文を参考にさせていただいた。

渋谷高秀 「幾内及びその周辺地域における瓦器生産の展開 一ヘラミガキ文様を中心にしてー」

『中近世土器の基礎研究V』 日本中世土器研究会 1989年11月

(註2) 尾谷雅彦 「天野山金剛寺遺跡出土の土釜埋納土器について」

『河内長野市遺跡調査会報VII 天野山金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会 1994年3月

(註3) 鋤柄俊夫 「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開」

『中近世土器の基礎研究IV』 日本中世土器研究会 1988年11月

(註4) 小野正敏 「14~16cの染付碗、皿の分類と年代」

『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982年8月

第4章 まとめ

第1節 調査の成果

今次における天野山金剛寺遺跡の調査は、金剛寺南東の谷筋を流れる西除川右岸において行われたものとしては、3次目のものであった。しかし、過去の2次の調査^(註1)は西除川右岸の北端および南端にあたり、中心部においての調査は今次が初めてのものとなった。対岸にあたる西除川左岸でも2次にわたる調査^(註2)が行われており、塔頭跡と見られる遺構が検出されている。それらの塔頭は金剛寺に伝わる絵図、『金剛寺境内図』に見られるように西除川に沿って建ち並んでいたものと考えられ、今次の調査においてもその塔頭跡の確認が目的の一つとして挙げられた。

また、金剛寺が南北朝の動乱に巻き込まれ、14世紀代に2度の兵火によって坊舎を焼失した際に形成された焼土層が現在までの調査で検出されている。今次の調査においてもこの焼土層の層位的な把握が重要視された。

調査は、西除川に沿って狭小な調査区を9ヵ所に設定したため、遺構の面的な把握が完全にはできず、各調査区間の関連性は不明瞭であった。しかし、石組み遺構や埋甕、建物跡など、寺に関する建造物と見られる遺構が検出されたことにより、絵図に見られるように金剛寺南東の谷筋の西除川右岸においても塔頭が広がっていたことを証明することとなった。

また、第2調査区全面で2層の焼土層が確認された。2層のうちの下層にあたる焼土層2は14世紀代の遺物を包含している。同様な焼土層は第7調査区においても検出されており、遺物から見てほぼ同時期にあたるため、文献に残る14世紀の火災によって形成されたものと考えられる。

遺物は13世紀代から17世紀代までのものが出土したが、年代分布の中心は鎌倉時代後期から室町時代前期にかけてのもので、年代観としては13世紀中頃から14世紀後半頃をあてることができる。

遺物の大量出土を見た第2・5調査区の瓦器塊の比較では、第2調査区ではIV-2型式からIV-5型式に相当するものが出土し、中心となるのはIV-4型式である。それに對し、第5調査区ではIII-3型式からIV-4型式に相当するものが出土し、中心となるのはIV-2型式である。第5調査区で検出されたSE2では、IV-1・2型式に相当するものが埋土上面から出土しており、廃絶時期の下限を考える上での資料となっている。

第2節 考 察

1 第2調査区で検出された焼土層について

第2調査区では、焼土層が上下に2層(上層から焼土層1=包含層①、焼土層2=包含層②)検出された。それぞれ0.15~0.2mの層厚を持っており、火災によって形成されたものと見られる。検出状況から見ると、上層遺構面で検出された建物礎石が焼土層2の上面に据えられていたこと、礎石が火を受けていることから、焼土層を形成するような火災が2度あったことは確かであると思われる。

遺物面から見ると、焼土層1からは尾谷分類で5類に相当すると思われる瓦質皿が出土しており、年代観は15世紀前半頃となる。焼土層2からは瓦質皿は出土せず、瓦器が数点出土した。それらは尾上編年でIV-2・4型式に相当するものであり、年代観としてIV-4形式を下限とした14世紀中頃が考えられる。また、焼土層2の下層に整地層だと考えられる⑬層があるが、そこから出土した瓦器はその85%がIV-3・4型式である。このことから焼土層2と⑬層の形成時期には大きな差違はないものと思われる。しかし、2層の焼土層の間には少なくとも半世紀以上の時期差があると思われる。

文献面から見ると金剛寺における焼失記録は、僧禪恵の奥書から14世紀代の南北朝時代に2度表れている。最初は延元2年(1337)10月19日に、幕府方の武士乱入により、坊舎を焼失している。次には正平15年(1360)3月17日に、幕府方の攻撃で大門と坊舎30余坊を焼失している。

遺物の年代観から、焼土層1は文献に記された14世紀代の火災にはあてはまらない。しかし、下層の焼土層2は14世紀中頃に形成されたものと見られ、焼失記録に該当する。

現在のところ、この焼土層2が延元2年のものか正平15年のものは不明である。しかし、正平15年の坊舎焼失の記録では中心伽藍より北側に被災が集中しており、この南側の被災は延元2年の可能性がある。

これまでの調査で、同一調査区内において14世紀代の焼土層が2層検出された例はない。今後、そのような例が発見されることになれば、焼土層の実年代の確定も可能になると思われる。

2 天野山金剛寺遺跡出土の埋甕遺構について

第2章で第7調査区の埋甕遺構について説明したが、本章ではその用途について考える。

検出状況を見ると、甕を据える土坑の掘方が浅く、甕上部が遺構面よりも上に出ること、一度設置した甕を抜き取った形跡のあること、遺構の間隔がきわめて狭いこと、大型の「一石半入」の備前甕が用いられていること、骨片などが出土しないことから貯蔵甕としての用途が考えられる。

当遺跡では1974年度に第7調査区の南側30mで調査が行われ、その際にも埋甕遺構が検出された。^(註3)今回検出したものより規模が大きいことを除けば、検出状況は非常に近似している。当時はこれらを火葬場および墓地であると推測し、埋甕遺構を甕棺、蔵骨器と考えられた。その主な理由として、遺構内に灰・炭・焼土が見られること、遺構が規則正しく並んでいること、刀子状の鉄製品の入った土坑があったことが挙げられる。

しかしながら遺構内の焼土については、今回の調査でも検出されている。焼土内に建材らしきものが認められ、調査区全体から焼土層が検出されていることから、火災によって形成されたものと考えられる。1974年度調査においても調査区で部分的にではあるが、焼土層らしきものが検出されており、遺物の年代観から14世紀の兵火によって形成された可能性もある。

遺構が規則正しく並んでいることについては、土坑群はいくつかのグループに分けることができ、そのそれが貯蔵施設であったとも考えられる。

また、『金剛寺境内図』を見ると、付近は境内南側の塔頭群の中心にあたることになる。そのような場所に墓地を設定するというのは考えにくい。

今となっては、当時の調査について十分に窺い知ることはできないが、このとき検出された遺構群が墓地ではなく、何らかの貯蔵施設であった可能性も考えることができる。

中世の金剛寺では名産品として天野酒の醸造が行われていた。1974年度調査で検出された遺構群を貯蔵施設と考えると、今次調査で検出された資料と合わせて、天野酒の醸造工房として捉えることもできると思われる。

(註1) 1992年度調査 (KG T92-1)

『河内長野市遺跡調査会報VI 金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会 1993年3月

1992年度調査 (KG T92-3 第4調査区)

『河内長野市遺跡調査会報VII 天野山金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会 1994年3月

(註2) 1974年度調査

『天野山金剛寺 中世墓地発掘調査』 金剛寺坊跡調査会 1975年2月

1992年度調査 (KG T92-3 第1~3・5・6調査区)

『河内長野市遺跡調査会報VIII 天野山金剛寺遺跡』 河内長野市遺跡調査会 1994年3月

(註3) 『天野山金剛寺 中世墓地発掘調査』 金剛寺坊跡調査会 1975年2月

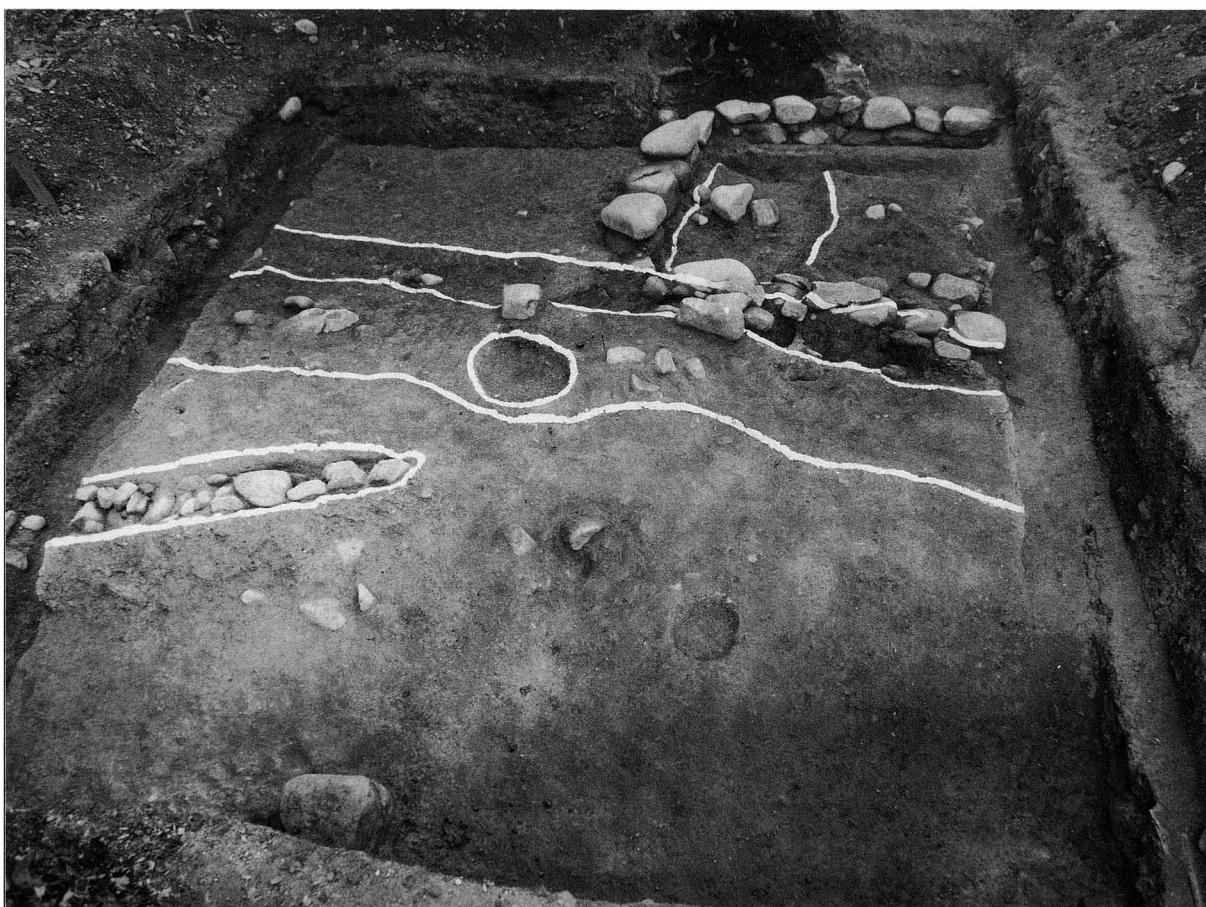
報 告 書 抄 錄

ふりがな	あまのさんこんごうじいせき
書名	天野山金剛寺遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査会報Ⅺ
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	Ⅺ
編著者名	尾谷雅彦 中尾智行
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
あまのさん 天野山 こんごうじ 金剛寺遺跡	おおさかふかわちながのし 大阪府河内長野市 あまのちょう 天野町	27216	府16 河14	34° 25" 26	135° 32" 02	1995.2.1 1995.3.29	290m ²	府営長野公園キャンプ場の機能復旧工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天野山 金剛寺遺跡	社寺	中世	掘立柱建物 1棟 礎石建物 1棟 石列 1ヵ所 埋甕遺構 4基 井戸 2基	土師質土器 瓦器 瓦質土器 須恵質土器 陶磁器	

図版



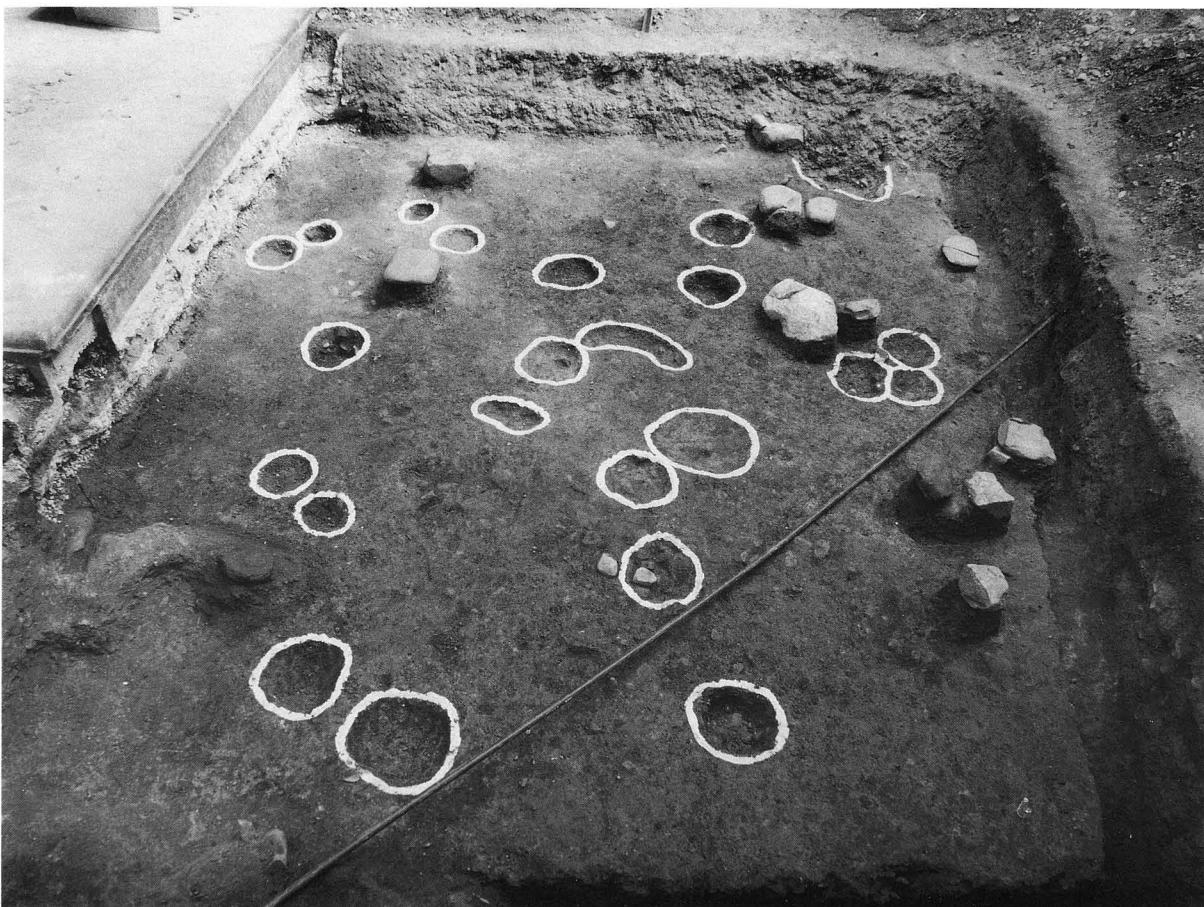
第1調査区全景（北西から）



第1調査区全景（南から）



第2調査区全景（北西から）



第2調査区全景（南西から）

第3調査区全景
(北西から)
→



第3調査区全景
(南東から) ↓

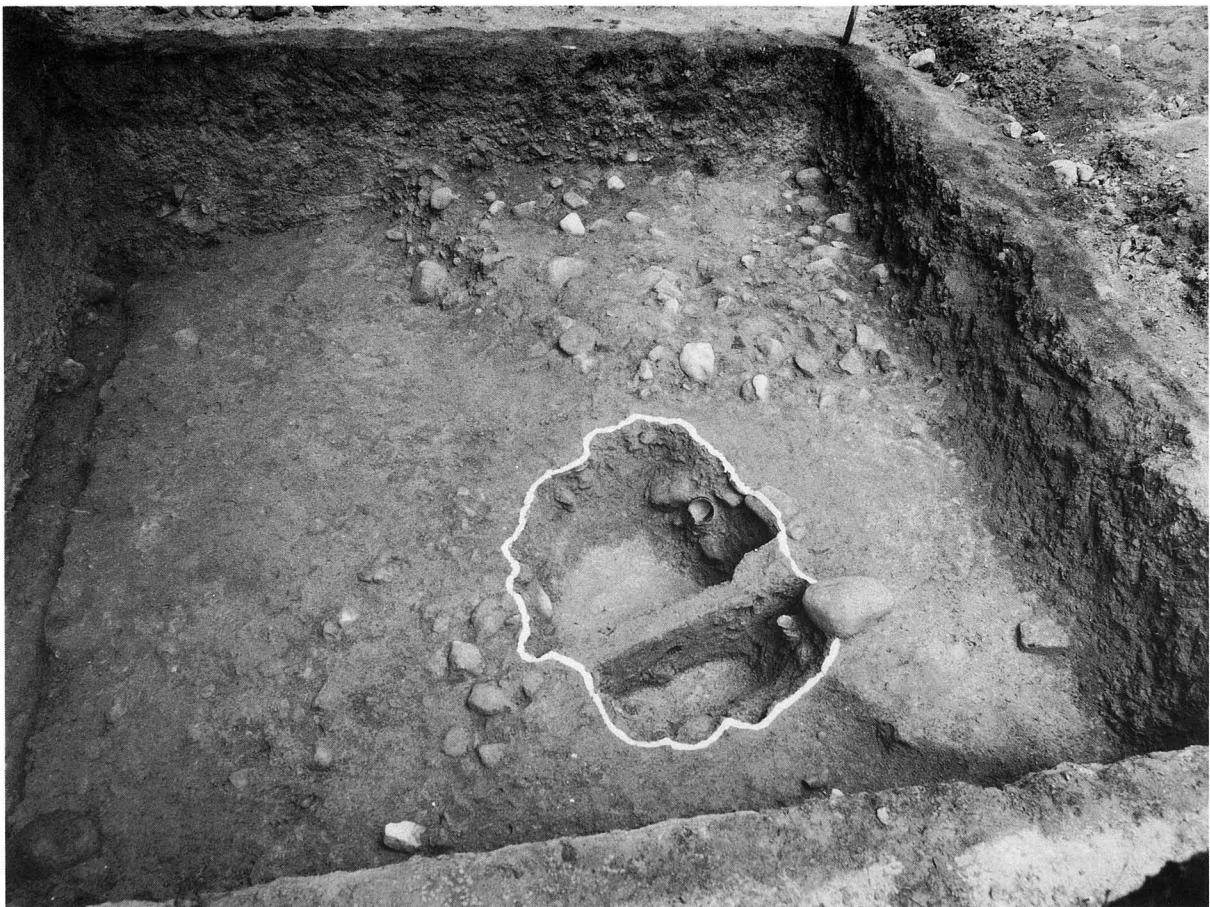




第4調査区全景（北から）



第4調査区全景（南から）



第5調査区全景（南東から）



S E 2 (南から)



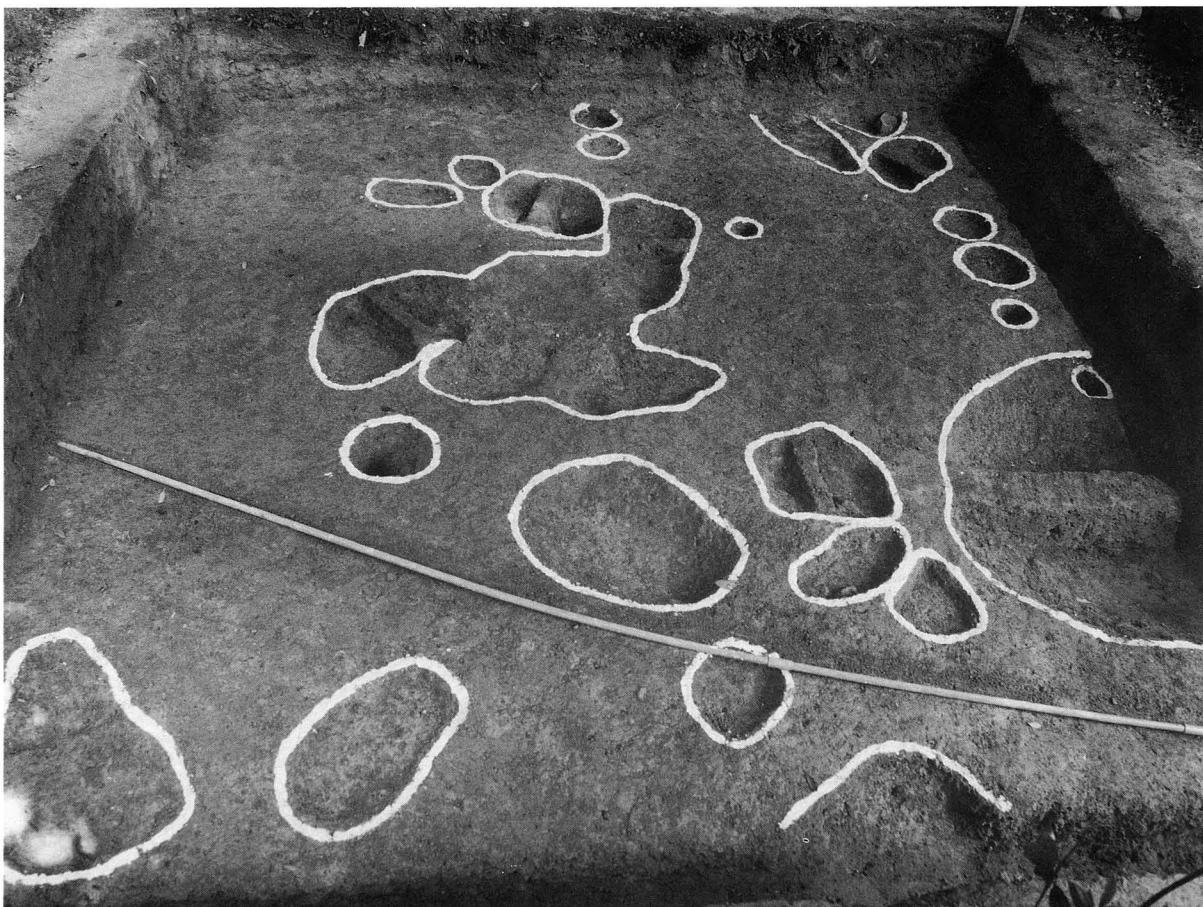
S E 2 遺物出土状況



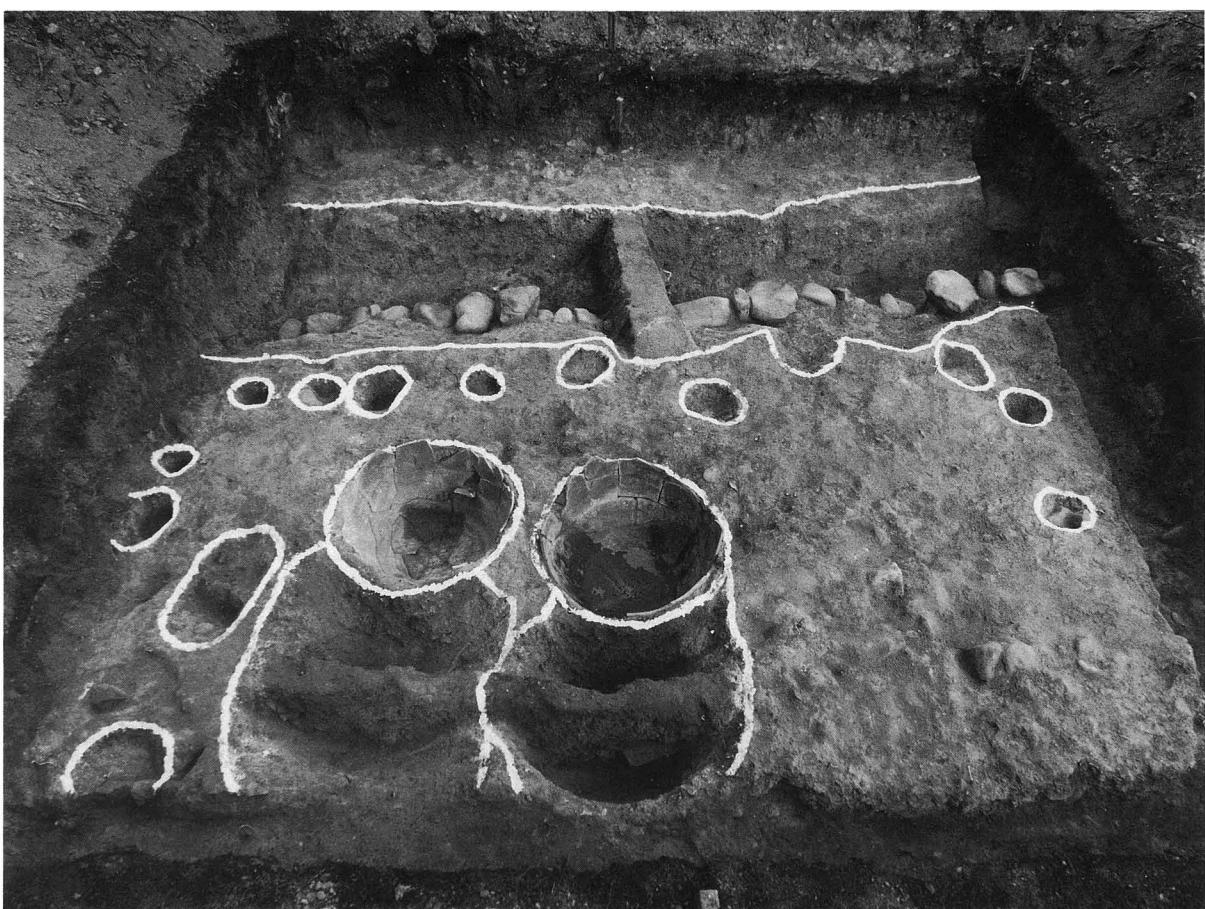
N R 1 遺物出土状況（南西から）



第6調査区全景（北西から）



第6調査区全景（南西から）



第7調査区全景（北西から）



第7調査区全景（北東から）



S D 8 (北東から)



S L 1・2 (西から)



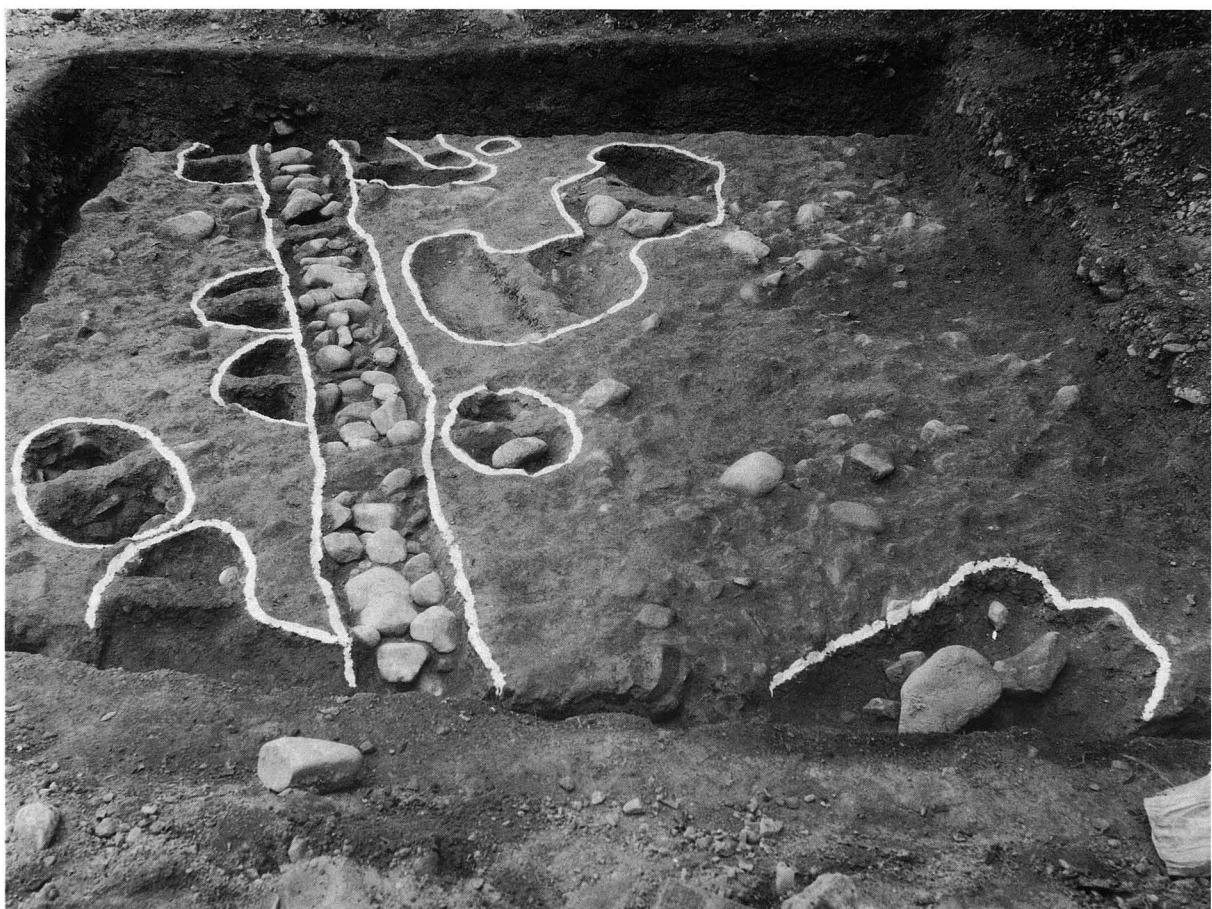
S L 2 (南東から)



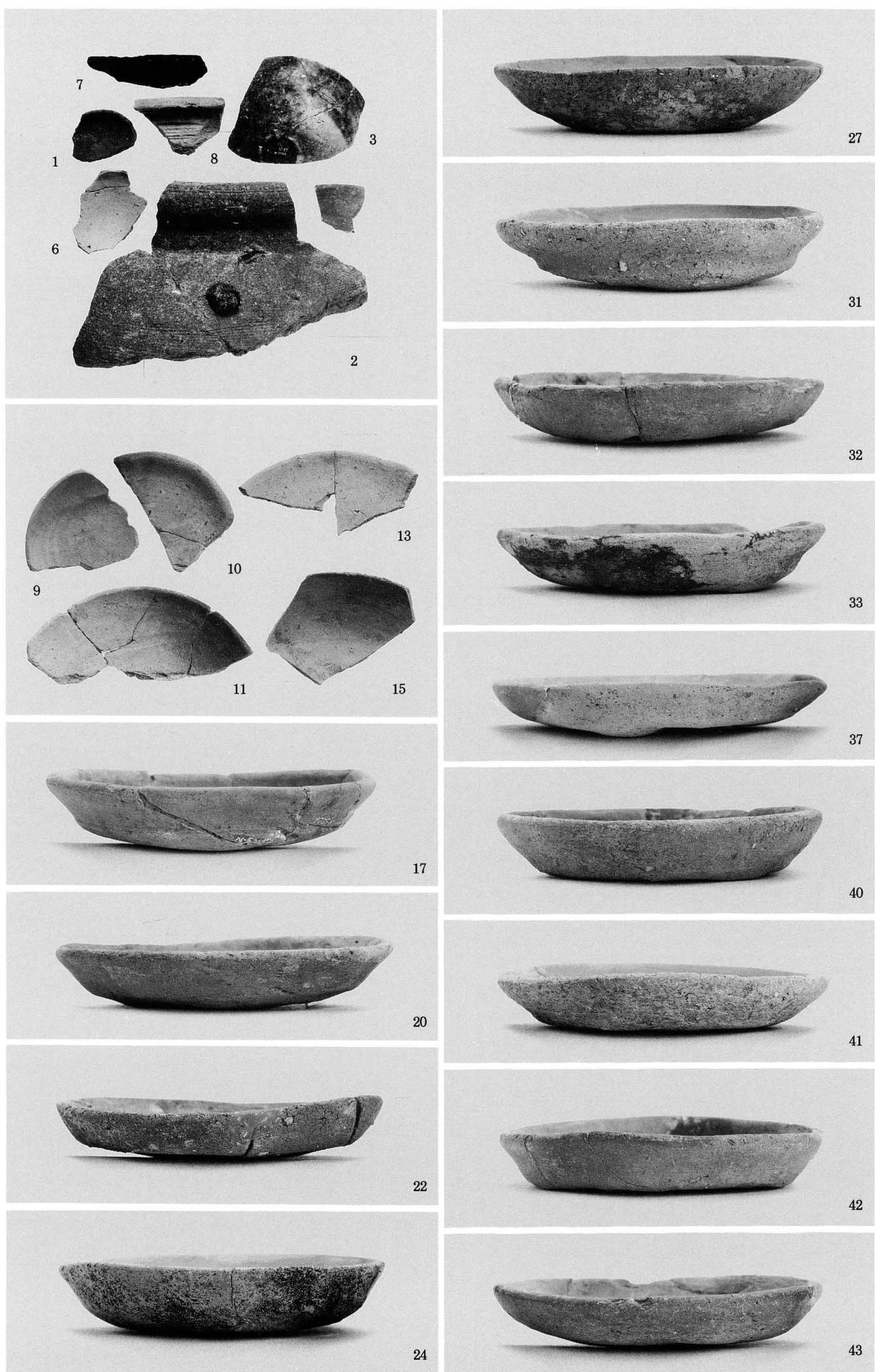
第 8 調査区全景 (西から)



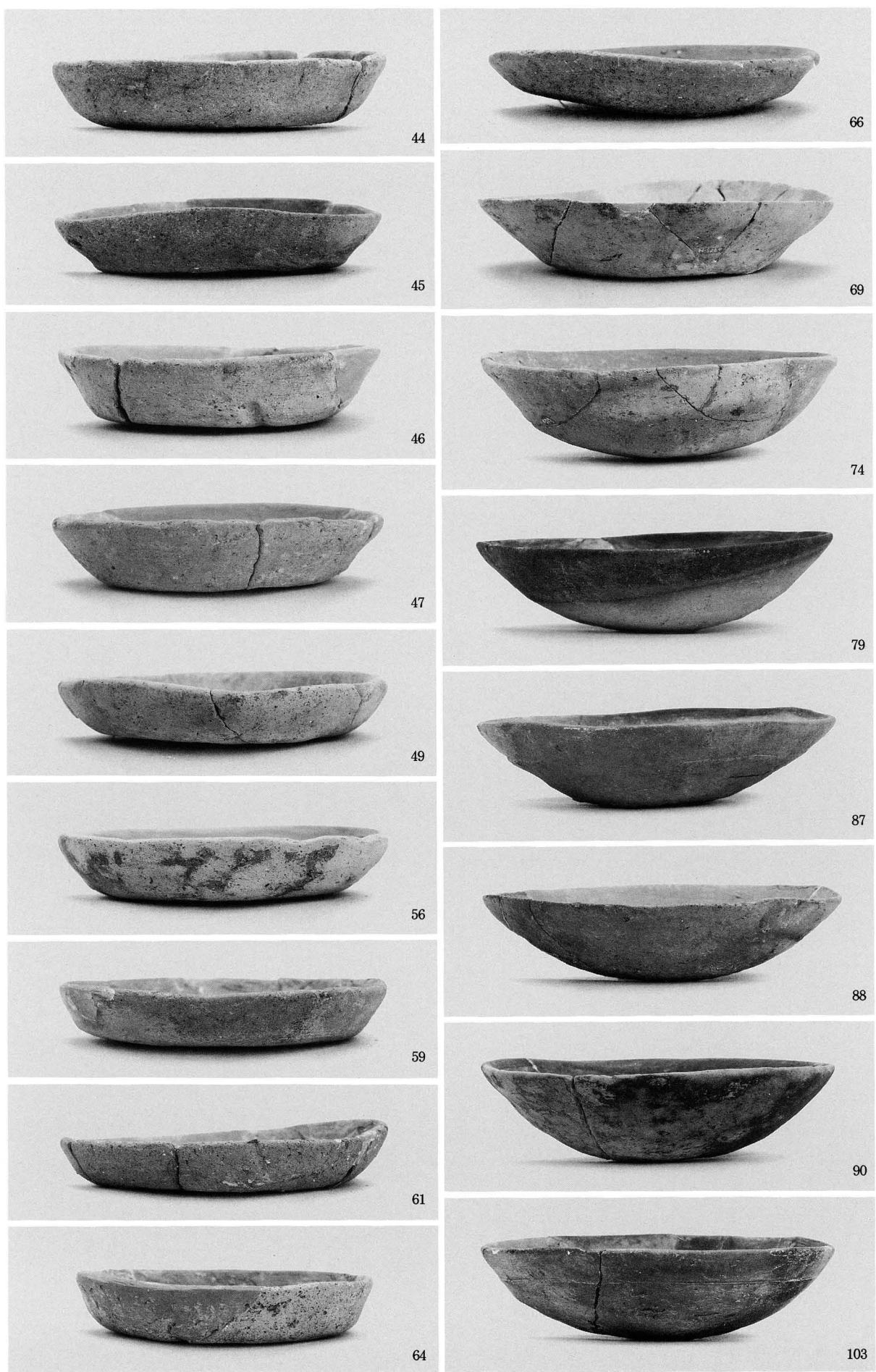
第9調査区全景（西から）



第9調査区全景（南から）

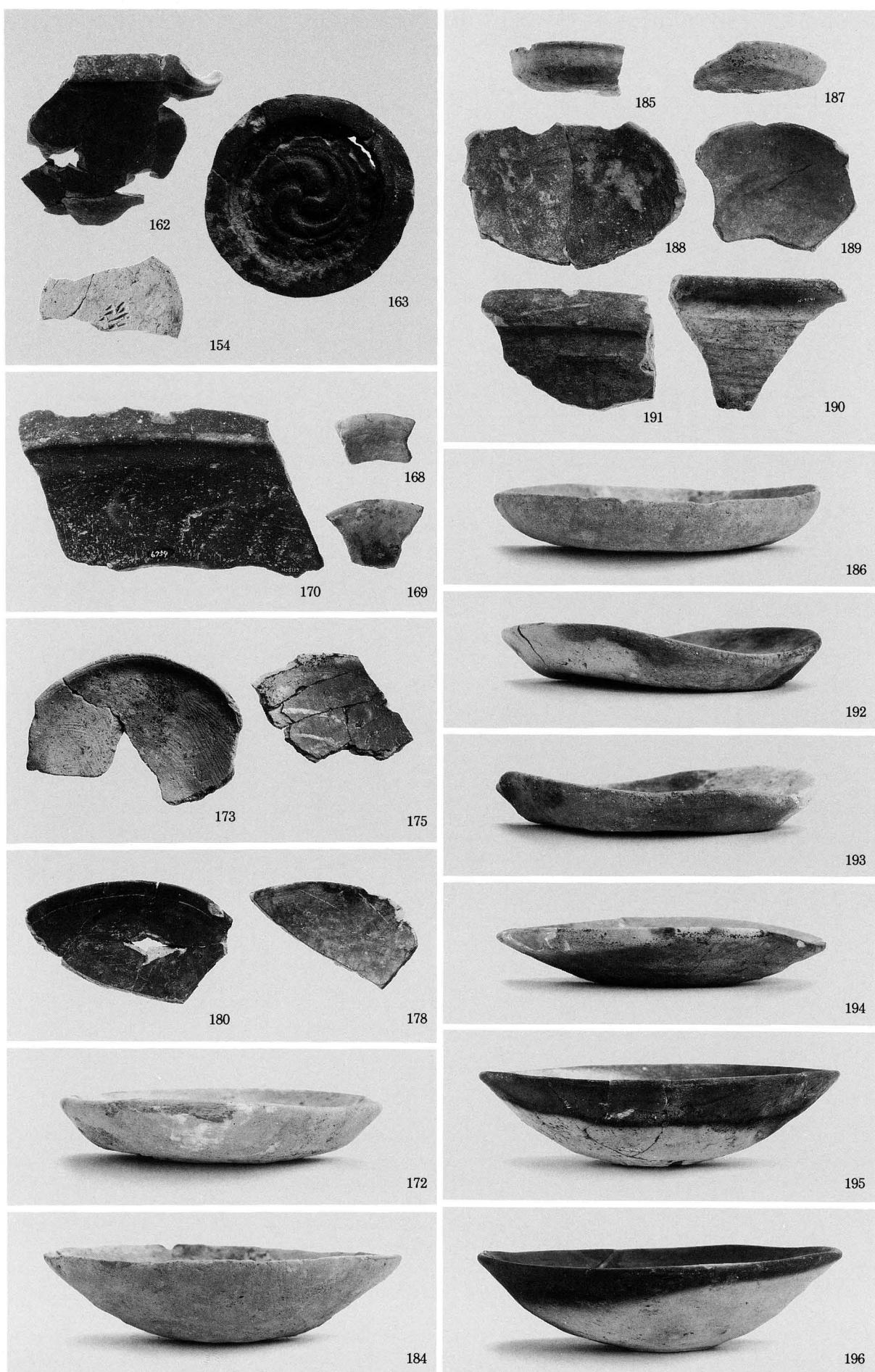


SW1 (1・2)、NV1 (3)、第1調査区包含層 (6～8)、SP2 (11)、SP3 (9・10・13・15)、NV2 (17・20・22・24・27・31～33・37・40～43)

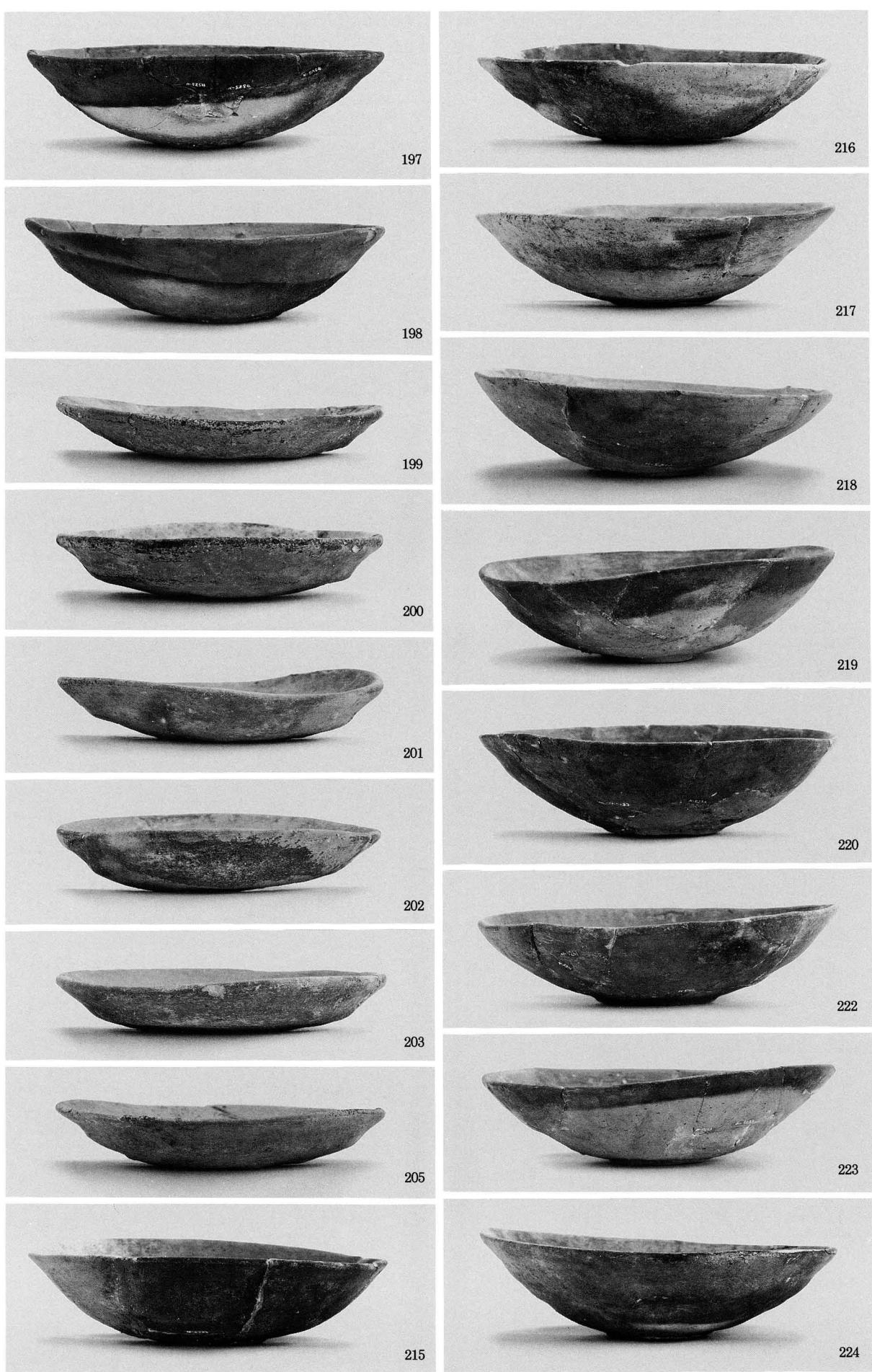




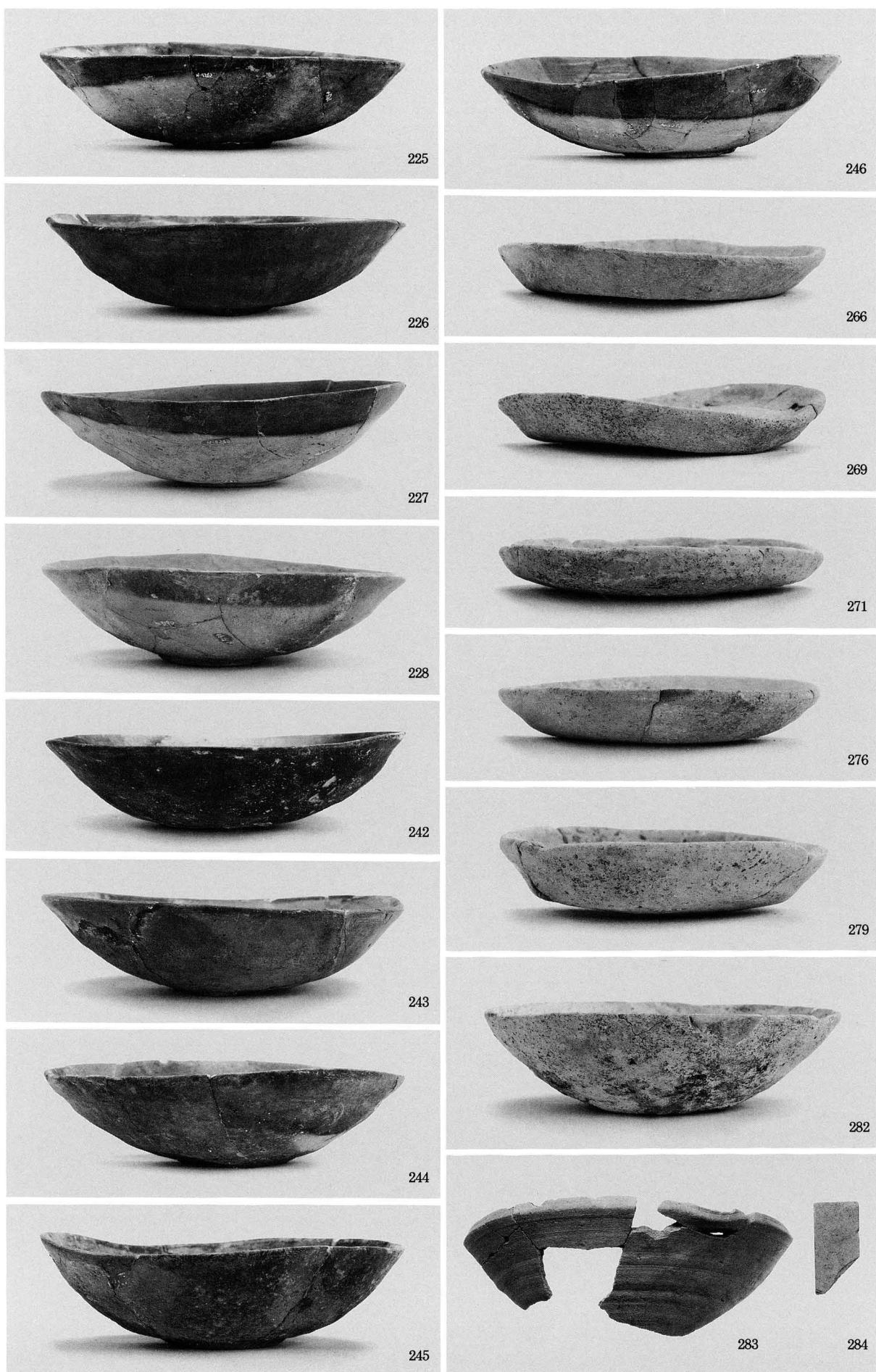
N V 2 (104~106 • 108~110 • 131~134 • 147~153)



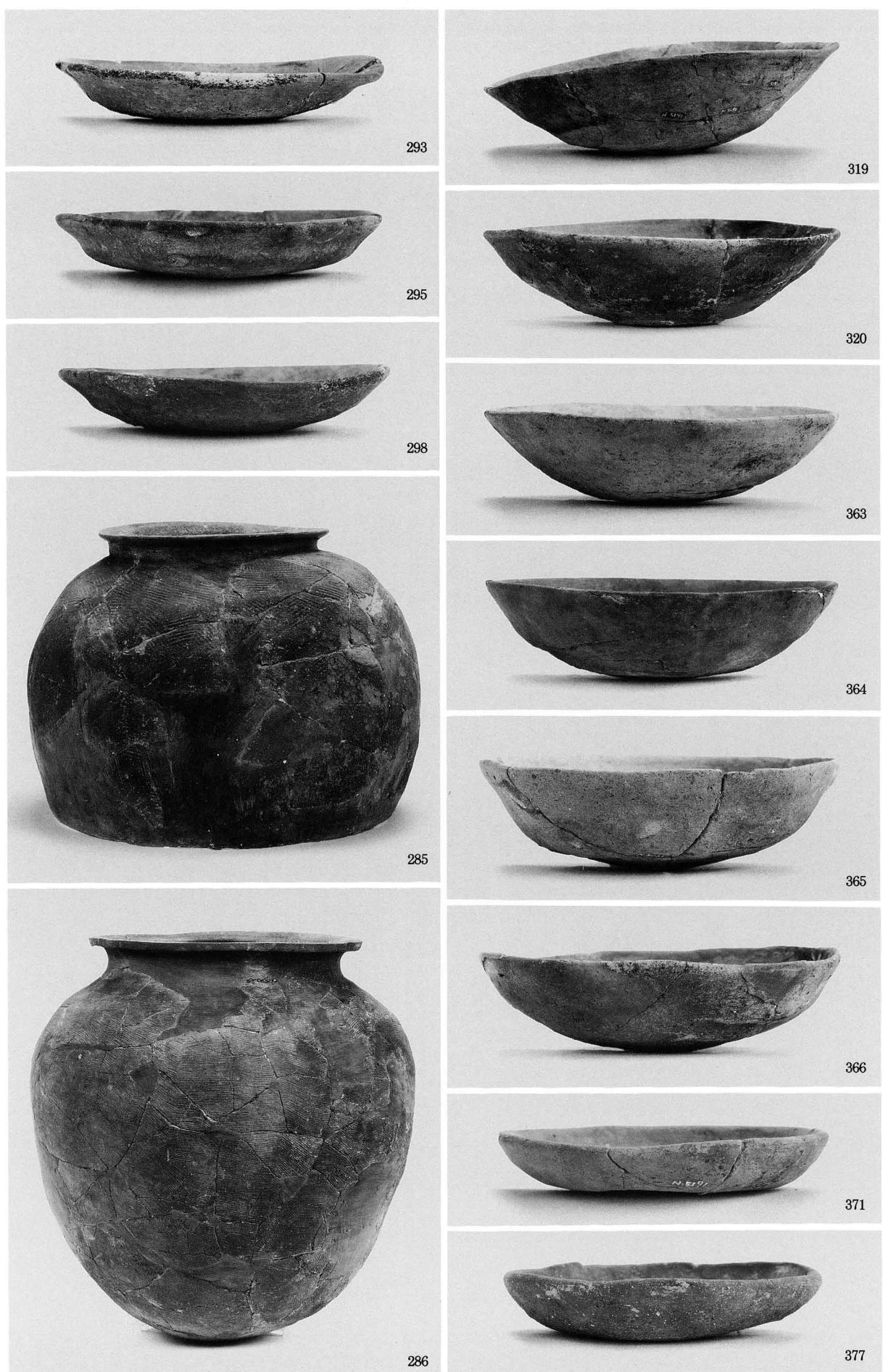
第2調査区包含層① (154・162・163)、S E 1 (168)、第3調査区包含層 (169・170)、S D 3 (175)、S D 5 (172)、S D 7 (173)、S K 1 (184)、S K 2 (178・180)、第4調査区包含層 (185~191)、S E 2 (192~196)



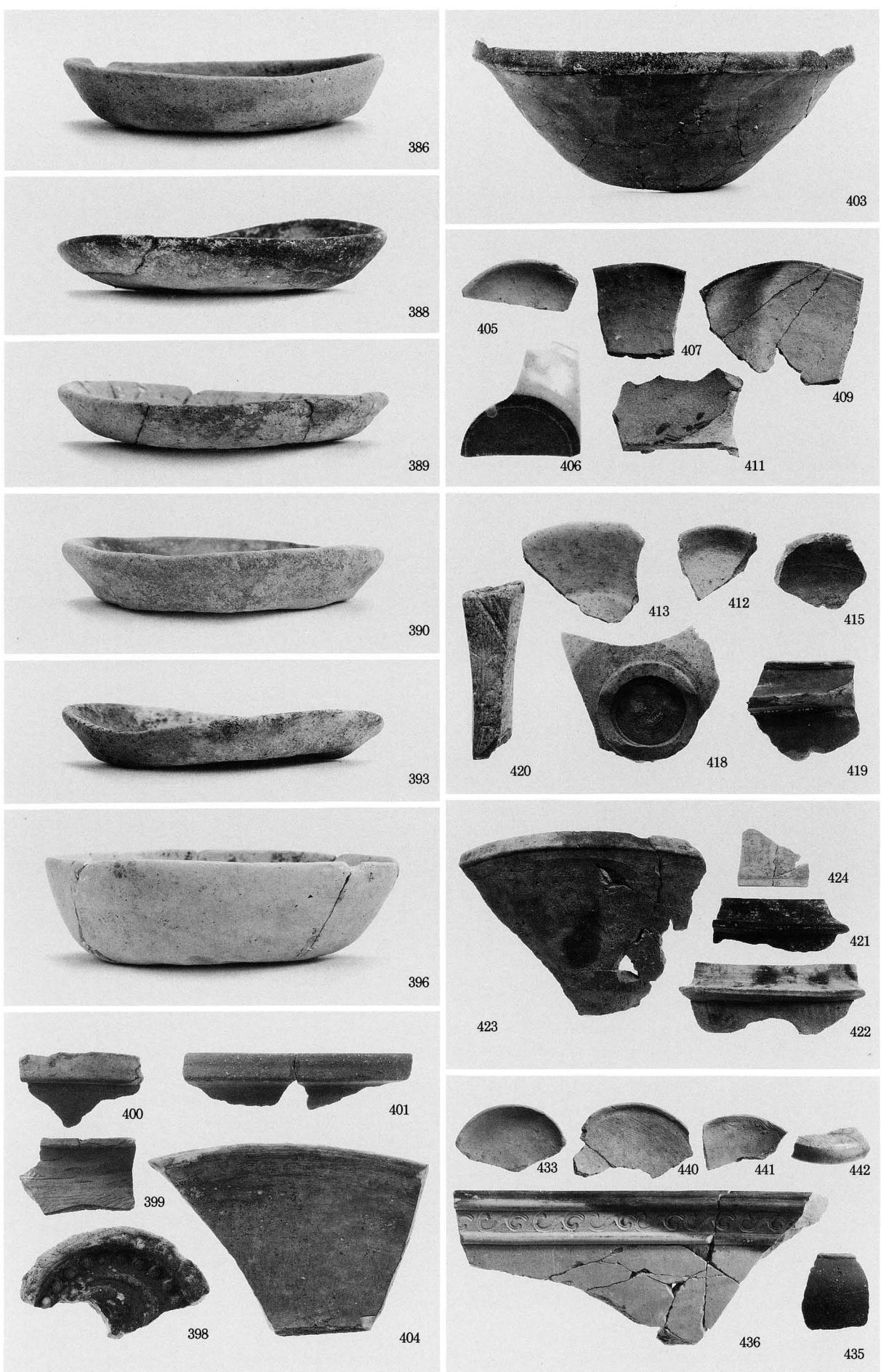
S E 2 (197・198)、N R 1 (199~203・205・215~220・222~224)



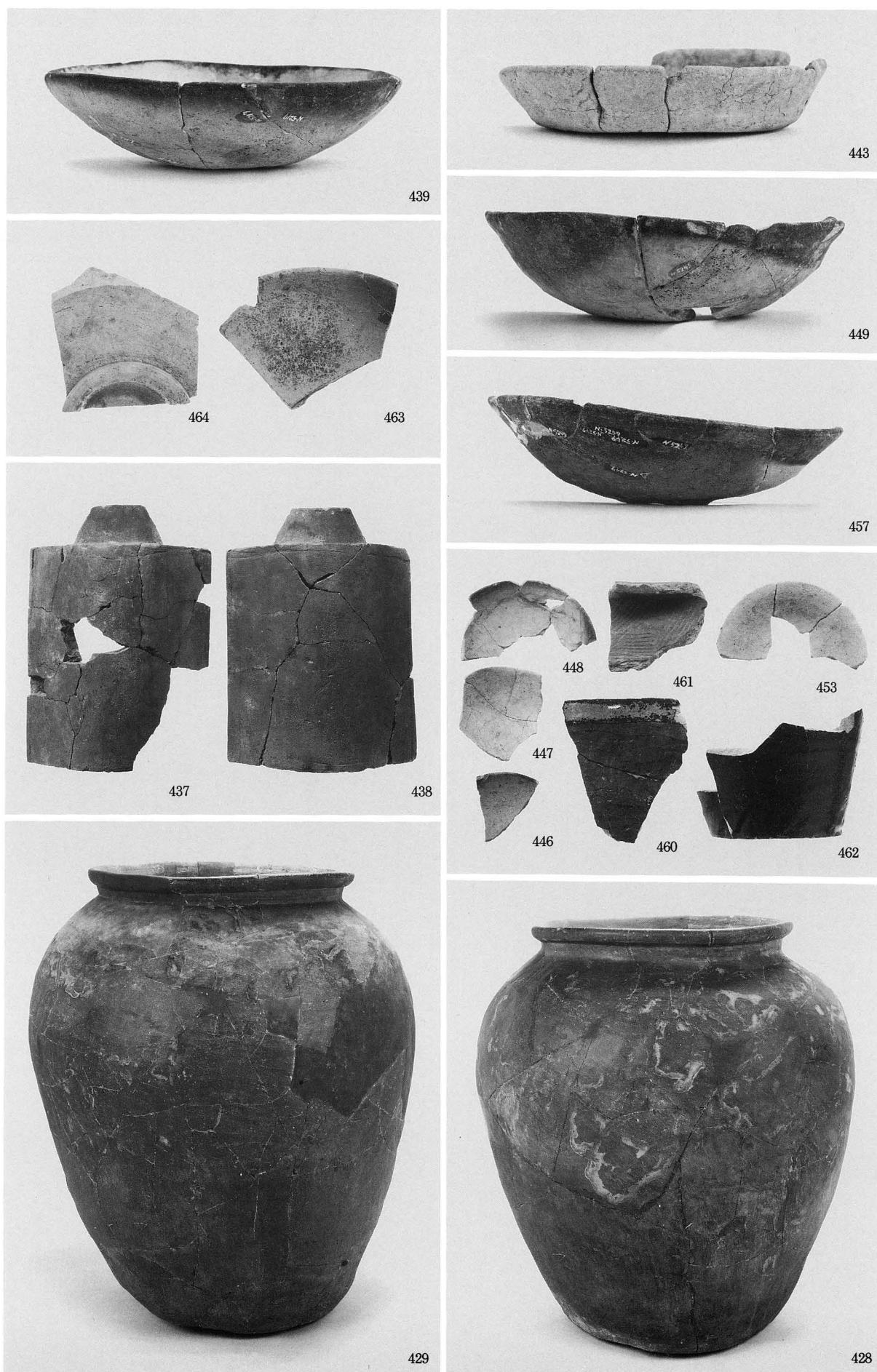
N R 1 (225~228・242~246・266・269・271・276・279・282~284)



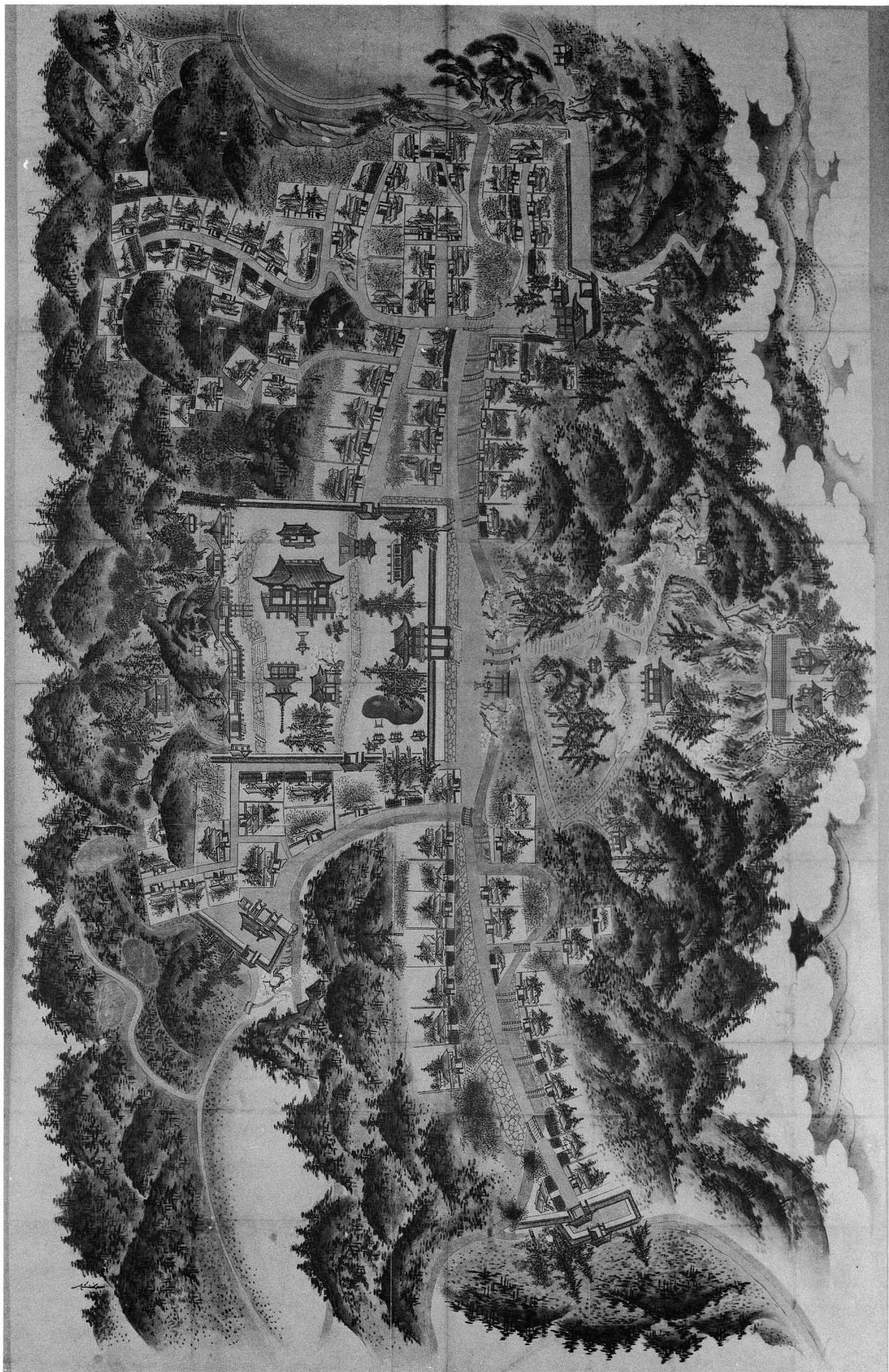
N R 1 (285・286)、第5調査区包含層 (293・295・298・319・320・363～366・371・377)



第5調査区包含層（386・388～390・393・396・398～401・403・404）、S K 5（405～407・409）、S P 5（411）、第6調査区包含層（412・413・415・418～420）、S D 8（421～424）、S L 2（436）、S L 4（433・435）、第7調査区包含層（440～442）



S L 1 (428・437)、S L 2 (429・438)、第7調査区包含層 (439)、S K 6 (443・446～449)、第8調査区包含層 (453・457・460～462)



金剛寺境内図

河内長野市遺跡調査会報
天野山金剛寺遺跡

1997年3月31日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3
河内長野市遺跡調査会
0721-53-1111
印 刷 株式会社中島弘文堂印刷所
